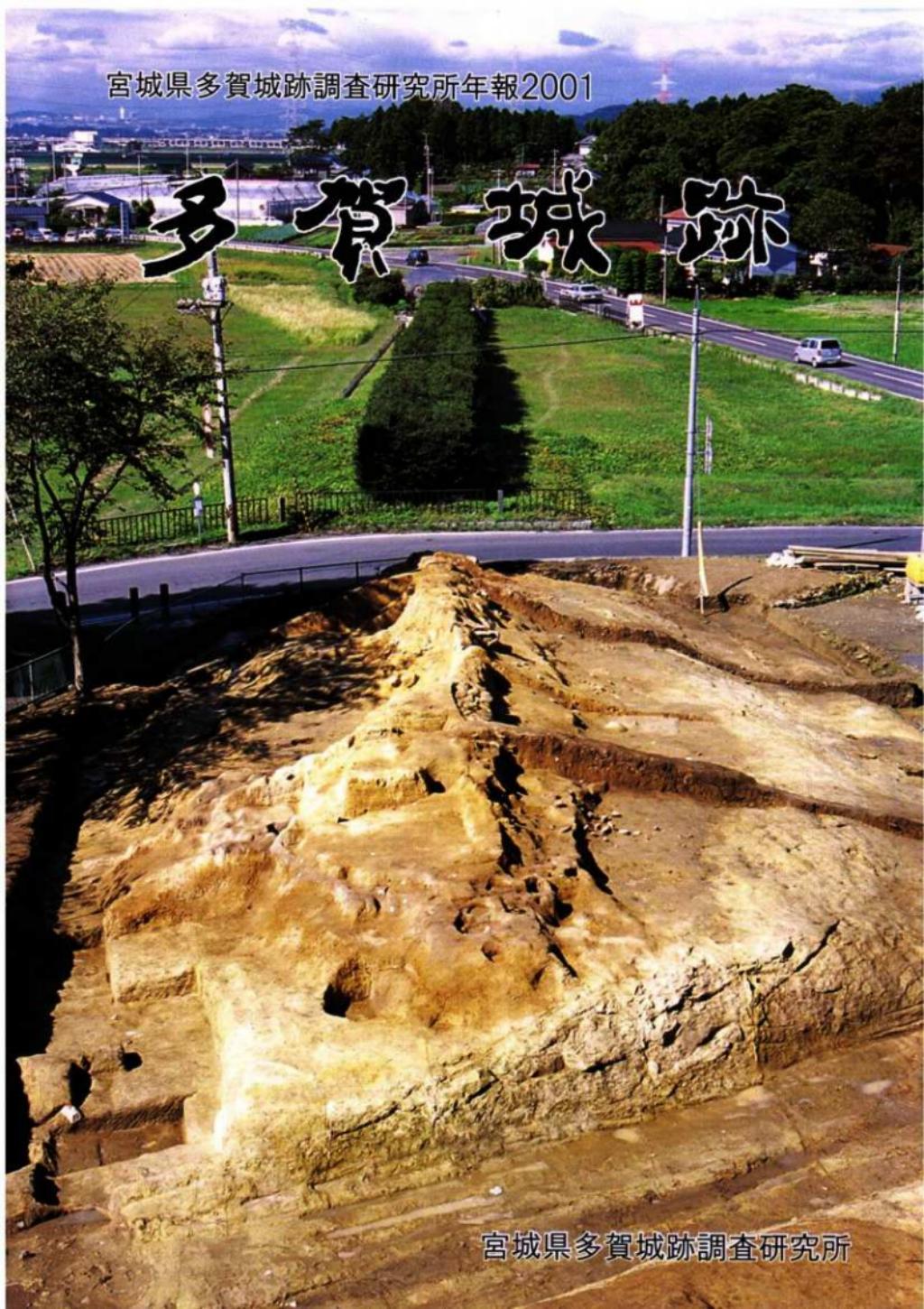


宮城県多賀城跡調査研究所年報2001

# 多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

## 序 文

当研究所は特別史跡多賀城跡の発掘調査に加え、昭和 45 年からは調査成果に基づいた環境整備も継続的に実施している。これまでに、政府地区、南門地区、作貫地区、東門・大畠地区など、おもに多賀城跡東半部を中心とした地域の整備を進めてきた、これにより、多賀城跡は少しづつ歴史公園としての体裁を整えつつあるが、いずれも部分的な整備にとどまっている。そこで、平成 7 年度には南門—政府間を重点整備地区として位置付け、多賀城市が実現を目指している多賀城南門の立体復元計画と一体となった面的な整備を行うことにより、野外博物館的な活用を図る計画を立案し、多賀城跡調査研究指導委員会の承認を受けている。

平成 10 年度から昨年までの政府南東に隣接する城前地区を対象とした調査はこの計画に沿って実施したものであり、南門政府間の東に位置するこの地区には、奈良時代から 10 世紀前半までの 5 時期にわたる変遷をもつ官衙が存在したことを明らかにした。とくに、奈良時代には 5 棟の建物が計画的な配置にもとづいて造営された重要な官衙地域であり、それらが宝亀 11 年(780)の伊治公告麻呂の攻撃によるとみられる大規模な火災によって焼失していることなどを把握した。

本年度からの 3 カ年は南門地区を対象とした調査を予定し、南門と南辺築地との接続状況、南門と南門—政府間を結ぶ道路および城外から南門に至る南北大路との取りつき方の解明などを行うことにしている。これらの調査により、南門の立体復元や南門—政府間道路復元整備の基礎的な資料はほぼ収集できるのではないかと考えている。

本年度の第 72 次調査はその最初となる調査であり、南門の西と北の状況について調査し、南辺築地や南門政府間を結ぶ道路の変遷などについて、いくつかの新たな知見を得ることができた。調査成果の詳細については本文に記したとおりである。

また、本書には当研究所が平成 7 年度から 10 年度にかけて実施した現状変更に伴う 8 件の調査結果も収録している。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げる次第である。

平成 14 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所  
所長 白鳥良一

## 目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第72次調査	
1. 調査の目的と経過	2
2. 地形と層序	4
3. 発見した遺構と遺物	7
4. 考察	31
III. 現状変更に伴う調査	
1. 多賀城跡五万崎地区	40
2. 多賀城跡大畑地区	49
3. 多賀城跡後山地区	58
4. 多賀城廃寺跡地区	59
IV. 付章	
1. 関連研究・普及活動	64
2. 組織と職員	68
3. 沿革と実績	69
写真図版	76
報告書抄録	

## 例 言

1. 本書は平成13年度に実施した多賀城跡第72次調査、平成7年度から平成10年度に実施した8件の現状変更に関する調査成果と、多賀城跡の環境整備、関連研究事業、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所のおこなう発掘調査と環境整備等の事業は多賀城跡調査研究指導委員会（委員長：芹沢長介）の指導と承認のもとに実行している。
3. 多賀城跡第72次調査の発掘調査体制、調査期間、調査面積は下記のとおりである。

調査 主体	宮城県教育委員会（教育長 千葉義弘）
調査 担当	宮城県多賀城跡調査研究所長 白鳥良一
調査 員	白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介
調査 期間	平成13年5月7日～平成14年2月28日
調査 面積	約1,000 m <sup>2</sup>
調査 参加者	三嶋 澄・金澤義孝・高橋 磨・黒井富士夫・阿部由利夫・猪俣信義・菊池輝夫・石川豊輔・沢田 健・後藤節子・鶴巻まき子・中村みつ江・千葉莉枝・佐藤寿子・伊藤とし子・佐久間広恵・高橋美江・山田由子・千葉さおり・竹ヶ原亜希・堺沢亜紀・島山未津留（東北歴史博物館解説員）・鈴木一景（東京芸術大学学生）王先平（敦煌研究院 考古研究所館員）・禹景准（東北大大学院）
4. 測量原点は政府正殿（S B150 B）の身舎南側柱列中央に埋設してある。この原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線は真北に対して1° 04' 00" 東に偏している。
5. 瓦の分類基準は多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 図録編』（1980年）、『多賀城跡 政府跡 本文編』（1982年）による。
6. 土色については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 1996年版』日本色研事業株式会社（1996年）にもとづいた。
7. 鉄製品の保存処理については、東北歴史博物館手塚均氏、及川規氏の協力を得た。
8. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
9. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』『宮城県遺跡調査成果発表会資料』『古代城柵官衙遺跡検討会資料』に紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
10. 本書は、白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介の討議・検討のもとに、I、II、IVを後藤、古川、白崎が、IIIを吾妻、白崎が執筆し、後藤、古川、白崎が編集した。

## I. 調査研究事業の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、多賀城跡の発掘調査計画について述べ、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査については、付章にその概要を収録した。

多賀城跡の発掘調査は、昭和 44 年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5 カ年ごとの計画を立案し、実施している。本年度は、平成 10 年 11 月の第 9 回多賀城跡調査研究現地指導委員会で承認された多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画（表 1）の 3 年度に当たり、外郭南門地区を対象に第 72 次調査を実施し、南門西側築地堀と政庁—南門間道路跡の様相を明らかにした。

年 次	発掘調査次数(対象地区)	調査面積	予算
平成 11 年度	第 70 次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	37,700 千円
平成 12 年度	第 71 次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	32,300 千円
平成 13 年度	第 72 次調査(南辺築地堀跡・政庁—南門間道路跡)	1,000 m <sup>2</sup>	28,900 千円
平成 14 年度	第 73 次調査(南辺築地堀跡・政庁—南門間道路跡)	1,500 m <sup>2</sup>	41,000 千円
平成 15 年度	第 74 次調査(政庁—南門間道路跡と東側の状況)	1,540 m <sup>2</sup>	41,000 千円
合 計	5 地区	8,040 m <sup>2</sup>	180,900 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画

(平成 13 年までは実績)

	氏 名	現 職	専門分野
委員長	芹沢 長介	東北福祉大学芹沢__(ケイ)介美術工芸館長	考古学
副委員長	須藤 隆	東北大教授	考古学
委員	青木 和夫	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委員	飯淵 康一	東北大教授	建築史学
委員	井手 久登	東京大学名誉教授	緑地学
委員	今泉 隆雄	東北大教授	古代史学
委員	岡田 茂弘	東北歴史博物館館長	考古学
委員	笹山 晴生	学習院大学教授	古代史学
委員	佐藤 信	東京大学教授	古代史学
委員	塩田 敏志	元東京人学教授	造園学
委員	坪井 清足	(財)元興寺文化財研究所所長	考古学
委員	樋崎 彰一	(財)瀬戸市埋蔵文化財研究センター所長	考古学
委員	町田 章	独立行政法人文化財研究所理事 奈良文化財研究所長	考古学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学

表 2 多賀城跡調査研究指導委員会委員名簿

## II. 第72次調査

### 1. 調査の目的と経過

#### (1) 調査の目的

多賀城跡外郭南門地区は、政庁地区から南に延びる緩やかな丘陵の南端にある（第1図）。

外郭南門地区では、これまで第7次調査（1969）と第48次調査（1985）の調査を実施し、南門とその東側築地壠の構造と変遷を明らかにしている。さらに、外郭南辺築地については、第8次調査（1970）・第20次調査（1973）・第34次調査（1979）で、低湿地に築かれた南辺築地壠の実態を明らかにしている。政庁から南に延び、外郭南門へ至る城内道路（以下、政庁—南門間道路とする）については、今回の調査区の北側で第43・44次調査（1983）、第50次調査（1987）の各調査を実施し、その構造と変遷を検討している。

第72次調査ではこれらの調査成果を踏まえ、外郭南門の西と北に調査区を設定した。調査の目的は南門西側の築地壠の構造と変遷をとらえることと、政庁—南門間道路の変遷と南門への取り付き方を検討することである。なお、南門地区を対象とした発掘調査は3年計画で実施する予定で、今年度はその初年にあたる。

#### (2) 調査の経過

第72次調査予定地内には雑木が点在していたため、4月24日から伐採を開始し、調査区内にあつた民家のコンクリート基礎などを除去した。5月28日にグリット設定と、器材搬入をおこなった。

5月29日からは北半部の民家跡地部分の遺構の残存状況を確認する目的で、「ヨ」字状のトレンチを設定し、表土除去を開始した。その結果、調査対象地北半部では、近代以降の大規模な整地の痕跡がみられ、西半部には厚さ1m以上の盛土がなされていることが確認された。このため、厚い盛土層をバックホウにより除去する作業を6月1・4・5日の3日間実施した。6月7日から遺構検出作業を調査区中央部より南に向けて行い、最後に調査区西側を行って、8月27日までには表土除去作業を完了した。次いで8月28日から遺構精査と並行しながら測量用の基準点を設置し、9月28日から1/20の遺構平面図の作成を開始した。9月4日から政庁—南門間道路の検出を目的として北東部の多賀城碑西側に拡張区を設定し精査を開始した。10月4日にはラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、10月12日にはタワーによる写真撮影を行った。10月16～26日に築地壠の断ち割り、断面図作成、断面写真撮影を行い、その後、補足調査を経て、2月28日までに埋め戻しを完了した。その間、10月3日には多賀城跡調査研究現地指導委員会による現地指導を受けた。10月4日に報道機関に対して調査成果を公表し、10月6日に一般の人々を対象に現地説明会を行い、約120名の参加があった。1月19日の平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会と、2月9日の第28回古代城柵官衙遺跡検討会で概要を報告した。



第1図 多賀城跡全体図 (1/7,000)

## 2. 地形と層序

調査対象地内の地形は、西から東に入り込んだ沢地で南北に二分され、多賀城碑付近がその沢頭にあたっている。地籍はこの沢地を境として、南側が「田屋場」、北側が「坂下」、沢頭以東が「城前」に分かれている。南辺築地塀跡は宇田屋場、多賀城碑は字城前に含まれ、南門跡は両字にまたがっている（第2図）。調査区内での層序をみると、南部の南辺築地塀跡周辺と、東部の多賀城碑周辺に堆積層が分布し、北部と西部は民家があつたため岩盤まで削平されている。そこで、基本的な層序については南部と東部の二地域に分けて説明する。

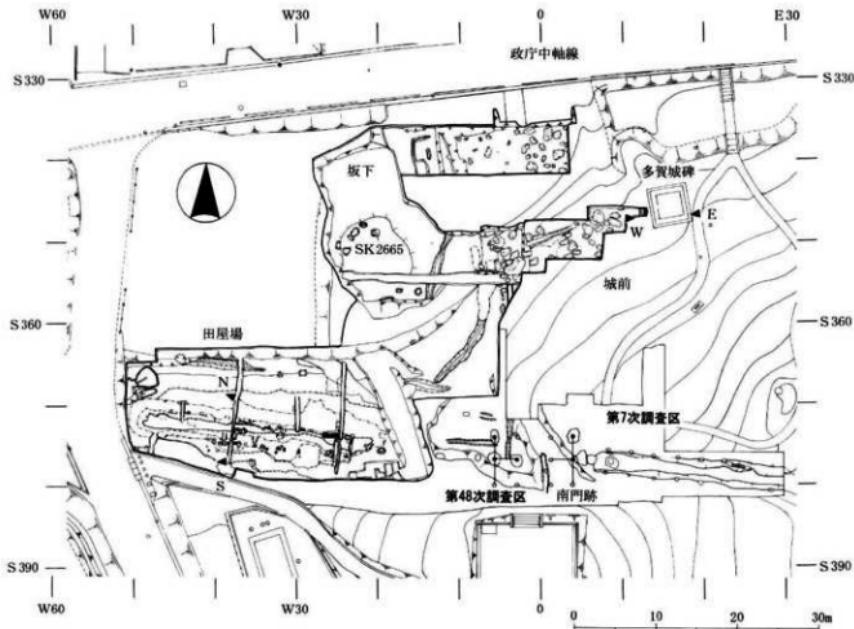
### （1）南部

南門西側の南辺築地塀が立地し、築地塀跡が尾根状の高まりとなって残る場所である。築地塀跡の南北両側に、築地塀の崩壊土を含めた次の各層が堆積している（第3図）。

【南第1層】現在の表土で層の厚さ30cmである。

【南第2層】灰白色火山灰層である。築地塀北側の窪地に部分的に残存する（第5図）。

【南第3層】厚さ10~30cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。



第2図 第72次調査対象地の地形

**【南第4層】** 厚さ 20cm~40cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。なお、築地塀南側の第4層は、第48次調査の「E1層」に相当する。

**【南第5層】** 厚さ 10~15cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。なお、築地塀南側の第5層は、第48次調査の「E2層」に相当する。

**【南第6層】** 厚さ 10~20cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

**【南第7層】** 厚さ 20cm。築地塀北側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。

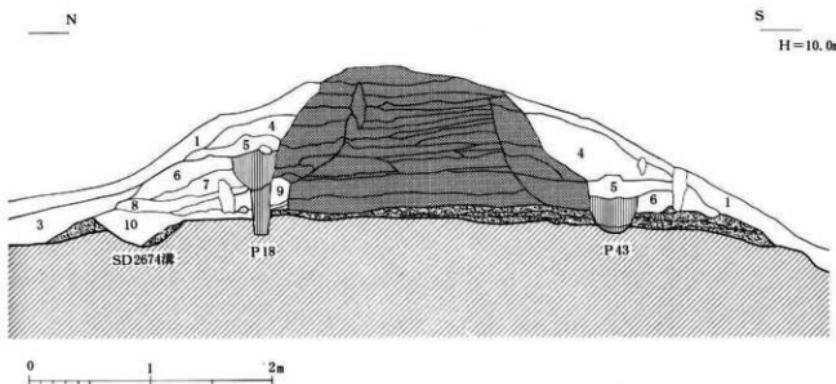
**【南第8層】** 厚さ 10cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

**【南第9層】** 厚さ 20cm。築地塀北側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。

**【南第10層】** 厚さ 10cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

**【南第11層】** 厚さ 10cm 前後。築地塀下に分布する。築地塀構築前の旧表土である（第5図）。

**【南第12層】** 基盤となる凝灰岩の岩盤である。この層の西側崖面に横穴墓が掘り込まれている。



No.	層名	土色	土性	備考	層の性格
1	南第1層	黒褐色(10YR3/2)	シルト		現在の表土
2	南第2層	灰白色(10YR8/1)	シルト	産地に部分的に堆積している。(第5図参照)	灰白色火山灰層の純層
3	南第3層	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	0.5~1cmのレキ粒を多く含む。	築地塀崩壊土
4	南第4層	褐色(10YR4/4)	シルト		築地塀崩壊土
5	南第5層	灰黃褐色(10YR5/2)	シルト	地山粘土をブロック状に多量に含む。	嵩上げ整地層
6	南第6層	灰黃褐色(10YR5/2)	シルト	均質でしまりのない層。	築地塀崩壊土
7	南第7層	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粘土をブロック状に多量に含む。	嵩上げ整地層
8	南第8層	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		築地塀崩壊土
9	南第9層	黃褐色(10YR5/6)	シルト	黒褐色土と黄褐色土のブロックを多量に含む。	嵩上げ整地層
10	南第10層	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		築地塀構築土
11	南第11層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	築地塀構築以前の旧表土。(第5図参照)	築地塀構築以前の土

第3図 調査区南部の層序

## (2) 東部

調査区の西から東に入り込んだ沢地の沢頭にあたる地域である。北西向きの緩傾斜地で、浸食による土砂の流出が著しく、大半は基盤の凝灰岩およびアルコース砂岩の残留巨礫が現表土もしくは近世以降の堆積層により直接覆われている（第10図）。

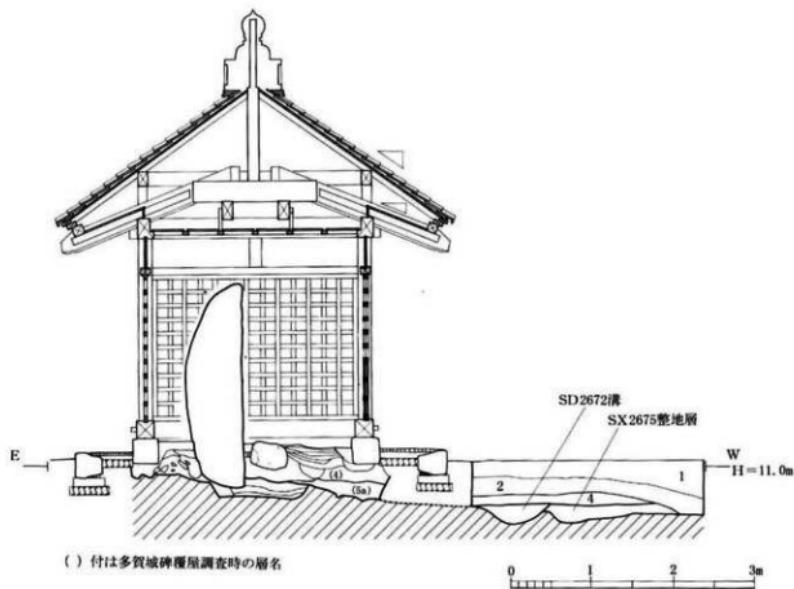
【東第1層】厚さ10cm。現在の表土層である。

【東第2層】厚さ30～50cm。近世以降の堆積層で、沢地部分に分布し、岩盤を直接覆っている。

【東第3層】灰白色火山灰ブロックを含む層で、窪地に部分的に残存する（第10図）。

【東第4層】厚さ20cm。調査区東の多賀城碑覆屋周辺に分布する。

【東第5層】凝灰岩の岩盤である。この中にアルコース砂岩の残留巨礫が多数含まれる。



No.	層名	土色	土性	備考	層の性格
1	東第1層	黒褐色(10YR3/1)	シルト		現在の表土
2	東第2層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	近世以降の遺物を含む。	
3	東第3層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	灰白色火山灰塊を含む。窪地に堆積。(第10図参照)	
4	東第4層	褐色(10YR4/6)	シルト	多賀城碑周辺にのみ分布。古代の堆積層。	自然堆積層

第4図 調査区東部の層序

### 3. 発見した遺構と遺物

今回の調査では南門西側築地塀跡の構造と変遷を確認しその下部で横穴墓を発見した。また、政府一南門間道路跡の道路側溝とみられる溝跡と整地層の一部を検出した。出土遺物は、瓦を中心として平箱で約280箱あるが、表土と築地塀崩壊土出土の瓦類が大半で、遺構に伴う遺物は12箱分である。以下では南辺築地塀跡、政府一南門間道路跡、横穴墓、その他の遺構・遺物の順に記述を進める。

#### (1) 南辺築地塀跡とそれに関連する遺構

南辺築地塀跡の現況は、高さ1.5m、幅3m前後の土壘状の高まりが30mにわたって残っている。その南半部は削平を受けているが、北半部は築地塀本体から崩壊土まで良好に残存している。

調査の結果、南辺築地塀は基礎整地上に構築され、築地塀本体には計4回の補修の痕跡が確認された。これらの補修は部分的であり、築地塀の基底幅に多少の変化はあるものの、位置や方向については構築当初から廃絶まで変化しない。

以下では、基礎整地と築地塀、築地塀の補修、築地塀に関わる他の遺構の順に記述する。

遺構番号のうち、南門西側の南辺築地塀跡については、第8・20次調査では「S F 202 築地塀」としている。第48次調査では今回調査を実施した部分を「S F 1556 築地塀」としたが、今回は一連の外郭南辺築地塀跡ということで「S F 202 築地塀跡」として記述し、築地塀の変遷と補修についてはアルファベット小文字a～eで表記する。

また、S F 202 築地塀跡の両側で検出された小穴については個別にピット番号を付し、遺構等の平面的位置は、政府中軸線からの距離(W○m)による基準線で示す(第5図)。

#### 基礎整地と築地塀

外郭南門西側のS F 202 築地塀跡は、S X 1562 基礎整地層の上に構築されている(第5・6図)。

##### 【S X 1562 整地層】

【概要】第48次調査で確認された基礎整地層である。外郭南門西側の築地塀下に分布し、北側では凝灰岩の岩盤を削り出した面の上に、丘陵斜面にかかる南側では旧表土上に盛土して整地している。

【層位・重複】第48次調査で発見されたS P 1559～1561 横穴墓および、今回発見されたS P 2660・2661 横穴墓を埋めている。

【整地層】風化礫片を多く含む黄褐色砂層を基調とし、黒褐色土の薄い層を縞状に交互に積んでいる。層の厚さは南門に接する東側で20cm前後、西側の丘陵斜面部分では層の厚さを増し、西端部で2mを越える。整地層上面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西縦断方向では西に約10度傾斜している。

##### 【出土遺物】遺物は出土していない。

## 【S F 202 a 築地塀跡】

【概要】 S X1562 基礎整地層上面に構築された当初の築地塀である。政庁中軸線の西方 21mから 51mまでの約 30mにわたって残存する。残存する高さは最大で 1m前後である。丘陵部西斜面に立地するため、築地塀基底面は東西縦断方向で西に約 10 度傾斜している。寄柱は掘立式で、寄柱穴の位置と残存する積み土から、方向は西で北に約 6 度偏し、基底幅は 2.6mと推定される。両側に幅 1mの犬走りがあり、北側犬走り北縁は S D2674 溝で画されている。

【重複】 b ~ e 補修、S X2669・2670・2671・2676 土壌より古い。

【積み土】 版築によるもので、約 5.8m間隔で計 4カ所に積み手の違いを確認した。これら積み手の異なる 5 区間では積み土の状況が次のように異なる。

一区目 (W21~W24) : 厚さ 10cm 前後で細かい風化岩片を含む黄色土の版築層

二区目 (W24~W30) : 厚さ 20cm 前後で細かい風化岩片を多く含む黄色砂質土と厚さ 10cm 前後の黒褐色土が互層をなす版築層

三区目 (W30~W36) : 厚さ 30cm 前後で人頭大の砂岩塊を多く含む黄色砂質土と厚さ 10cm 前後の黒褐色土が互層をなす版築層

四区目 (W36~W42) : 厚さ 5cm 前後の黄褐色砂質土と黒褐色土が互層をなす版築層

五区目 (W42~W51) : 厚さ 10cm 前後の細かい風化岩片を含む黒褐色土の版築層

各区での版築の層理面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西の縦断方向では基底面と同様に西に緩やかに下がっている。

【寄柱穴】 a 築地塀跡に伴うとみられる 6 個の寄柱穴もしくは抜取穴を検出した。

一・二区の積み手の違いの南北両側で一対の抜取穴を検出した（第 5 図 P 5・25）。これらは直径 30cm の隅丸方形で、その半分ほどは a 築地塀の積み土に食い込んだ位置にあり、整地層上面からの深さは 10cm である。柱痕跡は確認できないため、掘立式の寄柱の抜取穴とみられる。

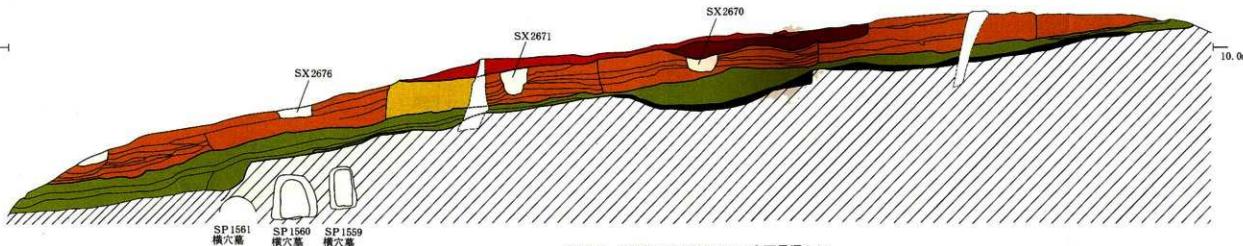
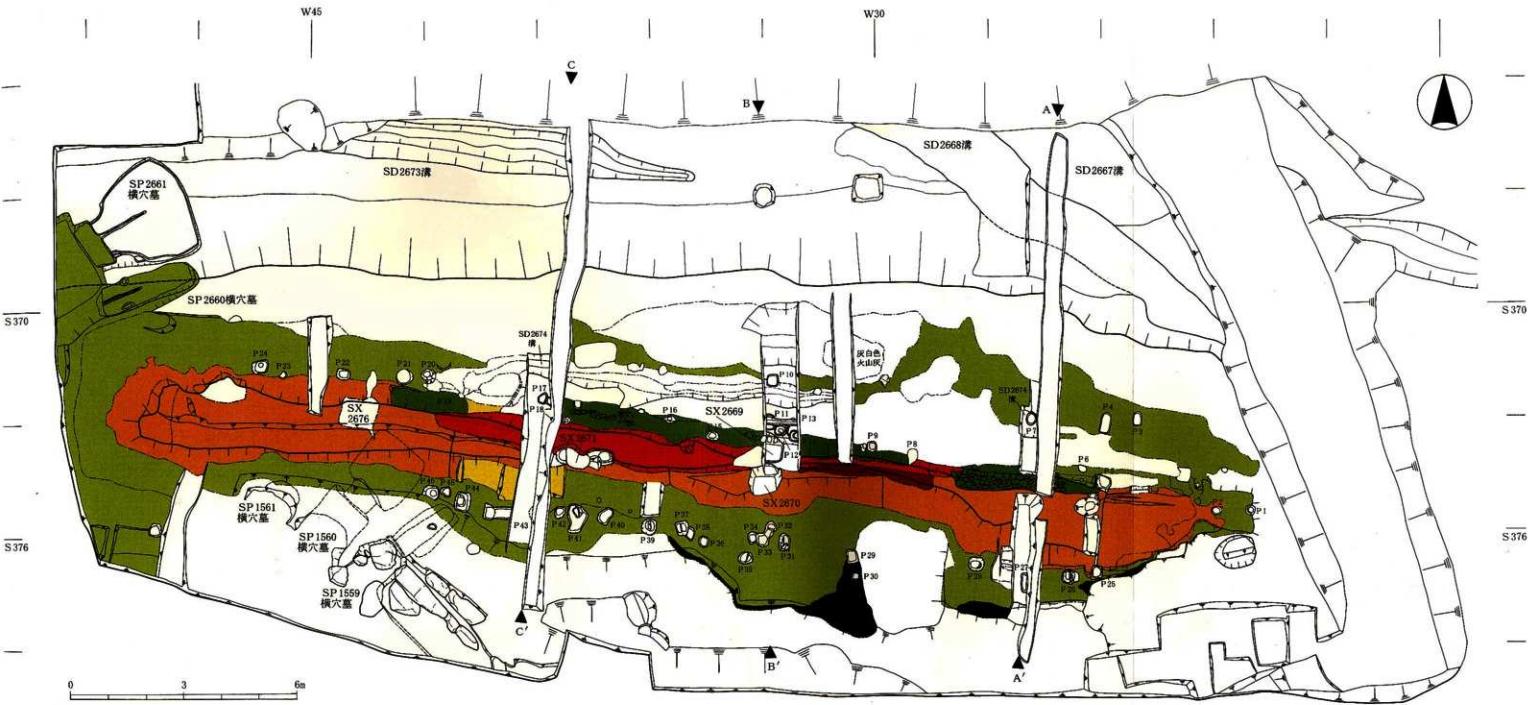
この他、積み土の積み手の違いとの位置関係から、a 築地塀に伴うとみられる寄柱穴もしくはその抜取穴を、築地塀南側で 4 個（第 5 図 P 28・32・42・45）、北側で 1 個（第 5 図 P 24）を検出した。平面形は直径 20cm 前後の不整円形、深さ 10cm 前後である。このうち北側の柱穴（P 24）では径 20cm の柱痕跡を確認した。南側では柱痕跡を確認できなかった。間隔は抜取穴の中心で計測して 2.9~3.0m である。

【犬走り】 a 築地塀南北両側に幅約 1m の犬走りがある。

【S D2674 溝】 北側の犬走り北辺を画する溝で、上幅 60cm 前後、深さ 30cm 前後、長さは 15m 以上である。残存する壁・底面は凝灰岩からなり、壁がゆるやかに立ち上がる。築地塀に並行し、東西方向に直線的に延びる。堆積土は南第 10 層である（第 3 図）。

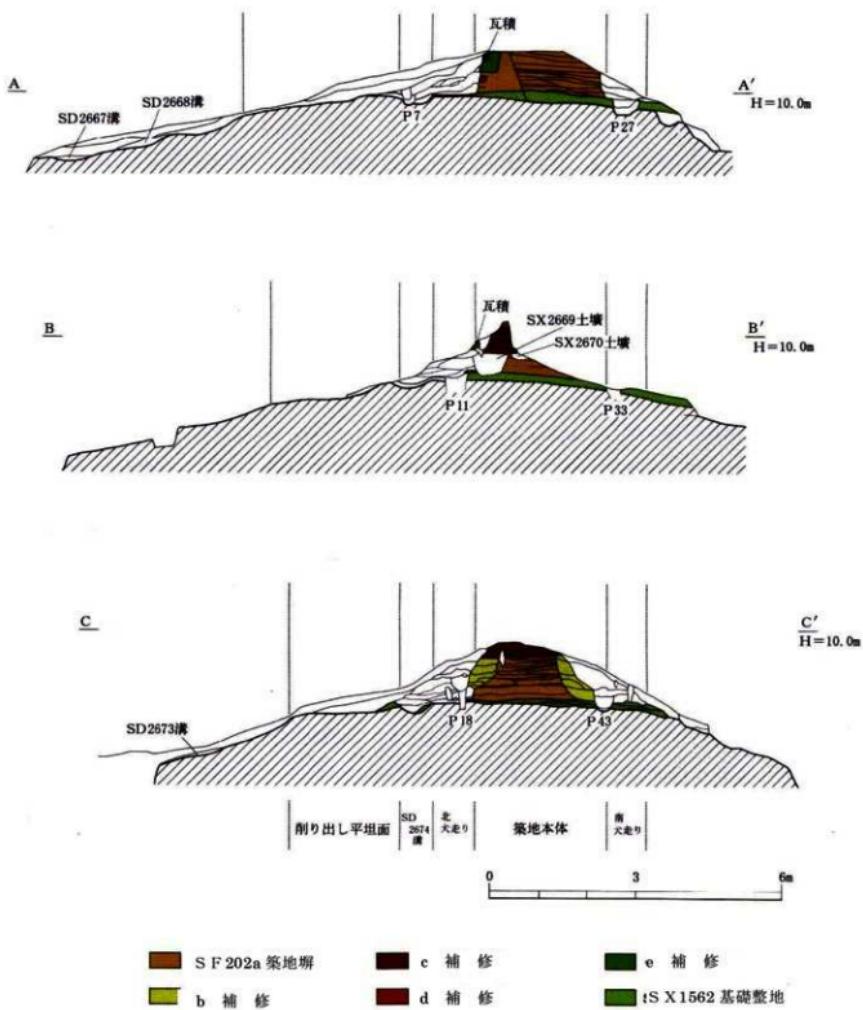
【崩壊土】 南第 10 層は、厚さ 10cm の褐色土層である。b 補修にともなう嵩上げ整地層の南第 9 層に覆われることから、a 築地塀の崩壊土とみられる。北側犬走りから S D2674 溝内に堆積している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。



第5図 南辺兼地壙跡平面図・立面見通し図

- 表 土
- SX1562基礎整地
- SF202a整地場
- b 補修
- c 補修
- d 補修
- e 補修



第6図 南辺築地塀跡 横断面図

## S F 202 築地塙跡の補修痕跡

S F 202 築地塙には 4 時期 (b ~ e) の補修の痕跡が確認された。

### 【b 補修】

【概要】 a 築地塙跡の部分的な補修で、政庁中軸線の西方 36m から 42m までの約 6 m の範囲で確認した。b 補修に伴う寄柱は不明である。

### 【重複】 c ~ e 補修、S X 2671 土壌より古い。

【積み土】 a 築地塙跡の中央約 1.5m を残し、南北両側から削平し、新たに本体を積み直している。積み土は、風化岩片を含む黄色土層で、版築の層理面は南北横断方向では外側にわずかに傾斜している。補修の底面は、南側では S X 1562 基礎整地層の上面まで削り込んでいるが、北側では築地塙北裾の南第 9 層上にあって基礎整地層上面より 25cm 高い。

【嵩上げ整地層】 南第 9 層は、築地塙北裾に幅約 1.2m の帯状に分布する。b 補修積み土下にあることから、b 補修にともなう嵩上げ整地層で、その上面は北側大走りであったとみられる。

【崩壊土】 南第 8 層は、築地塙北裾に堆積した厚さ 10cm の褐色砂質土層である。c 補修にともなう寄柱穴 (P 18) より古いくことから、b 補修の崩壊土とみられる (第 3・6 図)。

### 【出土遺物】 遺物は出土していない。

### 【c 補修】

【概要】 a もしくは b 補修積み土の上部を削平し、新たに本体を積み直して補修したもので、政庁中軸線の西方 28.5m から 34m までの約 5.5m の範囲で確認した。残存する高さは最大で 0.5m 前後である。寄柱は掘立式で、寄柱穴の位置から、基底幅は約 3.0m と推定される。

### 【重複】 S X 2669・2670 土壌より新しく、e 補修より古い。

【積み土】 残存する積み土の厚さは 30cm ~ 50cm、幅 1 m 前後で、上部は d 補修の積み土で覆われている。積み土は厚さ 10cm 前後の細かい風化岩片をわずかに含む黄褐色土と褐色土が互層をなす版築層で、版築の層理面は南北横断方向、縦断方向とともにほぼ水平である。積み手の違いはみとめられない。

### 【寄柱穴】 c 補修に伴うとみられる 8 個の寄柱穴もしくはその抜取穴を検出した。

まず、築地塙跡を断ち割った W39 地点で、築地塙跡両側で一対の抜取穴を検出した (第 5 図 P 18・43)。これらはいずれも平面形が直径 40cm の不整円形である。南側のものは深さ 40cm で、柱痕跡は確認できない。北側のものは深さ 30cm で、その下部に直径 20cm で基礎整地層まで達する深さ 40cm の柱痕跡を確認した。いずれも、e 補修にともなう嵩上げ整地層とみられる南第 5 層で覆われている。

この他、築地塙の南北両側に、これらに伴うとみられる寄柱穴もしくはその柱痕跡、抜取穴などを 6 個検出した。北側に 3 個 (P 12・16・22)、南側に 3 個 (P 33・39・46) である。掘り方は直径 40cm 前後の不整円形、深さ 20cm で、北側の (P 12)、南側の (P 46) では径 20cm の柱痕跡を確認した。間隔は抜取穴の中心もしくは柱痕跡で計測して 2.9 ~ 3.0m である。

### 【出土遺物】 遺物は出土していない。

### 【d 補修】

【概要】 c 補修積み土の上部を削り、積土をして補修したもので、政府中軸線の西方 30mから 41mまでの約 11mの範囲で確認した。残存高は最大 0.5m前後である。寄柱は不明である。

### 【重複】 c 補修より新しく、e 補修より古い。

【積み土】 c 補修積み土の上部を削平し、新たに本体を積み直している。残存する積み土の厚さは 10cm～50cm、幅 50cm 前後である。積み土は褐色土層で、版築の痕跡は不明瞭である。積み手の違いはみとめられない。

【崩壊土】 南第 6 層は、築地堀南北両裾に堆積した厚さ 10～20cm の黄褐色土層である。e 補修にともなうとみられる嵩上げ整地の南第 5 層に覆われることから、d 補修の崩壊土とみられる。

【出土遺物】 d 補修の積み土から丸瓦、平瓦の破片が出土している。丸瓦は II 類が 2 点、平瓦は II B 類が 2 点で、平瓦は黒褐色で軟質である。

### 【e 補修】

【概要】 a 築地堀跡、c・d 補修の積み土の北側面を奥行 20～30cm まで削り取った後、新たに本体を積み直し、外側に瓦を積んで補修したものである。

【位置・検出状況】 積み土は築地堀跡の北側で、政府中軸線の西方 24mから 39mまでの約 15mの範囲で確認した。瓦積みは、政府中軸線の西方 25mから 28mまでの 3m、33mから 34mまでの 1m、37mから 39mまでの 2m の計 3 区間に部分的に残存している。

### 【重複】 b～d 補修、S X 2669・2670・2671 土壌のいすれよりも新しい。

【積み土・瓦積み】 下層に明黄褐色の積み土をし、その上に瓦を積み、裏込めとして黄褐色土を積んでいる。この補修の底面は、当初の基礎整地層上面より 40cm 高い。

下層の積み土は、明黄褐色土で厚さは 20cm 前後、奥行 30cm 前後である。版築は不明瞭で、しまりがない。上層の瓦積みは残りのよい場所で 4 段まで確認している。使用された瓦は、丸瓦、平瓦、軒平瓦などの破片で、瓦の側辺をそろえるように整然と積み重ねている。

【嵩上げ整地層】 南第 5 層は、築地堀南北両裾に幅約 0.9m の帯状に分布する、厚さ 10～15cm の灰黄褐色土層である。d 補修の崩壊土とみられる南第 6 層の上にあることから、e 補修に伴う嵩上げ整地層で、その上面は犬走りであったとみられる。

【崩壊土】 南第 4 層は、築地堀南北両側に堆積した厚さ 20～40cm の褐色土層である。e 補修にともなう嵩上げ整地層とみられる南第 5 層の上に堆積していることから e 補修後の崩壊土とみられる。

【出土遺物】 e 補修の瓦積に使用された瓦がある。軒平瓦、丸瓦、平瓦の破片が出土している（第 7 図）。大半が平瓦である。取り上げた瓦をみると、軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦（第 7 図 5）と 641 無文軒平瓦が各 1 点、丸瓦 II 類が 4 点、平瓦 II B 類が 5 点、II C 類が 1 点である。このうち平瓦 II B 類の 1 点と無文軒平瓦は焼瓦で、平瓦 II B 類の凹面には刻印「丸」－A がみられ（第 7 図 4）、無文軒平瓦の頸部には朱が付着している。また、平瓦 II B 類の中には、621 偏行唐草文軒平瓦に用いられる凸面に稭妻状の叩き目がみられるものがある（第 7 図 2）。

## S F 202 築地塙跡崩壊土出土遺物

築地塙南北両側にe補修以降の崩壊土である南第3層が堆積しており、この崩壊土からは多量の瓦と少量の土器類が出土している。

土器には土師器、須恵器、須恵系土器があるが、いずれも小破片資料で図示できるものはない。土師器には壺と甕があり、ともにロクロ調整と非ロクロ調整のものがみられる。須恵器には壺、高台壺、甕、瓶類があり、この中の壺について底部の切り離し技法と調整をみると、ヘラ切り無調整、切り離し技法が不明で手持ちヘラ削り調整と回転ヘラ削り調整のものがある。須恵系土器には壺と高台壺が各1点みられる。

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある（第7～9図）。この中の平瓦と丸瓦には表面がボロボロである焼瓦が一定量認められる。軒瓦には221～223とみられる重弁蓮花文軒丸瓦（第9図17）、320重弁蓮花文軒丸瓦（第9図19）、243と240～243とみられる重圓文軒丸瓦（第9図15・18・23）、311あるいは313細弁蓮花文軒丸瓦（第9図16）、511重弧文軒平瓦（第7図1）、640单弧文軒平瓦（第7図6）、721-A均整唐草文軒平瓦（第7図7）の他に瓦当文様が判別できない軒丸瓦がある。この中の243重圓文軒丸瓦（23）の裏面には刻印「伊」が押印されている。

丸瓦は確認できたものはすべてII類である。完形に近いII B類（第8図14）や、凸面に刻印「伊」が押印されているもの、凹面に記号「本」？が押印されているもの、凹面にヘラ書き「大」？のみられるものなどがある。平瓦にはIA類、IB類、IC類aタイプ、IC類bタイプ、II A類、II B類、II B類aタイプ、II B類bタイプ、II C類がある。この中のIC類aタイプは凹面には凸型台の陰刻文字「今」-Cがみられるもの（第8図9）、II B類aタイプは凹面に刻印「丸」-A（第8図10）、「矢」-A（第7図3）、「物」-A（第8図11）が押印されているものがある。また、II B類には凸面に方形突出がみられるもの、II C類には凹面に記号「⊕」（第8図12）、「田」（第8図13）、「○」（第9図21）が押印されているものや「×」、「大」（第8図8）などがヘラ書きされているものがある。

鬼瓦は重弁蓮花文の弁端付近の小破片で、裏面には竜の子状の圧痕がみられる（第9図20）。砂粒を多く含む胎土や焼成状況および色調が表土出土の953鬼瓦とみられる周縁部資料（第17図10）と酷似していることから、これと同種あるいは同一個体の可能性も考えられる。なお、953鬼瓦は、第35・48次調査で出土している鬼瓦である。

熨斗瓦は平坦で表裏両面に縄叩き痕跡がみられるものである（第9図22）。

## S F 202 築地塀跡に関わる他の遺構

S F 202 築地塀跡に重複する土壙 4 基と、S F 202 築地塀跡の両側で検出された組み合せ不明のピット群がある。

### 【S X 2669 土壙】

【位置・検出状況】 a 築地塀積み土積み手の違いの東から三区目のほぼ中央北よりに位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀と、南第 7 層を掘り込み、c 補修の積み土および南第 6 層に覆われている（第 6 図 B-B'）。

【形態・規模】 平面形が径 70cm の不整円形で、深さは約 50cm である。

【堆積土】 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

【出土遺物】 須恵器甕の破片が 1 点出土している。

### 【S X 2670 土壙】

【位置・検出状況】 a 築地塀積み土積み手の違いの東から三区目のほぼ中央に位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀を掘り込み、c 補修積み土に覆われている（第 6 図 B-B'）。

【形態・規模】 南半が削平されているため平面形は不明であるが、径 70cm の不整円形と推定され、深さは約 15cm である。

【堆積土】 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

### 【S X 2671 土壙】

【位置・検出状況】 a 築地塀積み土積み手の違いの東から四区目のほぼ中央に位置する。S F 202 a 築地塀を掘り込み、d 補修積み土に覆われている（第 5 図）。

【形態・規模】 径 70cm の不整円形と推定される。深さは約 75cm である。

【堆積土】 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

### 【S X 2676 土壙】

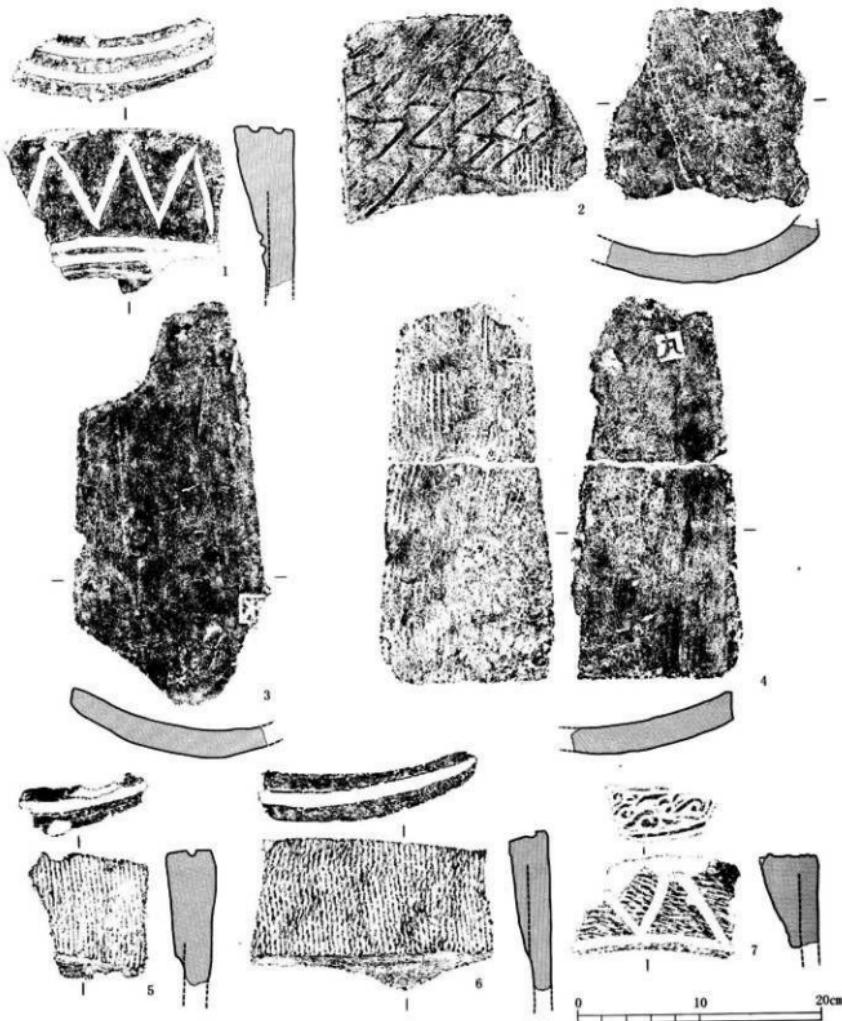
【位置・検出状況】 a 築地塀積み土積み手の違いの東から五区目のほぼ中央に位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀を掘り込んでいる。

【形態・規模】 一辺約 1m の方形で、深さは 20cm 以上である。

【堆積土】 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

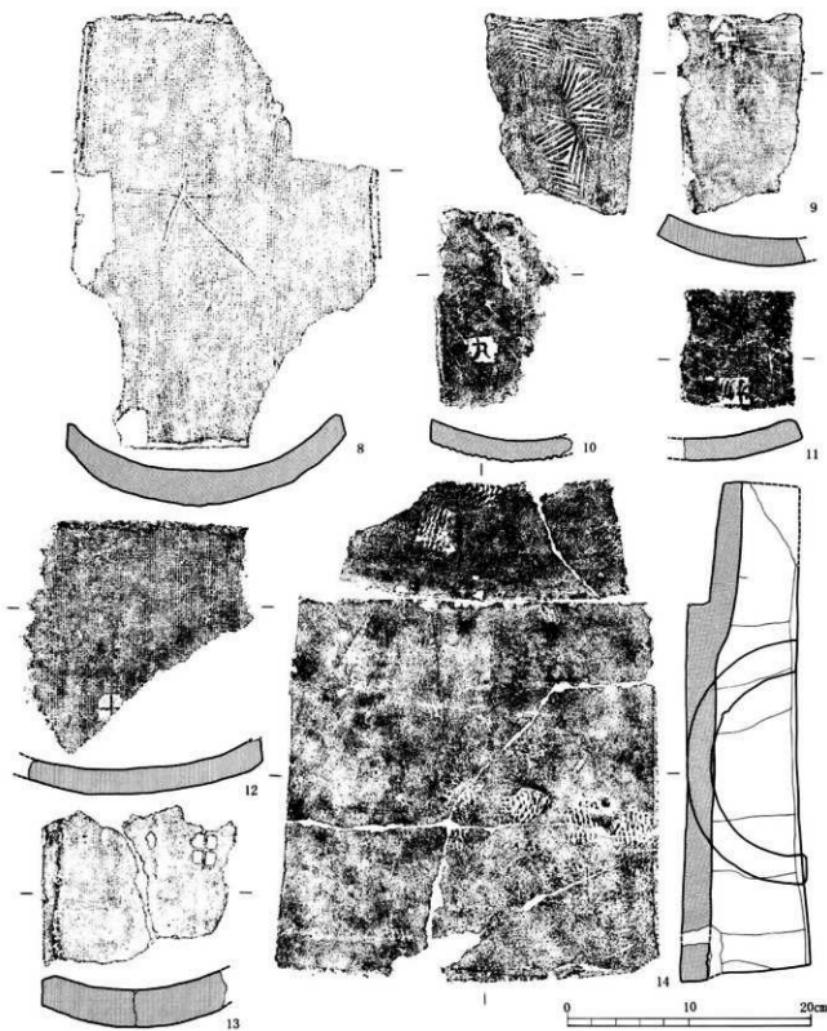
【出土遺物】 遺物は出土していない。

【ピット群】 S F 202 築地塀跡の両側に 46 個のピットが検出された。a 築地塀にともなうとみられる 7 個、c 補修にともなうとみられる 8 個、第 48 次調査で確認された S A 1557 柱列（P 31・37・41・44）4 個が含まれるが、その他は組み合せ不明のピットである。これらの中には足場穴や、側柱などの柱穴も含まれるとみられるが、特定はできない。ピットからの出土遺物はない。



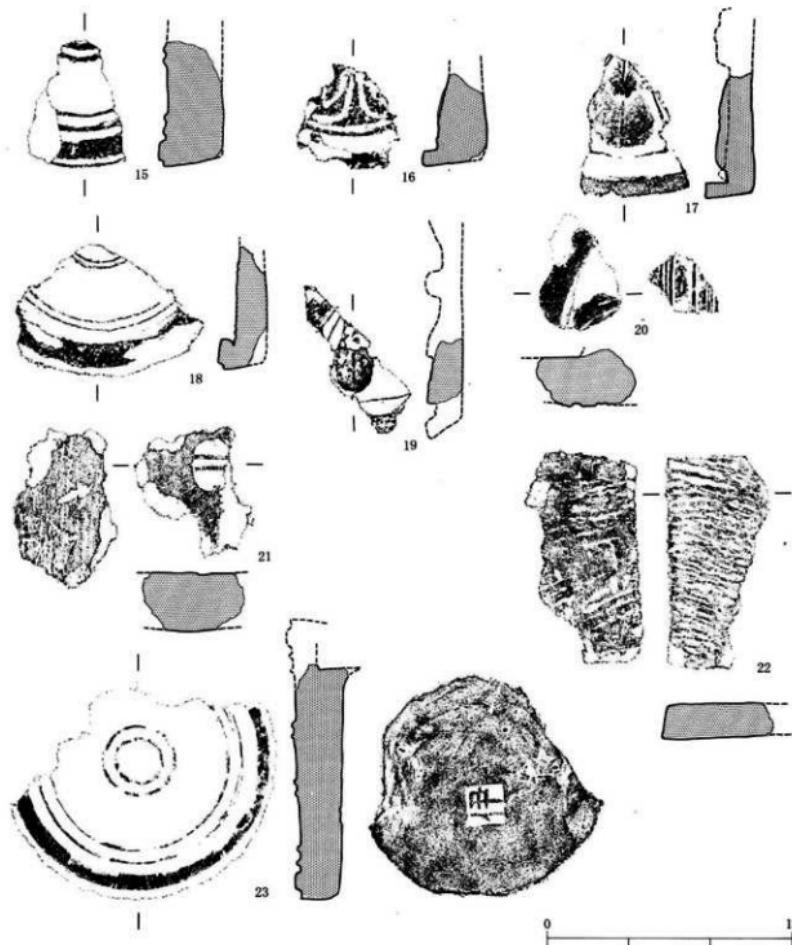
No.	種類	遺構・層位	特徴	登録番号	箱番号	年代番号
1	軒平瓦	南第3層(SF202e 茅地崩土)	R11重弧文、第Ⅰ期	R24	B13238	B23380
2	平瓦	SF202e 瓦列2 No.2	凸面稻妻状叩き、第Ⅱ期	R3	B13236	B23378
3	文字瓦	南第3層(SF202e 茅地崩土)	平瓦II B類、四面刻印「矢」-A、第Ⅱ期	R4	B13239	B23421
4	文字瓦	SF202e 瓦列2 No.1	平瓦II B類、四面刻印「丸」-A、第Ⅱ期、佛瓦	R1	B13236	B23377
5	軒平瓦	SF202e 横土	640 单弧文、第Ⅱ期	R2	B13236	B23384
6	軒平瓦	南第3層(SF202e 茅地崩土)	640 单弧文、第Ⅱ期	R28	B13238	B23387
7	軒平瓦	南第3層(SF202e 茅地崩土)	721-A均整唐草文、第Ⅲ期	R6	B13239	B23427

第7図 南辺茅地壠跡・南第3層出土遺物



No.	種類	造構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
8	平瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	II C種、ヘラ書き「大」、第I期	R26	B13238	D23422
9	平瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	I C種aタイプ、四面陰刻文字「今」-C、第I期	R41	B13238	D23414・D23415
10	文字瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	平瓦II B種aタイプ、四面刻印「丸」-A、第II期	R9	B13239	D23433
11	文字瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	平瓦II B種aタイプ、四面刻印「物」-A、第II期	R10	B13239	D23396
12	記号瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	平瓦II C種、四面橢円形で「手」の記号、第IV期	R5	B13239	D23398
13	記号瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	平瓦II C種、四面長方形で「田」の記号、第IV期	R27	B13238	D23435
14	丸瓦	南第3層(SF202e 墓地崩壊土)	II B種、ほぼ完形	R1	B13237	D23419

第8図 南第3層出土遺物（1）



No.	種類	造構・層位	特徴	登録	箱番号	李方番号
15	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	243重圓文、第Ⅱ期	R4	B13237	D23401
16	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	311か213細弁蓮花文、第Ⅲ期	R3	B13239	D23404
17	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	221~223重弁蓮花文、第Ⅲ期	R7	B13237	D23403
18	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	240~242重圓文、第Ⅲ期	R1	B13239	D23383
19	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	320重弁蓮花文、第Ⅲ期	R8	B13237	D23410
20	鬼瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	953鬼瓦、裏面質の子状压痕、第Ⅱ期	R2	B13237	D23405
21	記号瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	平瓦ICC瓶、凹面横円形で「口」の記号、第Ⅳ期	R37	B13238	D23379
22	熨斗瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	表面両面調叩き	R25	B13238	D23396+23391
23	軒丸瓦	南第3層(SF202e 塚地崩壊土)	243重圓文、裏面刻印「伊」、第Ⅱ期	R3	B13237	D23423+23424

第9図 南第3層出土遺物（2）

## (2) 政府－南門間道路跡とそれに関連する遺構

調査区東部の南門北側一帯は、近世以降の遺物を含む東第2層が岩盤直上に堆積しており、古代の堆積層と遺構の残存状態は悪く、その大半は浸食により失われた可能性が高い。古代の遺構としては次にみる溝4条と2カ所で検出した整地層がある。

### 溝跡

検出した4条の溝は、位置や方向などから、時期の異なる政府－南門間道路跡の側溝とみられる。

#### 【S D 2663 溝】

【位置・検出状況】政府中軸線の西約4.5mに位置する南北方向の溝である。約1.5m分を調査した。

【層位・重複】S X 2664 整地層より古い。

【規模・形状】検出面での上幅は約0.7m、深さは0.2mである。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。

【堆積土・出土遺物】褐色土の自然堆積層である。遺物は出土していない。

#### 【S D 2657 溝】

【位置・検出状況】政府中軸線の西約7mに位置する南北方向の溝である。約20m分を調査した。

【層位・重複】S X 2664 整地層より古い。

【規模・形状】検出面での上幅は約1.5m、深さは0.5mである。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。多賀城碑の西側から南門跡の北西側にかけて、南北方向に緩やかな弧を描くように延びている。南側は徐々に浅くなり途切れている。

【堆積土・出土遺物】黄褐色砂質土の自然堆積層である。遺物は出土していない。

#### 【S D 2658 溝】

【位置・検出状況】政府中軸線の西約12mに位置する南北方向の溝である。約8m分を調査した。

【層位・重複】表土に直接覆われている。

【規模・形状】検出面での上幅は約1.2m、深さは0.1m前後である。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。南南西から北北東にほぼ直線的に延びている。

【堆積土・出土遺物】褐色砂質土の自然堆積層である。土器と瓦が出土している。土器は、須恵器壺・瓶の破片が少数で図示できるものはない。瓦は、丸瓦はII類、平瓦はIIB類、IIB類aタイプ、IIC類の破片が出土している。

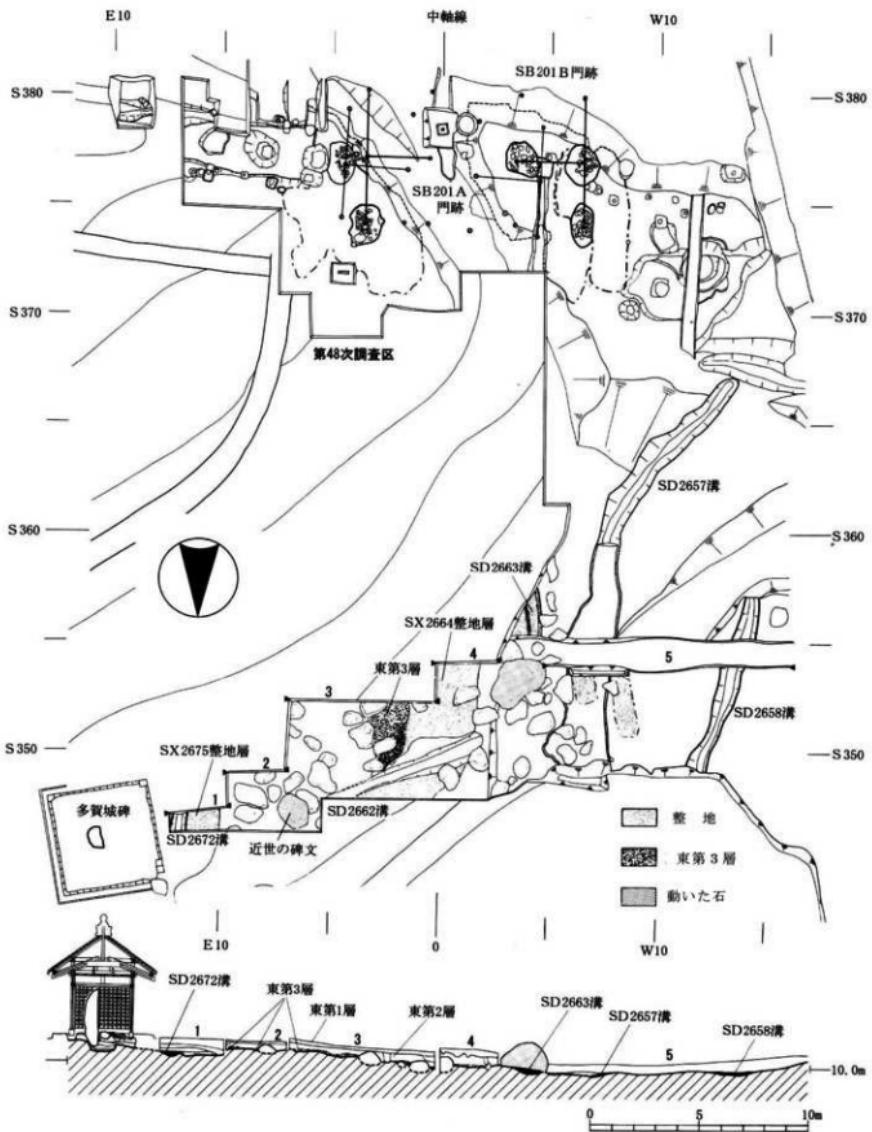
#### 【S D 2672 溝】

【位置・検出状況】政府中軸線の東約11mに位置する南北方向の溝で、約1m分を調査した。

【層位・重複】表土直下にある。

【規模・形状】検出面での上幅は約1.2m、深さは0.1m前後である。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。南南西から北北東にほぼ直線的に延びている。

【堆積土・出土遺物】褐色砂質土の自然堆積層である。すべて破片資料で、丸瓦と平瓦が少量出土している。丸瓦は3点で、すべてII類である。平瓦にはIA類、IIB類aタイプ、IIC類がある。



第10図 南門北側調査区平面図・横断面図

## 整地層

検出した整地層は政序一南門間道路跡の路面下の整地層とみられる。

### 【S X2664 整地層】

【位置・検出状況】 政序中軸線の西側に分布し、約 50 m<sup>2</sup>の範囲を検出した。

【層位・重複】 東第3層の下層にある。 S D2663、2657 溝より新しい。

【概要】 黒褐色土層で、南東から北西方向に緩やかに傾斜している。層の厚さは 5~10cm で、角の取れた瓦の小破片が多量に含まれている。

【出土遺物】 少量の土器と多量の瓦の他に鉄刀が出土している（第 11 図）。鉄刀は茎から刀身にかけての資料で、平棟、平造で両区の刀である（第 11 図 31）。土器はいずれも小破片資料で図示できるものはないが、土師器と須恵器が少量出土している。土師器には甕、須恵器には壺・甕・瓶類がある。土師器の甕は摩滅して特徴を把握しがたいものも多いが、ロクロ調整のものがみられる。須恵器の壺では底部の切り離し技法がヘラ切りで、ナデ調整のものがある。

瓦は大部分が摩滅して角のとれた小破片が多量（1614 点）に出土している。種類には軒丸・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、この中では丸瓦と平瓦が大部分を占める。軒瓦としては 420 宝相華文軒丸瓦（第 11 図 24）・450 陰刻花文軒丸瓦（26）・310 A・B 不明細弁蓮花軒丸瓦（25）、660 均整唐草文軒平瓦（29）・640 単弧文軒平瓦（30）・641 無文軒平瓦（28）がある。平瓦には I A 類、I B 類、I C 類 a タイプ、II B 類、II B 類 a タイプ、II B 類 b タイプ、II C 類があり、この中では II C 類が最も多い。また平瓦 II B 類の中には表面がボロボロである焼瓦が少量認められる。丸瓦は確認できたものはすべて II 類で、この中には凹面にヘラ書き「大」（27）がみられるものがある。平瓦と同様に焼瓦も認められる。

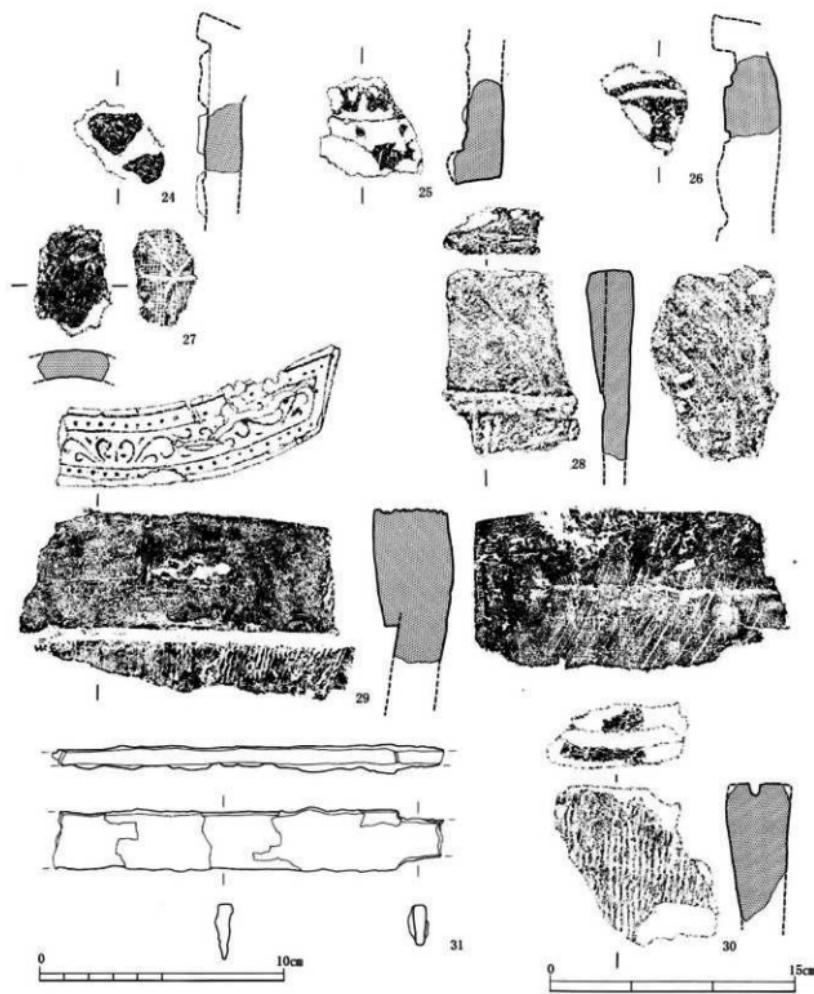
### 【S X2675 整地層】

【位置・検出状況】 S D2672 溝西側に分布し、約 5 m<sup>2</sup>の範囲を検出した。

【層位・重複】 S D2672 溝より新しい。

【概要】 壊くしまりのある砂質土層で、南から北に緩やかに傾斜している。層の厚さは 5~30cm で、小さく角の取れた瓦の破片が含まれている。

【出土遺物】 少量の土器と多量の瓦の他に硯が 1 点出土している（第 17 図）。土器は小破片のため図示できないが、須恵器の甕が少数出土している。硯は小破片であるが風字硯とみられるものである（第 17 図 2）。瓦はすべて小破片で、大部分が摩滅して角のとれたものである。種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、この中では丸瓦と平瓦が主体を占める。軒瓦には 240~243 重圓文軒丸瓦、451 陰刻花文軒丸瓦（1）、不明の軒丸瓦、721-A? 均整唐草文軒平瓦（5）、721 均整唐草文とみられる軒平瓦（4）がある。丸瓦は II B 類で、I 類はない。平瓦には I A 類、I B 類、II B 類、II B 類 a タイプ、II B 類 b タイプ、II C 類があり、この中では II B 類が主体を占める。また II B 類の平瓦の中には凹面に刻印「丸」-A、「物」が押印されたものがある。



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	年代番号
24	軒丸瓦	SX2664	420 宝相花纹、第Ⅳ期	R8	B13240	D23407
25	軒丸瓦	SX2664	310A・B 不明細弁蓮花纹、第Ⅲ～Ⅳ期	R9	B13240	D23436
26	軒丸瓦	SX2664	陰刻花纹（450か？）、第Ⅳ期	R7	B13240	D23408
27	文字瓦	SX2664	丸瓦II類、四面へ書き「大」か？	R10	B13240	D23409
28	軒丸瓦	SX2664	641 無文、燒瓦、第II期	R3	B13240	
29	軒丸瓦	SX2664	660 均整唐草文、第I期	R1	B13240	D23389
30	軒丸瓦	SX2664	640 单弦文、第II期	R2	B13240	D23386
31	鉄刀	SX2664	平鍔平造、両刃	R11	B13242	D23417

第 11 図 SX2664 整地層出土遺物

### (3) 横穴墓

調査区西端の築地塀基礎整地層下で、2基の横穴墓を発見し調査した。南門の立地する丘陵の南西端の西斜面に位置し、南西に広がる沖積地との比高差は2～3mである。築地塀北側の旧地形は削平され判然としないが、周辺の地形からみて、本来は、基盤の凝灰岩からなる西南向きの急傾斜地であったと推定される。こうした旧地形に沿って、第48次調査で3基の横穴墓が発見されている。したがって、今回発見された2基の横穴墓の両側には、さらに複数の横穴墓が埋没していると推定される。

#### 【S P 2660 横穴墓】

【位置・検出状況】築地塀の北壁から2mほど北に位置する。南西に開口し、長軸方向は東で北に約23度偏している。天井部と北壁が大きく削平され、全体が築地塀の基礎整地層下に埋もれていた。

【重複】本横穴墓の前庭部は、北側に隣接するS P 2661 横穴墓の前庭部と重複しており、S P 2661 横穴墓前庭部の造成後に本横穴墓が造営されている。また、築地塀基礎整地層との関係は、基礎整地層が玄室床直上の堆積層を直接覆っていて、他の堆積層や天井崩落土がみられないことから、築地塀の基礎地業施工時に天井部が削り去られ、基礎整地層で埋め立てられたものと考えられる。

【形態・規模】平面形は、奥行きの長い長方形を基調とし、奥にゆくにつれ幅狭くなる。全長2.5m、玄室奥行1.7m、玄門部0.3m、羨道部長0.5m、幅は奥壁で約0.4m、玄門部から羨道部は0.8mである。

床はほぼ平坦であるが、奥壁から羨道まで約7度の傾斜があり、羨道部前端は玄室奥壁下端より40cmほど低い。玄室前半から前庭部にかけての中軸線上には幅5cmの排水溝が延びている。残存する奥壁は残存高0.4m、南壁は0.6mで、床から丸みをもって立ち上がり、屈曲して天井部に至る。壁や床には、部分的に構築時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性はみられない。

玄門部床には閉塞施設に関連するとみられる浅い掘り込みがある。

【堆積土】床直上に厚さ3cm前後の黒褐色土層が薄く堆積し、その上は築地塀基礎整地層で埋め戻されている。上層の築地塀基礎整地層は南側から北側に傾斜している。

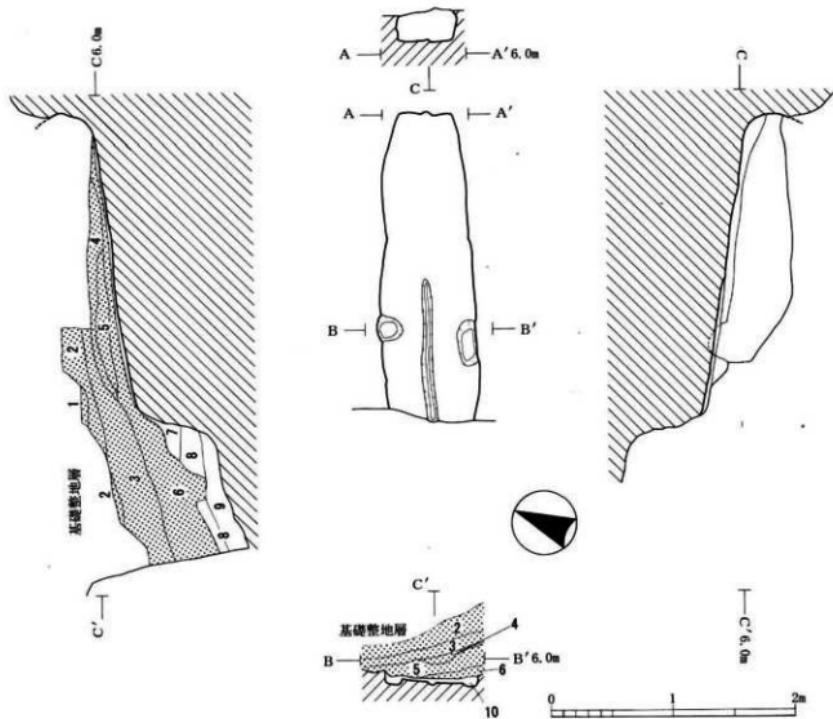
#### 【出土遺物】遺物は出土していない。

#### 【S P 2661 横穴墓】

【位置・検出状況】築地塀の北壁から3mほど北に位置する。南西に開口し、長軸方向は東で北に約25度偏している。前庭部は築地塀のS X1562 基礎整地層に覆われていた。

【他の遺構との重複】本横穴墓の前庭部は、南側に隣接するS P 2660 横穴墓の羨道部と重複し、本横穴墓前庭部の構築後にS P 2660 横穴墓が造営されている。築地塀基礎整地層との関係は、基礎整地層が前底部堆積層から羨道部の天井崩落土層を覆っていることと、玄室部の天井崩落土層の上に灰白色火山灰を含む自然堆積層がみられることがから、玄室天井部は築地塀の基礎整地層後に崩壊し、灰白色火山灰が降下した10世紀前半頃には玄室上部が窪地となっていたと考えられる。

【形態・規模】平面形は、奥壁に丸みがあり、側壁は玄門から奥壁に直線的に開く扇形を呈する。全長3.2m、玄室奥行2.1m、玄門部0.5m、羨道部長0.5m、幅は奥壁で2.8m、玄門部内側で1.8m、玄門部は1.1m、羨道部は玄門外側で1.3m、羨門部1.0mである。



No.	土色	土性	備考	性格
1	黄褐色(10YR5/8)	シルト		
2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。	
3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	凝灰岩ブロックを少量含む。	
4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	2.5YR6/2灰黄褐色土をブロック状に含む。	S X1562 基礎整地層
5	褐色(10YR4/4)	シルト	凝灰岩ブロックを少量含む。	
6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	10YR7/8黄褐色粘性の強いシルトをブロック状に多量に含む。	
7	褐色(10YR4/4)	シルト	2.5YR4/2暗灰黄色シルト凝灰岩ブロックを含む。自然堆積層。	SP2661 前庭部堆積層
8	黄褐色(10YR5/6)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。自然堆積層。	
9	褐色(10YR4/4)	シルト	自然堆積層。	
10	黒褐色(10YR2/2)	シルト		玄室内部堆積層

第 12 図 SP2660 横穴墓

床はほぼ平坦であるが、奥壁部側から前庭部側に傾斜し、玄門と羨門の床にはそれぞれ約 10cm の段差がある。玄室部から玄門までの壁際と玄室前半から玄門部にかけての中軸線上には幅 5cm 前後の排水溝がある。壁は残存高 0.8m 前後で、床から内傾気味に立ち上がる。壁や床には、部分的に造営時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性はみられない。

奥に向かって開く玄門と羨道を経て「コ」字状に聞く前庭に至る。羨道部には閉塞施設として積まれていた人頭大の河原石が 2 ~ 3 段残る。

**【堆積土】** 4 層ある。まず、玄室から前底部までの床直上に厚さ 3cm 前後の黒褐色土が堆積し、その上に厚さ 40cm 前後の褐色土が堆積している。その上層の玄室から羨道部にかけては主に砂岩破片からなる天井崩落土が堆積し、羨道から前底部では築地塀基礎整地が堆積している。さらに玄室部天井崩落土上の窪みには灰白色火山灰を含む層が堆積している。

**【出土遺物】** 玄室床から、土器、鉄刀、刀子、鉄鏃が出土している。このうち、鉄刀（第 14 図 1）は玄室奥壁沿いの北側、鉄鏃（第 14 図 2）は南側の床から出土した。須恵器提瓶（第 15 図 7）、広口壺（第 15 図 8）は玄門北壁沿いに立てかけられた状態で出土した。（第 13 図）

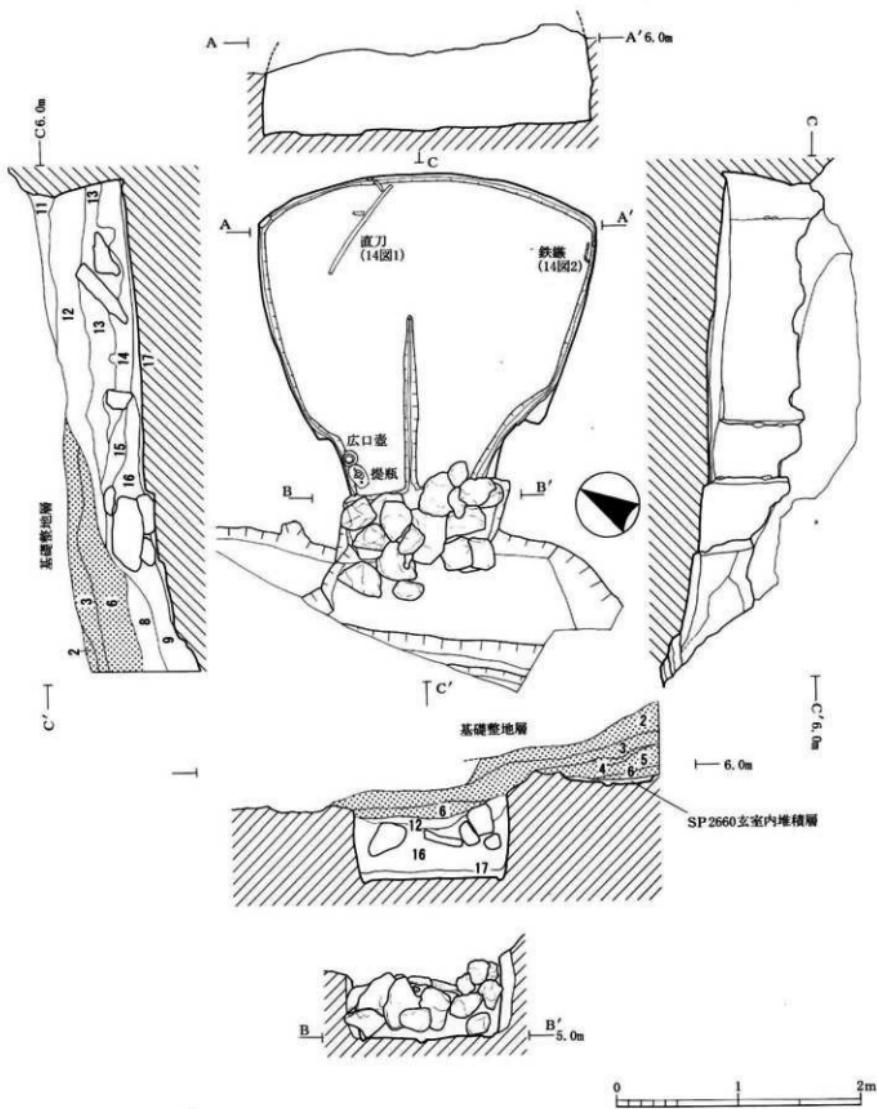
鉄刀（第 14 図 1）は全長約 90cm、身幅約 2.5cm の刀身がほぼ完存する直刀である。銹化が著しく折えや細部は不明である。茎尻に目釘が残り、その片側に倒卵形で八窓の板鈔の破片が銹着している。鉄鏃（第 14 図 2）は長さ 15cm の長頸の端刃箭で、茎に糸巻きの痕跡が残る。

須恵器提瓶（第 15 図 7）は、口縁部をわずかに欠くがほぼ完形である。単純に聞く無文の口頭部で、肩部に鈎手状の鈎手が付く。底部に残る楕円形の焼台痕跡の部分を除き、ほぼ全面に光沢のある黒灰色の光沢を帯びた自然釉がかかる。広口壺（第 15 図 8）は、口縁部がほぼ直立し、肩の張る器形で、体部下半はヘラケズリが施され丸底である。

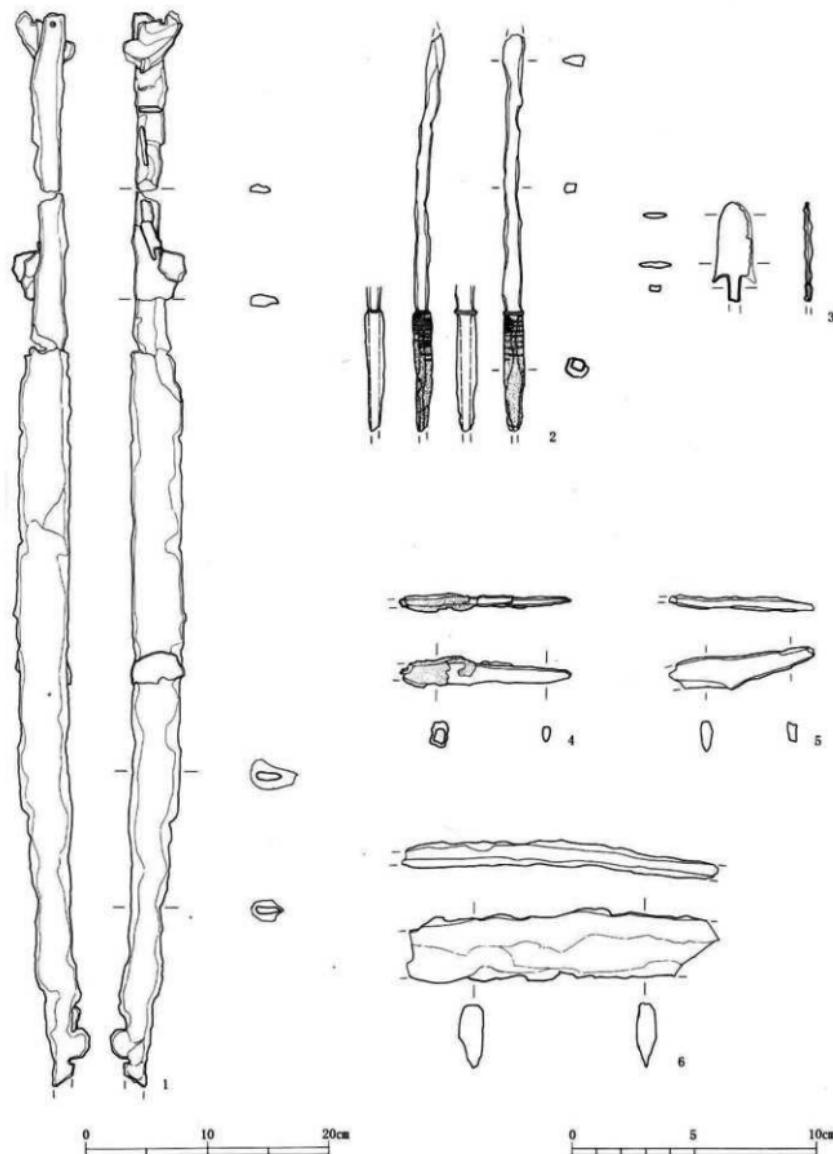
この他、玄室床もしくはその直上の黒褐色土層から、鉄刀、刀装具の破片や鉄鏃破片が出土している。また、玄室内の褐色土層から土器有段丸底杯、陥没坑に堆積した灰白色火山灰を含む層からは須恵系土器が出土しているが、いずれも小破片で図示できるものはない。

No.	土 色	土性	備 考	性 格
11	にふい黄褐色(10YR6/4)	シルト	凝灰岩片を多量に含む。	
12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	凝灰岩片を多量に含む。	天井崩落土
13	褐色(10YR4/6)	シルト	凝灰岩片を含む。	
14	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
15	暗褐色(10YR3/4)	シルト		
16	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト		玄室内堆積層
17	黒褐色(10YR2/2)	シルト		

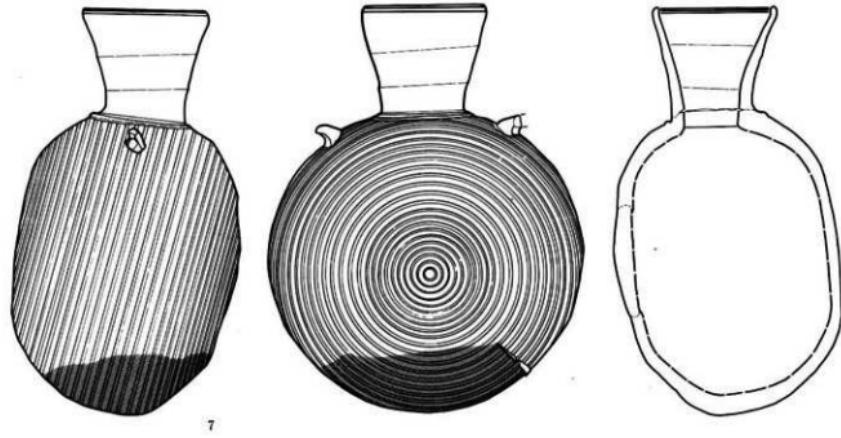
第 13 図 SP2661 横穴墓堆積土層観察表



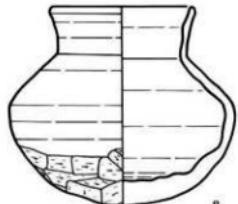
第13図 SP2661横穴墓



第14図 SP2661横穴墓出土遺物（1）



7



8

0 5 10cm

第15図 SP2661横穴墓出土遺物（2）

No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
1	鉄刀	SP2661・床	全長 90 cm、刃幅 2.5 cm。茎尾に目釘穴 1 つ。茎に倒卵形の八窓板鈔の破片が付着。柄は不明。	T2RM-1	B13242	B23418 B23417-9
2	鉄鎌	SP2661・床	長さ 15 cm の長頸式の施刃鎌。茎に矢柄の木質と糸巻きが残る。	T2RM-2	B13242	B23417-7
3	鉄鎌	SP2661・床	長さ 4 cm。平模式の逆刺を有する鎌。	T2RM-3	B13242	B23417-8
4	刀子	SP2661・床	残存長 7 cm、刃幅 1 cm。刃部に木質が残存。	T2RM-4	B13242	B23417-5
5	刀子	SP2661・床	残存長 6 cm、刃幅 1.3 cm。刃部に木質が残存。	T2RM-5	B13242	B23417-6
6	鉄刀	SP2661・床	刃部のみの破片。残存長 13 cm、刃幅 3 cm。	T2RM-6	B13242	B23417-4

No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
7	須恵器提瓶	SP2661・床	橢成堅職。肩部に鈎手状の釣手。底部に橢台底跡が残る。	SP2661-R1	B13235	B23373A
8	須恵器壺	SP2661・床	橢成軟質。丸底。底部はヘラケズリ。	SP2661-R2	B13235	B23373A

#### (4) その他の遺構と出土遺物

土壌（S K2665）、溝跡（S D2662・2667・2668・2673）、近世に碑文（写真図版6）が刻まれた自然石（第10図）がある。

##### 【S K2665 土壌】

【位置・検出状況】調査区北部の微高地上の現表土直下で検出した（第2図）。

【形態・規模】平面形は東西1.2m、南北1mの長方形を呈する。底面には凹凸があつて、中央部は確認面からの深さが40cmの深いピット状をなす。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、壁や底面には、掘削に用いた刃幅5cm前後の工具痕が残る。

【堆積土】1層で、砂岩片を多く含む黄褐色土層である。人為堆積とみられる。

【出土遺物】いずれも破片であるが、丸瓦II類が1点と平瓦IIB類1点、一枚作りとみられるもの（II類）が1点出土している。

##### 【S D2662 溝】

【位置・検出状況】多賀城碑の西側約10mに位置する（第10図）。南西から北東方向に延びる溝跡で、約10m分を検出した。南西から北東の両側は削平されている。

【他の遺構との重複】S X2664 整地層より新しく、東第2層に覆われている。

【形態・規模】幅2m前後、深さは10cm前後である。

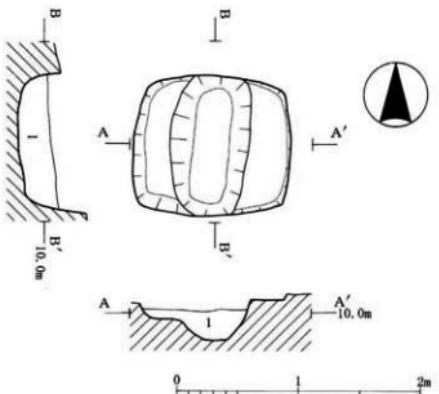
【堆積土】1層で、褐色土層である。

【出土遺物】近世の瓦の他に古代の土器と瓦および風字硯（第17図3）も出土している。近世の瓦には平瓦片と軒丸瓦があり、軒丸瓦は周縁に珠文を配した三巴文軒丸瓦である。

古代の土器は土師器の甕、須恵器の壺と甕が少量あるが、いずれも小破片資料で図示できるものはない。瓦は摩滅して角のとれた小破片資料が多量に出土している。種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、丸瓦と平瓦が主体を占める。軒瓦には7210-A・B不明均整唐草文軒平瓦（6）、640单弧文軒平瓦の他に瓦当面が剥落した軒丸瓦がある。丸瓦は確認できたものはすべてII類である。平瓦にはIA類、IIB類、IIB類aタイプ、IIB類bタイプ、IIC類がある。

##### 【S D2667 溝】

【位置・検出状況】調査区中央部でS F202 築地塀跡の北側約7mに位置する（第5図）。築地塀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約9m分を検出した。東西両側は削平されている。



第16図 SK2665 土壌平面図・断面図

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。

第16図 SK2665 土壌平面図・断面図

【他の遺構との重複】南第3層に覆われている（第6図A-A'）。

【形態・規模】築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは南壁で20cm前後である。

【堆積土】1層で、褐色土層である。

【出土遺物】摩滅して角のとれた瓦の破片資料が少量出土している。種類には丸瓦と平瓦がある。丸瓦はII類で、平瓦はIA類、IB類、IB類bタイプである。

#### 【S D2668溝】

【位置・検出状況】調査区中央部でS F202 築地塀跡の北側約8mに位置する（第5図）。築地塀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約10m分を検出した。東西両側は削平されている。

【他の遺構との重複】南第3層に覆われている（第6図A-A'）。

【形態・規模】築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは南壁で10cm前後である。

【堆積層】1層で、褐色土層である。

【出土遺物】摩滅して角のとれた瓦の破片資料が多量出土している。丸瓦と平瓦があり、丸瓦はすべてII類である。平瓦はIA類、IB類、IB類aタイプ、IB類bタイプ、IC類である。

#### 【S D2673溝】

【位置・検出状況】調査区南西部でS F202 築地塀跡の北側約8mに位置する（第5図）。築地塀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約10m分を検出した。東西両側は削平されている。

【他の遺構との重複】南第3層に覆われている（第6図C-C'）。

【形態・規模】築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは10cm前後である。

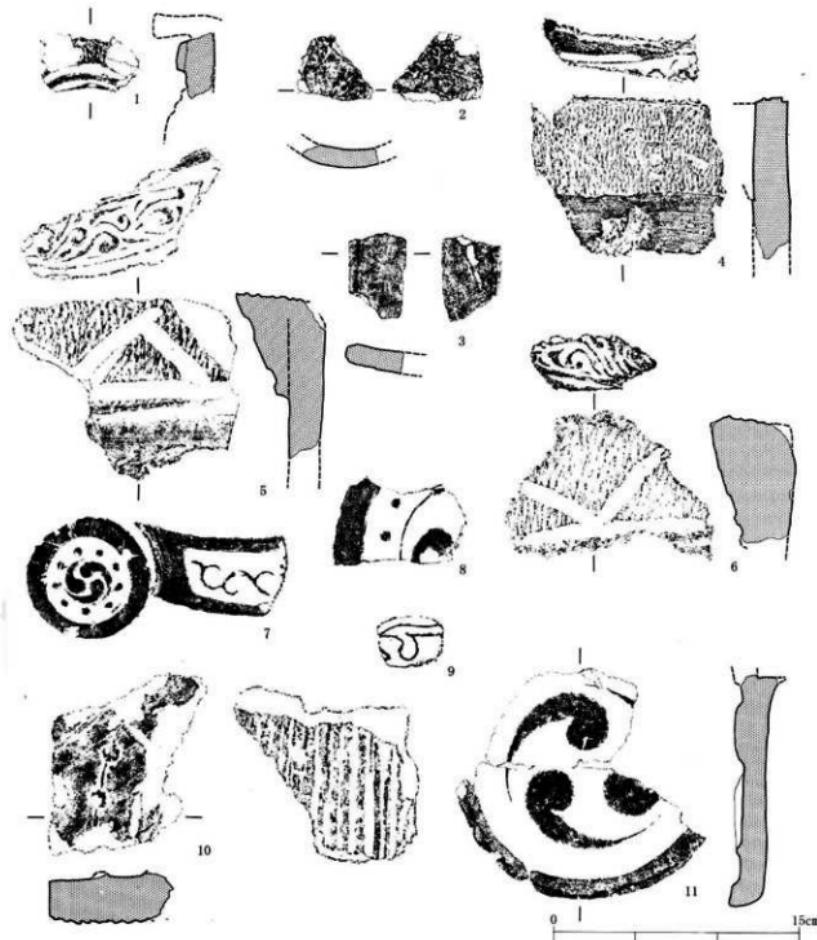
【堆積層】1層で、黒褐色土層である。

【出土遺物】摩滅して角のとれた瓦の破片資料が少量出土している。種類には丸瓦と平瓦がある。丸瓦は確認できたものはすべてII類で、I類は確認できない。平瓦はIB類、IC類である。

### （5）その他の出土遺物

近世の堆積層である北2層と表土から少量の土器類の他に、古代と近世の瓦が多量に出土している。土器類には古代の土師器、須恵器、須恵系土器の他に近世から現代までの陶磁器類が出土している。これらはいずれも破片資料で図示できるものはない。

近世の瓦には本瓦と桟瓦（第17図7）の2種類ある。本瓦には三巴文軒丸瓦（8・11）、軒平瓦（9）、丸瓦、平瓦があり、これらの瓦は多賀城碑の覆屋に葺かれていた瓦と考えられる。古代の瓦も多量に出土しており、種類としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他に鬼瓦の破片（10）が出土している。鬼瓦は、中央に配された重弁蓮花文の周縁に珠文と偏向唐草文がめぐる破片で、裏面には竜の子状の圧痕がみられる。この様な特徴は第48次調査で出土した953鬼瓦と共通している。



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	名古屋号
1	軒丸瓦	SX2675 整地層	陰刻花文 (451)、第IV期	R2	B13240	D23406
2	風字礎か?	SX2675 整地層	表面ケズリ、裏面ナデ?	R5	B13240	D23432
3	風字礎か?	S02662 溝	表面 (凹面) 布目→ナデ?、裏面 (凸面) ナデ	R2	B13240	
4	軒平瓦	SX2675 整地層	均整唐草文 (721)?、第III~IV期	R3	B13240	D23428
5	軒平瓦	SX2675 整地層	均整唐草文 (721-A)?、第III~IV期	R4	B13240	D23385
6	軒平瓦	S02662 溝	均整唐草文 (721-A・B不明)、第III~IV期	R1	B13240	
7	軒桟瓦	表土	丸瓦部; 連珠三巴文、平瓦部; 均整唐草文、近世	R3	B13241	D23392
8	軒丸瓦	表土	連珠三巴文、近世	R4	B13241	D23402
9	軒桟瓦	表土	平瓦部; 均整唐草文、近世	R7	B13241	D23393
10	鬼瓦	表土	953 鬼瓦、裏面質の子状圧痕、第II期	R1	B13241	D23425・23426
11	軒丸瓦	表土	三巴文、近世	R2	B13241	D23416

第17図 SX2675 整地層出土遺物・その他の出土遺物

## 4. 考察

第 72 次調査で検出した主な遺構は、南辺築地塀跡に関連する遺構、政庁—南門間道路跡に関連する遺構、横穴墓がある。以下、要点を整理し、これまでの調査の各成果と比較検討することで、本地区のそれぞれの遺構の変遷・年代・性格について考察する。

### (1) 南辺築地塀跡について

今回の調査で確認された築地塀跡とその補修および崩壊土、整地層の関係は次のように整理される。

#### 築地塀跡、崩壊土、嵩上げ整地層の層位関係

##### 【a 築地塀跡とその補修】

- ・ a 築地塀跡に b ~ e の 4 回の補修が確認された。
- ・ S X2670・2671・2676 土壌は、S X2670 土壌が c 補修以前、S X2671 土壌が b 補修以後で d 補修以前であるが、ほぼ等間隔で並ぶこと、規模・形状が類似すること、堆積土が類似することなどから同時期に構築された一連の遺構である可能性が高く、その時期は層位関係が明確な S X2670・2671 土壌のありかたからみて、b 補修以後で c 補修以前と考えられる。
- ・これらの新旧関係は次のように整理される。

S F 202 a 築地塀 → b 補修 → (S X2670・2671・2676 土壌) → c 補修 → d 補修 → e 補修

##### 【崩壊土、整地層の層位関係】

- ・築地塀北側には崩壊土が 5 層と、整地層が 3 層堆積している。
- ・築地塀南側には崩壊土が 2 層と整地層が 1 層堆積している。
- ・築地塀南北両側の層の対比により、堆積層は次のように整理される。

築地塀北側の堆積層	築地塀本体	築地塀南側の堆積層
南第 3 層 (崩壊土)		
南第 4 層 (崩壊土)	e 補修	南第 4 層 (崩壊土)
南第 5 層 (整地層)	c・d 補修	南第 5 層 (整地層)
南第 6 层 (崩壊土)	S X2670・2671・2676 土壌	南第 6 層 (崩壊土)
南第 7 層 (整地層)	b 補修	
南第 8 層 (崩壊土)	a 築地塀跡	
南第 9 層 (整地層)		
南第 10 層 (崩壊土)		

- ・なお、南側の堆積層が少ないのは補修にともなって築地基底まで堆積層を削り出したためと考えられる（註）。

##### 【築地塀跡と堆積層の関係】

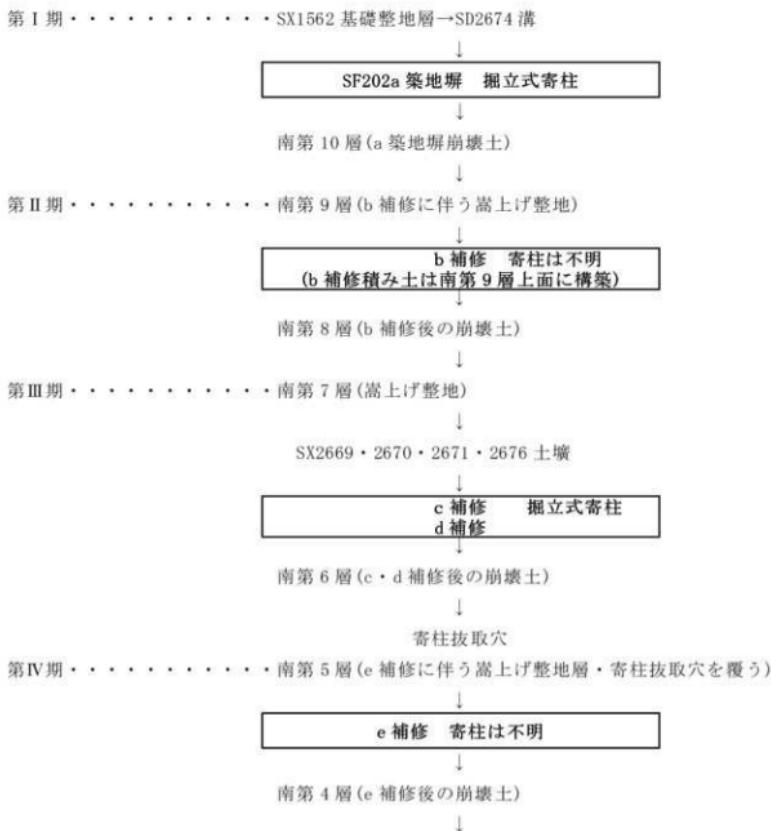
- ・南第 10 層は a 築地塀の北側犬走り北辺の S D 2674 槽を埋めていることと、南第 9 層（b 補修に伴う嵩上げ整地層）の下層にあることから、b 補修以前の崩壊土と考えられる。
- ・南第 9 層は a 築地塀の崩壊土（南第 10 層）上にあり、b 補修積み土の下層にあることから、b 補修に伴う犬走りの嵩上げ整地層とみられる。
- ・南第 8 層は b 補修に伴う嵩上げ整地層（南第 9 層）の上にあり、S X 2669 土壌を覆うこと、南第 7 層は S X 2669 土壌の下層にあることから、南第 8 層は b 補修後の崩壊土で、南第 7 層は S X 2669 土壌

の構築に伴う整地層と考えられる。

- ・南第6層はe補修積み土の下層にあり、SX2669土壤を覆っていることから、e補修前でc補修後の崩壊土と考えられる。
  - ・寄柱抜取穴(P18・43)は、b補修積み土との関係からc補修以後で、南第6層を掘り込んでいることから、d補修における柱の抜取穴である可能性が高いと考えられる。したがって寄柱穴はc補修に伴うと考えられる。また、抜き取り穴を直接覆う南第5層はd補修後で、e補修に伴うと考えられる。
  - ・南第3・4層はe補修積み土の上にあり灰白色火山灰層の下にあることから、e補修後で灰白色火山灰層以前の崩壊土と考えられる。

### 【築地堀跡と堆積層の変遷】

以上のことから、S F 202 築地埠跡に関連する遺構と堆積層の変遷は、次のように整理される。



南第3層（e補修以降、灰白色火山灰降下以前の崩壊土）

↓

南第2層（灰白色火山灰層）

## これまでの調査成果との対比

### 【南辺築地壙跡に関わるこれまでの調査成果】

南辺築地壙に関わるこれまでの調査成果（第7・8・20・34・48次）を南門の東西に分けて概括すると次のようになる。（表3）

#### 外郭南門西側（第8・20次調査）

【第Ⅰ期】基礎整地上に版築された築地壙S F 202A。基底幅が2.7mで寄柱は掘立式。

【第Ⅱ期】S F 202Aに部分的補修をした礎石式寄柱の築地壙S F 202B（第8次調査）。

【第Ⅳ期】焼土を含む整地層上に版築されたS F 202C（第20次調査）。

#### 外郭南門東側（第7・34・48次調査）

【第Ⅰ期】基礎整地上に版築された基底幅2.7mで掘立式寄柱のS F 202A築地壙。

【第Ⅱ期】S F 202築地壙上部を削平して版築した礎石式寄柱の築地壙。

基底幅は、第7次では2.6m、第48次では2.7m、第34次では3.1m。

第7次調査では礎石上で焼土層を確認している。

【第Ⅲ期】S F 202築地壙上部を削平して版築した基底幅2.4mの築地壙。

寄柱は、第24次では掘立式、第34・48次では礎石式である。

【第Ⅳ期】築地壙上部を削平して版築し、基底部に瓦列を伴う基底幅2.1mの築地壙。

寄柱は、第24・34次では掘立式、第7・48次では礎石式である。

【第Ⅳ期後半】掘立式で基底部に瓦列をともなう第34次調査の築地壙S F 202E。

### 【今回の南辺築地壙跡の位置づけ】

今回の調査では、S F 202築地壙跡に関わる火災の痕跡や出土遺物などの時期的位置付けをおこなう具体的な資料は得られなかった。しかし、今回の築地壙跡の調査成果をこれまでの南辺築地壙の調査成果と比較すると、a築地壙跡は、基礎整地上に版築された基底幅2.6mの掘立式寄柱の築地壙であることから、これとほぼ同様の規模・構造とみられる第7・8・20・34・48次調査のS F 202Aと一連のものと考えられ、a築地壙跡については政府造構期の第Ⅰ期に位置付けられる。一方、e補修は、基底部に瓦列を伴う特徴から、第7次調査で瓦列が確認されたS F 202Cに共通する構造をもつものとみられ、第Ⅳ期に位置付けられる。

b・c・d補修については、前項でみたようにS X 2670・2671・2676土壤が伊治公皆麻呂事件後の築地壙補修に先立って配置された外郭南辺の大改修に関わる一連の造構とみられることから、それ以前のb補修は政府造構期の第Ⅱ期以前に、それ以後のc・d補修は第Ⅲ期以後に位置付けられる。これまでの調査成果と比較すると、b補修はa築地壙跡の部分的な補修である点で第8次調査のS F 202Bに類似し、c補修は掘立式寄柱である点で、第24次のS F 202B'もしくは、第24次のS F 202

C、第34次のS F 202Dに共通した構造を有すると言える。これらのことから、b補修は第Ⅱ期に、c補修は第Ⅲ期に位置付けられる可能性がある。

### 築地塀跡に關わる問題

#### 【S X 2670・2671・2676 土壌について】

今回の調査で、南門西側の築地塀跡の軸線上に約5.8mの等間隔で並ぶS X 2670・2671・2676土壌を確認した。時期は、S X 2670 土壌はc補修以前、S X 2671 土壌はb補修以後でd補修以前であるが、ほぼ等間隔で並ぶこと、規模・形状が類似すること、堆積土が類似することなどから同時期に構築された一連の遺構である可能性が高く、層位関係が明確なS X 2670・2671 土壌のありかたからみて、b補修以後でd補修以前と考えられる。

また、S X 2670・2671・2676 土壌は、築地塀上部を削り取る大規模な改修であることから、これらは伊治公皆麻呂事件後、第Ⅲ期の築地塀補修に先立って配置された外郭南辺の大改修に関わる一連の遺構とみておきたい。その具体的な性格として、柱痕跡は確認されていないものの、一辺1m前後の隅丸瓦方形ではほぼ等間隔に並ぶことから、柱列の抜取穴である可能性を考えたい。これは、第7・48次調査で、第Ⅱ期の外郭南門が伊治公皆麻呂事件による焼失した後、第Ⅲ期の南門が建設されるまでの間の仮の遮蔽施設であった可能性が指摘されているS A 1538柱列に対応するものと考えられる。

#### 【外郭南門と西側築地塀の接続部分について】

外郭南門とその西側の築地塀の接続部分は削平により積み土が完全に失われ、その細部を検討することはできない。ただし、残存する基礎整地の範囲とその西側の積み土の方向から推測して、築地塀は南門の梁間中央に6度前後の傾きをもって接続していたと考えられる。

また、基礎整地の上面とその西側の積み土の版築の層理面が西方に下降していることから、南門西側の築地塀の屋根は水平に葺かれたのではなく10度前後の傾斜をもっていたと考えられる。

(註)

第48次調査では、南門東側の築地塀南側は火災以前に地山を削りだしていることが確認されている。

表3 南辺築地壠跡の調査成果 対応表

## (2) 政府－南門間道路跡に関する遺構について

南門北側で古代の溝4条と整地層を発見した。溝と整地層は位置関係から城内の主要道路である政府－南門間道路跡の側溝と路面下の整地層とみられる。今回発見された堆積層、溝、整地層の特徴を概説し変遷を検討する。

### 堆積層、溝、整地層の新旧関係

南門北側では、基盤の凝灰岩が東第2層（近世以降の堆積層）で直接覆われ、古代の遺構の残りは悪いが、窪地などには部分的に灰白色火山灰を含む東第3層が残存し、その下層に東第4層や溝、整地層がある。これらの新旧関係を検討する。

#### 【堆積層と整地層】

- ・ S X 2664 整地層は政府中軸線の西側で検出し、政府遺構期第IV期の瓦が含まれることから、第IV期以降の整地層と考えられる。
- ・ S X 2675 整地層は政府中軸線の東側で検出し、東第4層に覆われる。
- ・ S X 2664 整地層と S X 2675 整地層との新旧関係は不明である。

#### 【政府中軸線の東側の溝】

- ・ 政府中軸線の東側にある S D 2672 溝は、東第4層に覆われ、S X 2675 整地層を掘り込んでいる。
- ・ S D 2672 溝は、S D 2658 溝と対をなす政府－南門間道路東側溝と考えられ、路幅は23mである。

#### 【政府中軸線の西側の溝】

- ・ 政府中軸線の西側にある S D 2663 溝、S D 2657 溝、S D 2658 溝の層位の新旧関係は不明である。
- ・ S X 2664 整地層は S D 2663・2657 溝を覆い、S D 2658 溝との関係は不明である。
- ・ これら3条の溝は、時期の異なる政府－南門間道路西側溝と考えられ、政府中軸線で折り返した推定路幅は S D 2663 溝が約10m、S D 2657 溝が約13m、S D 2658 溝が約23mである。
- ・これまでの調査成果により、政府－南門間道路が路幅約23mに拡幅されるのは政府遺構期の第III期とみられることから、S D 2672 溝、S D 2658 溝は第III期以降の道路側溝と考えられる。

以上の政府－南門間道路跡に関する遺構および堆積層の新旧関係は、次のように整理される。



## 時期設定

今回の調査では、政庁—南門間道路跡に関わる遺構について、層位関係や出土遺物など年代や時期推定が可能な資料は得られなかった。しかし、これまでの政庁—南門間道路跡に関わる第43・44・50次調査の成果をまとめた第50次調査成果と比較することで、各遺構の時期推定と変遷を検討する。

### 【これまでの調査成果との対比】

政庁南門南側の第50次調査により、政庁—南門間道路跡である「S X 1604 道路跡」は、盛土や側溝、石列などの位置関係から、A、B、Cの3時期の変遷があり、A、B期はさらに各2つの小期に分かれるとしている。各時期の推定路幅は政庁中軸線で折り返した数値で次のようになる。

S X 1604 道路跡 A 1 期	： 推定路幅約 13m
S X 1604 道路跡 A 2 期	： 推定路幅約 11m
S X 1604 道路跡 B 1・2 期	： 推定路幅約 13m
S X 1604 道路跡 C 期	： 推定路幅約 23m

各期は、出土遺物などの検討からA期が政庁遺構期の第Ⅰ期、B期が第Ⅱ期、C期が第Ⅲ・Ⅳ期となる。

今回の第72次調査区と第50次調査区は距離にして200m以上離れていることから、第50次調査の推定路幅や時期変遷について詳細な対比はできないが、これまでの調査成果により、政庁—南門間道路が路幅約23mに拡幅されるのは政庁遺構期の第Ⅲ期とみられる点は、時期推定の大きな指標となる。そこで、今回発見された溝の位置関係を、第50次調査各期の路幅と比較すると、S D 2658・2672溝は路幅が約23mと推定され、S X 1604 道路跡C期に対応する政庁遺構期の第Ⅲ期以降のものと考えることができる。S D 2657溝は推定路幅が約13mと推定されるS X 1604 道路跡A 1もしくはBのいずれかに対応することから、政庁遺構期の第Ⅰ・Ⅱ期のものとみられる。また、S D 2663溝は中軸線で折り返した場合の推定路幅が約10mであることから、第50次調査のA 2期に対応し、政庁遺構期の第Ⅰ期のものとみられる。整地層についてはS D 2658・2672溝の間に分布するS X 2664 整地層が出土遺物から第Ⅳ期以降のものであり、S X 1604 道路跡C期における整地層と考えられる。

### 【路面について】

南門北側における政庁—南門間道路跡の本来の路面は、浸食により失われていて推定困難である。調査では、本来の道路敷に基盤の凝灰岩中に含まれるアルコース砂岩塊を20個以上検出した(第10図)。これらは上部が浸食により現れたものの基底部は岩盤中に元位置を留めているとみられる(註)。これらが古代の路面に露出していたとは考え難く、したがって本来の路面の高さはこれらの岩塊の上端よりも高く、今回検出されたS X 2664・2675 整地層よりも30~50cm高かったものと推定される。

この他、道路側溝と道路跡の変遷もしくは南門への取り付き方など、解明すべき点は多いが、来年度は第73次調査として本年度実施した第72次調査のすぐ東側を調査する予定であり、来年度の報告で総括することとしたい。

(註)

アルコース砂岩については『年報1997』「付編 1. 多賀城碑の石材の供給源の検討」(永広昌之)を参照

### (3) 横穴墓について

第48次調査で外郭南門地区西側に「田屋場横穴墓群」が分布することを確認した。今回、築地塀北側の基礎整地層下で新たに横穴墓2基を確認したことと、第48次調査で発見された築地塀南側の3基とあわせ、計5基の横穴墓を確認したことになる。地形からみると築地塀本体の基礎整地層下や第72次調査区の北西には、さらに複数の横穴墓が埋没していると推定される。ここでは、これらの横穴墓についてその造営年代を検討し、主に南辺築地塀との関係を考察する。

#### 横穴墓出土遺物の年代

S P 2661 横穴墓からは、玄室床から鉄製品が、玄門床から須恵器が出土している。このうち、玄室床出土の直刀・刀子・鐵鏃は鏃により細部の特徴が不明確で年代を検討することができない。玄門床出土の須恵器提瓶、壺のうち、提瓶は肩部に付された釣り手が突起状をなす特徴から、大阪府陶邑窯跡群の須恵器編年におけるT K 43~209型式に比定され、6世紀後葉から7世紀前葉の年代が想定される（田辺：1981）。壺も丸底で広口であるという器形的特徴から同様の年代が想定され、これらは出土状況から横穴墓に伴うもので、その年代観は横穴墓造営年代の一端を示すと考えられる。

S P 2660 横穴墓は出土遺物がないが、S P 2661 横穴墓の前庭部の壁面を掘り込んでいることから、これよりも新しい年代のものである。

第48次調査では、S P 1559・1560 横穴墓出土土器の検討から、横穴墓造営年代を7世紀後葉から8世紀前葉と想定している。今回発見されたS P 2661 横穴墓出土遺物は、田屋場横穴墓群の造営年代の上限が6世紀後葉から7世紀前葉まで遡り得ることを示している。なお、田屋場横穴墓群の西側に広がる沖積平野には、古墳時代後期の集落跡である「山王・市川橋遺跡」が立地している。これらの集落跡は6世紀後半から7世紀代に存続しており（宮城県教育委員会：2001.3）、これらの集落の居住者が田屋場横穴墓群の造営に深く関わったものと考えられる。

#### 横穴墓と築地塀基礎整地との関係

第48次調査のS P 1559・1560 横穴墓については、天井の残る玄室内部を空洞のまま残して入り口をS X 1562 基礎整地により塞いでいる。今回のS P 2661 横穴墓も、前庭部から羨道部の天井崩落土を覆うように基礎整地がなされていることから、天井の残る玄室内部を空洞のまま残して入り口を基礎整地により塞いでいることが判明した。ただし、玄室部の天井崩落土の上には灰白色火山灰を含む自然堆積層がみられることから、築地塀構築時に残っていた天井部がその後崩壊し、灰白色火山灰が降下した10世紀前半頃には玄室上部が壅みとなっていたと考えられる。これに対し、S P 2660 横穴墓は、基礎整地が玄室床上堆積層を直接覆い、他の堆積層や天井崩落土がみられないことから、築地塀基礎整地時に天井が削り取られ埋められたことがわかる。

### 引用文献

- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成 I』
- 古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成 II』
- 古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成 III』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』VII
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 中村浩編 1997 『須恵器集成図録 第6巻 補遺・索引編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1971 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1975 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1986 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997 一第 68 次調査・多賀城碑覆屋  
解体修理-』
- 宮城県教育委員会 2001 『山王遺跡八幡地区の調査 2』 宮城県文化財調査報告書第 186 集

### III. 現状変更に伴う調査

特別史跡多賀城跡附寺跡において、平成 7 年度から平成 10 年度まで行った現状変更に伴う発掘調査 8 件について、地区ごとに報告する。

#### 1. 多賀城跡五万崎地区(第 18 図)

##### (1) 鈴木清任宅の発掘調査

位置：市川字五万崎 38-4・5 調査期間：平成 10 年 9 月 8・9 日

原因：住宅増改築 発掘調査面積：29 m<sup>2</sup>

##### 1) 調査区

外郭西門跡の南約 60m に位置し、外郭西辺築地塀跡の東側にある。標高は約 13m でほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約 2.5m、東西約 11.5m の方形で、発掘面積は約 29 m<sup>2</sup> である。

##### 2) 基本層序

基本層序は表土である第 1 層(黒褐色土)、10 世紀前葉に降下した灰白色火山灰(註)である第 2 層、黒褐色土である第 3 層、地山である第 4 層(明黄褐色土)の 4 層に区分した。

##### 3) 発見した遺構と遺物 (第 19 図、写真図版 11-1)

発見した遺構に土壤 1 基と溝 1 条、ピット 3 個がある。S K 2568 土壌と S D 2569 溝は灰白色火山灰層との関係から 10 世紀前葉より新しいものと判断できる。

**【S K 2568 土壌】**調査区西で第 2 層(灰白色火山灰層)上面から確認した。土壤として扱っているが、遺構の大部分が調査区外のため溝の可能性もある。規模は長軸で 1m 90 cm 以上、深さ 55 cm ほどである。堆積層は黒褐色土と暗褐色土の 2 層で自然堆積層である。堆積層からの出土遺物に土師器甕の破片がある。

**【S D 2569 溝】**調査区東で第 2 層(灰白色火山灰層)上面から確認した。幅 60~70 cm、深さ 40 cm、断面形が台形の溝で南北方向に延びる。堆積層は黒褐色土で自然堆積層である。堆積層からの出土遺物に土師器坏の破片と須恵器坏の破片、平瓦 II B 類 a タイプ(政庁第 II 期)1 点と丸瓦 II 類 2 点がある。

**【S X 2570~2572 ピット】**調査区西で S K 2569 土壌底面で検出した。いずれも一辺 14~22 cm の方形で、堆積層は褐灰色土である。S X 2570 ピットからの出土遺物に、土師器坏・甕の破片、須恵器坏・壺・甕の破片、平瓦 II B 類 5 点(政庁第 II 期が 4 点)と丸瓦 II 類 6 点(政庁第 II 期が 4 点)がある。

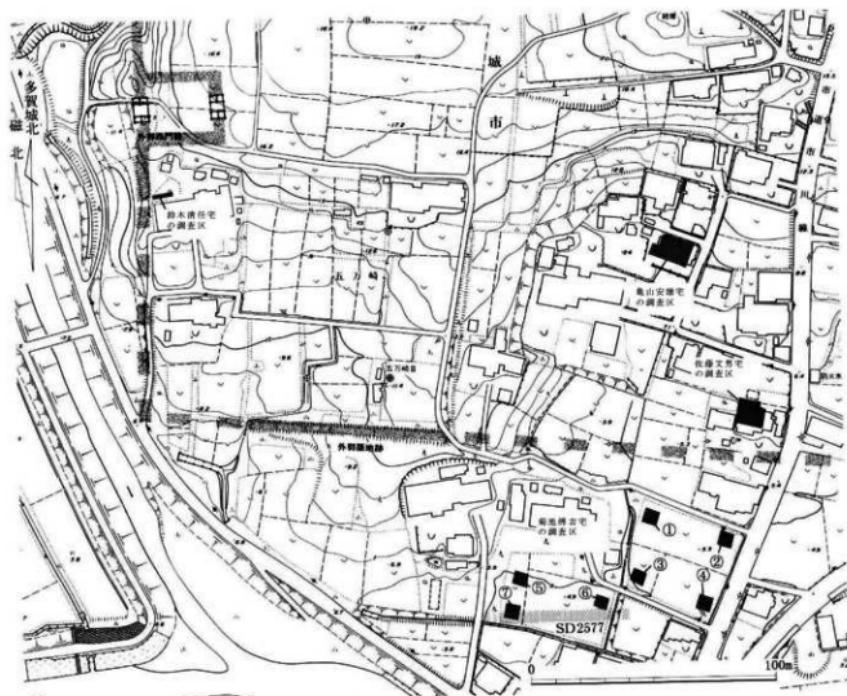
##### 【遺構外出土の遺物】

基本層序第 1~3 層および調査区中央の擾乱から、遺物収納平箱 7 箱分の土師器、須恵器、瓦などが出土した。出土した遺物の多くは破片である。内容がわかるものに次のものがある。

第 3 層：土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕、鉄滓 1 点、平瓦 II B 類(刻印「物」A が 2 点、「田」A が 1 点、刻印があるものは政庁第 II 期)。なお土師器甕には製作にロクロを使用しているものを含む。

第 2 層：須恵器坏・甕。

第 1 層：土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・壺・甕・蓋、円面鏡(第 19 図 1)。

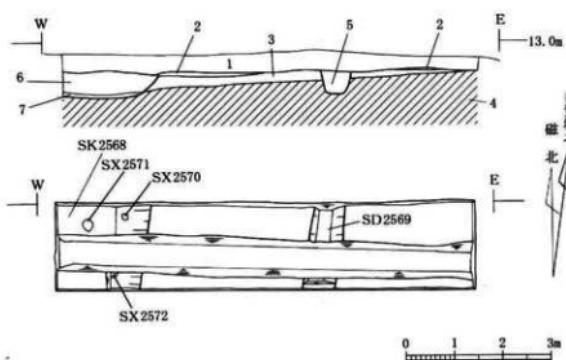


第18図 五万崎地区発掘調査区

No.	種類	通位	特徴	登録	番号
1	円面鏡	1層	円窓・箇所織縫	85	13001

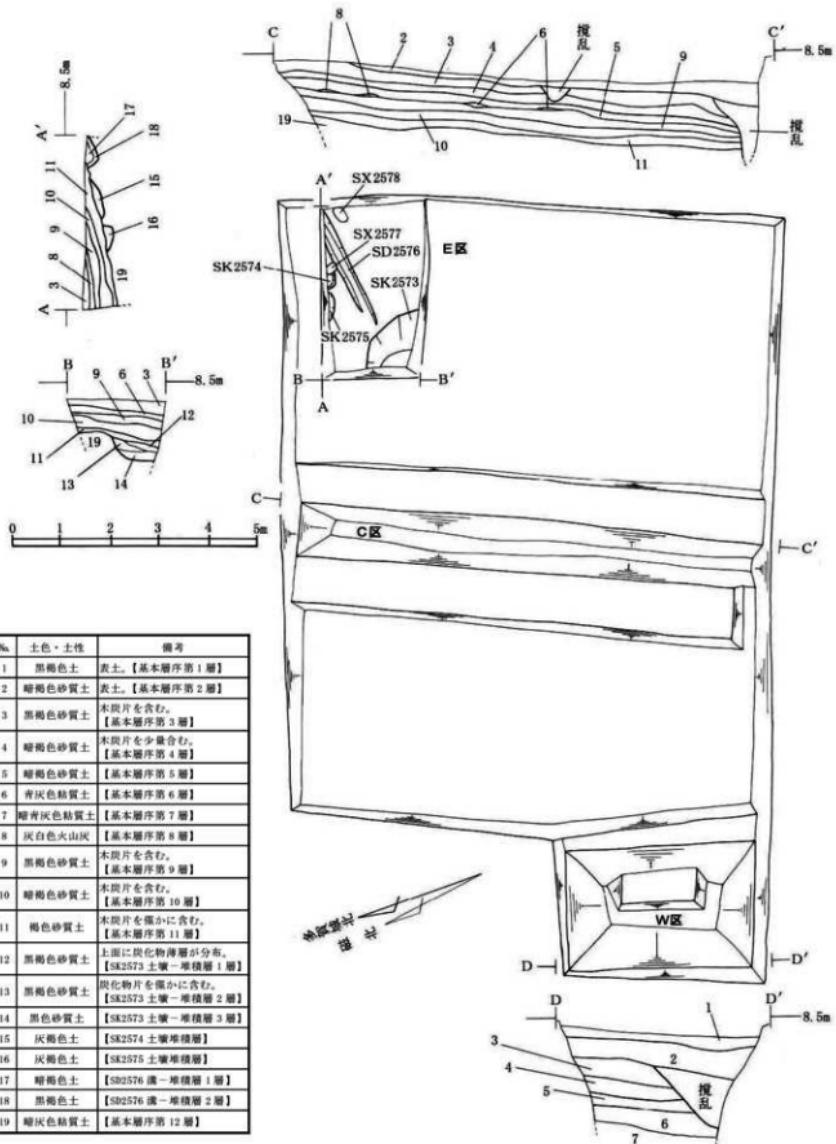


(縮尺1/3)



第19図 鈴木清住宅の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)・出土遺物

No.	土色・土性	備考
1	黒褐色土	しまりなし。表土。
2	灰白色火成灰	【基本層序第1層】
3	黒褐色土	しまっている。
4	明褐色土	【基本層序第3層】
5	黒褐色土	地山。
6	黒褐色土	【基本層序第4層】
7	暗褐色土	基本層序第2層 上面より積出 【SD2568 滾丸埴縫 層上層】
		全体に貝殻を含む。 基本層序第2層上 面上より積出。 【SK2568 土壌一堆积 層上層】
		地山粒を若干含む。 【SK2568 土壌一堆积 層2層】



第20図 龜山安雄宅の発掘調査平面図 (1/100)・断面図 (1/100)

機乱：宝相花文軒丸瓦(423 番：政府第IV期)、平瓦II B類(刻印「物」Aが1点、「矢」Bが1点：政府第II期)、中世陶器頭部破片1点。

## (2) 亀山安雄宅の発掘調査

位置：市川字五万崎 28

調査期間：平成9年6月25日～7月3日

原因：住宅改築・浄化槽の設置

発掘調査面積：143 m<sup>2</sup>

### 1) 調査区

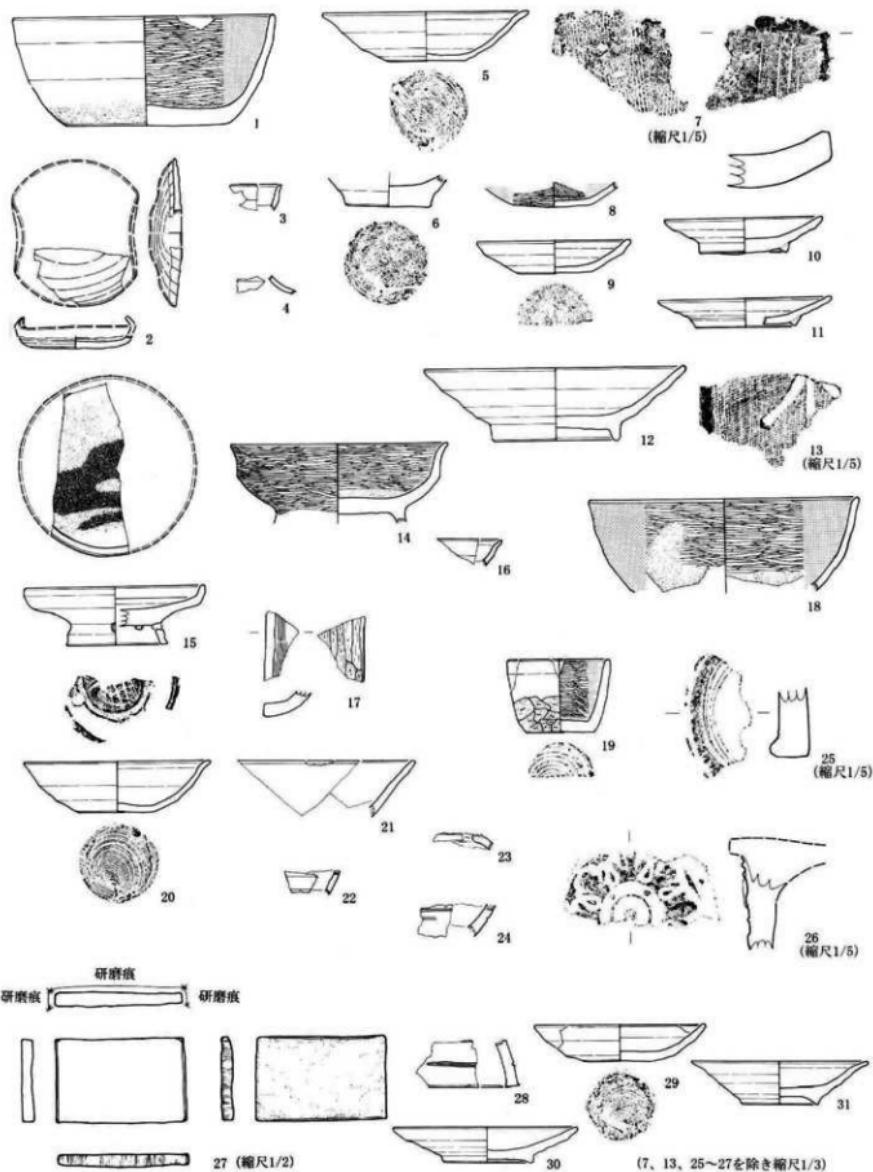
外郭西門跡の東約200mにあたる。坂下地区の位置する丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の中間で、幅の広い沢地である。標高は約8.5mでほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約10m、東西約16mの不整形で、発掘面積は約143 m<sup>2</sup>である。

### 2) 基本層序

基本層序は表土である第1・2層(黒褐色土・暗褐色砂質土)・砂質土である第3～5層(黒褐色砂質土・暗褐色砂質土)、粘質土である第6・7層(青灰色粘質土・暗青灰色粘質土)・灰白色火山灰層である第8層、砂質土である第9～11層(黒褐色砂質土・暗褐色砂質土・褐色砂質土)・粘質土である第12層(

No.	種類	層位	特徴	登録番号
1	土師器杯	11層	E区出土。内面、ヘラミガキ(横位)～黒色處理。口径(15.8)cm、底径9.8cm、器高7.7cm、残存1/2。	R21 13010
2	灰釉陶器耳瓶	9層	E区出土。頭投窓製品。内面に灰釉(刷毛肥り)。残存1/4、黒唇14号式 or 99号式。	R26 13010
3	灰釉陶器壺	8層	E区出土。口縁部破片。内外面に灰釉。	R28 13010
4	灰釉陶器壺	8層	E区出土。頭投窓片。内外面に灰釉。	R29 13010
5	須恵系土器壺	6層	W区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。口径(12.0)cm、底径4.8cm、器高3.0cm、残存2/3。	R1 13010
6	須恵系土器壺	6層	W区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。底径5.0cm、残存3/4。	R3 13010
7	平瓦	6層	W区出土。平瓦ⅡB類・タイプ2。凸面、圓切き目(横位)。凹面、布目ナダ。色調灰灰。	R49 13010
8	土師器壺	4層	W区出土。灰瓦。内面へラミガキ(黒色處理)。残存1/2。	R8 13010
9	須恵系土器壺	4層	W区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。口径(9.4)cm、底径(4.6)cm、器高2.0cm、残存1/3。	R4 13010
10	須恵系土器高台坪	4層	W区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。口径(9.6)cm、高台径5.4cm、器高2.2cm、残存3/4。	R5 13010
11	須恵系土器高台坪	4層	W区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。口径(10.6)cm、高台径(6.0)cm、器高1.7cm、残存1/4。	R6 13010
12	須恵系土器高台坪	4層	W区出土。【底部】回転糸切りナダ。口径(15.8)cm、高台径7.4cm、器高4.5cm、残存1/3。	R7 13010
13	平瓦	4層	W区出土。BII類・タイプ2。凸面、圓切き目(横位)。凹面、布目ナダ。ヘラ書き「木」。色調灰灰。	R50 13010
14	須恵器高台坪	3層	E区出土。内面へラミガキ(横位)。底部に切欠き。口径13.2cm、残存3/4。胎土鐵錆。	R30 13010
15	須恵器高台坪	3層	E区出土。内面に施釉・墨絵。底部に不へラ書き。口径(11.0)cm、高台径(6.2)cm、器高3.5cm、残存1/3。	R9 13010
16	灰釉陶器壺	3層	E区出土。口縁部破片。内面、灰釉(刷毛肥り)。胎土鐵錆。頭投窓製品。黒唇14号式 or 99号式。	R32 13010
17	風呂碗	3層	E区出土。内面ナダ。外側へラクゼ。色調、内外面灰。胎土鐵錆。	R31 13010
18	土師器壺	2層	内面ナダ、ヘラミガキ(横位)～黒色處理。口径(16.4)cm、残存1/3。	R44 13010
19	土師器壺	2層	C区出土。内面、ヘラミガキ(横位)～黒色處理。外面。体下部へラケズリ。底部回転糸切り無調整。口径(16.2)cm、底径(4.0)cm、器高4.5cm、残存1/2。	R35 13010
20	須恵系土器壺	2層	C区出土。【底部】回転糸切り無調整。色調。内外面赤褐色。口径(11.4)cm、底径4.6cm、器高3.0cm、残存2/3。	R26 13010
21	棘輪陶器壺 or 壺	2層	C区出土。口縁部破片。内外面棘輪。胎土鐵錆。頭投窓製品。	R37 13010
22	灰釉陶器壺	2層	C区出土。体部破片。内面、灰釉(刷毛肥り)。胎土鐵錆。頭投窓製品。	R34 13010
23	灰釉陶器壺	2層	頭部破片。内面に灰釉。胎土鐵錆。頭投窓製品。	R42 13010
24	棘輪陶器壺	2層	W区出土。外面に2条の横輪。内外面棘輪。胎土鐵錆。	R14 13010
25	軒瓦	2層	C区出土。垂擔文軒丸瓦(型番不明)。色調灰灰。厚さ3.1cm。政府第IV期。	R53 13010
26	軒瓦	2層	C区出土。平和文軒丸瓦422。色調灰灰。厚さ3.5～3.0cm。政府第IV期。	R52 13010
27	石帶の芯方	2層	C区出土。石材粘板岩。色調灰。長さ5.2cm、幅4.4cm、厚さ0.5cm。3段研磨盤。	R40 13010
28	円面鏡	鉢	脚落破片。外面に沈線。	R46 13010
29	須恵系土器壺	鉢	【底部】回転糸切り無調整。色調灰灰。口径(10.4)cm、底径4.6cm、器高2.2cm、残存1/2。	R17 13010
30	須恵系土器高台坪	鉢	【底部】回転糸切りナダ。色調灰灰。口径(10.7)cm、高台径5.4cm、器高2.6cm、残存2/3。	R19 13010
31	須恵系土器高台坪	鉢	【底部】回転糸切りナダ。色調灰灰。	R18 13010

第21図 亀山安雄宅の発掘調査出土遺物 ( ) 内の数値は復元値である。



第21図 龜山安雄宅の発掘調査出土遺物

～暗灰色粘質土)の12層に区分した。

### 3) 発見した遺構と遺物(第20・21図、写真図版11-2・13-9~17)

発見した遺構に、土壤4基と溝1条がある。確認面はいずれも基本層序第11層下面である。遺構は全て、第8層(灰白色火山灰)より古いことから10世紀前葉以前の古代のものと判断できる。これらの遺構のうち、遺物を出土したのはSK2573土壤のみである。

**【SK2573土壤】**調査区西で確認した。遺構の大きさは、長軸で1m20cm以上、深さ60cmほどである。堆積層は、褐色と黒褐色の砂質土で3層に分かれ、いずれも自然堆積層である。出土遺物に土師器壺・甕の破片、須恵器壺・甕の破片がある。

#### 【遺構外出土の遺物】

基本層序第1~6・8~11層から、遺物収納平箱5箱分の土師器、須恵器、須恵系土器、瓦などが出士した。多くは破片資料であるが内容がわかるものに以下のものがある。出土地点は調査区中央のC区、東にあたるE区、西にあたるW区の3地点に区分し、各層ごとに取り上げている。なお、現代の陶器を含む第2層以下は図示したもののみ記載した。

第11層:土師器壺(第21図1)、須恵器甕、丸瓦II類。

第10層:土師器壺・高台壺・甕、平瓦I A類(政庁第I期)、丸瓦II類。

第9層:土師器壺・高台壺・甕、須恵器壺・蓋・壺・甕の破片、須恵系土器壺、灰釉陶器耳皿(2)、平瓦II B類・II C類(政庁第IV期)、丸瓦II類、砥石。

第8層:土師器壺・高台壺、須恵器壺・壺・甕の破片、須恵系土器壺・高台壺の破片、灰釉陶器甕(甕4)、平瓦II B類、丸瓦II類。

第6層:土師器壺・高台壺・甕、須恵器壺・甕・羽釜、須恵系土器壺(5・6)、高台壺・高台鉢、平瓦II B類(7)・II C類(政庁第IV期)、丸瓦II類。

第5層:土師器壺、須恵器壺・壺・甕、須恵系土器壺・高台壺。

第4層:土師器壺(8)・高台壺・甕、須恵器壺・蓋・壺・甕、須恵系土器壺(9)、高台壺(10・11)・高台壺(12)、平瓦II B類(13)・II C類(政庁第IV期)、丸瓦II類。

第3層:土師器壺(8)・甕、須恵器高台壺(14)・盤(15)・壺・壺・須恵系土器壺・高台壺、灰釉陶器(16)、風字硯(17)、平瓦II B類・II C類(政庁第IV期)。

第2層:土師器壺(19)・須恵系土器杯(20)、綠釉陶器甕または皿(21)・塊(24)、灰釉陶器塊(22)・壺(23)、重圓文軒丸瓦(25)、宝相花纹軒丸瓦(26)、石帶の巡方(27)。

排土:須恵系土器壺(29)・高台壺(30・31)。

### (3) 佐藤文男宅の発掘調査

位置:市川字五万崎22

調査期間:平成7年6月15日・16日

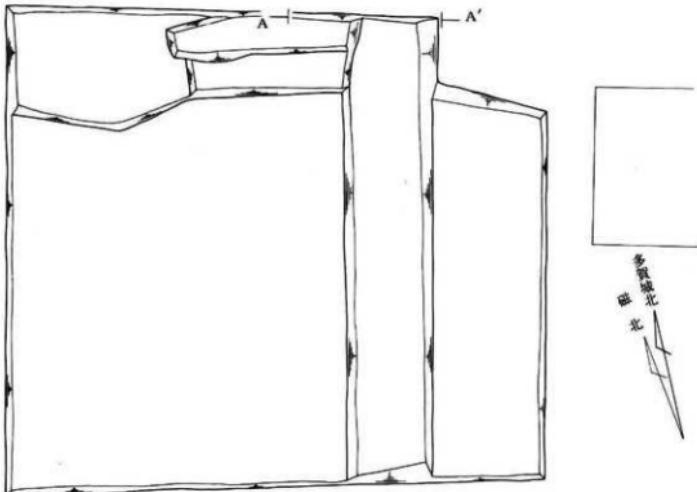
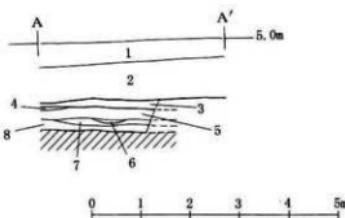
原因:住宅改築

発掘調査面積:105m<sup>2</sup>

#### 1) 調査区

外郭西門跡の東約300mにあたる。坂下地区のある丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の中間で、幅

No.	土色・土性	備考
1	黄褐色砂	山砂土。【基本層序第1層】
2	暗緑灰色砂質土	表土。【基本層序第1層】
3	青黒色砂質土	遺物が多い。【基本層序第2a層】
4	オリーブ黒色砂質土	発灰分小ブロックを含む。 【基本層序第2b層】
5	暗色砂質土	【基本層序第2c層】
6	黒褐色土	燒土・木炭片が多く含む。 【基本層序第2d層】
7	黒褐色砂質粘土	【基本層序第2e層】
8	黒褐色粘質土	泥土。【基本層序第2f層】
9	暗オリーブ褐色土	【基本層序第3層】



第22図 佐藤文男宅の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)

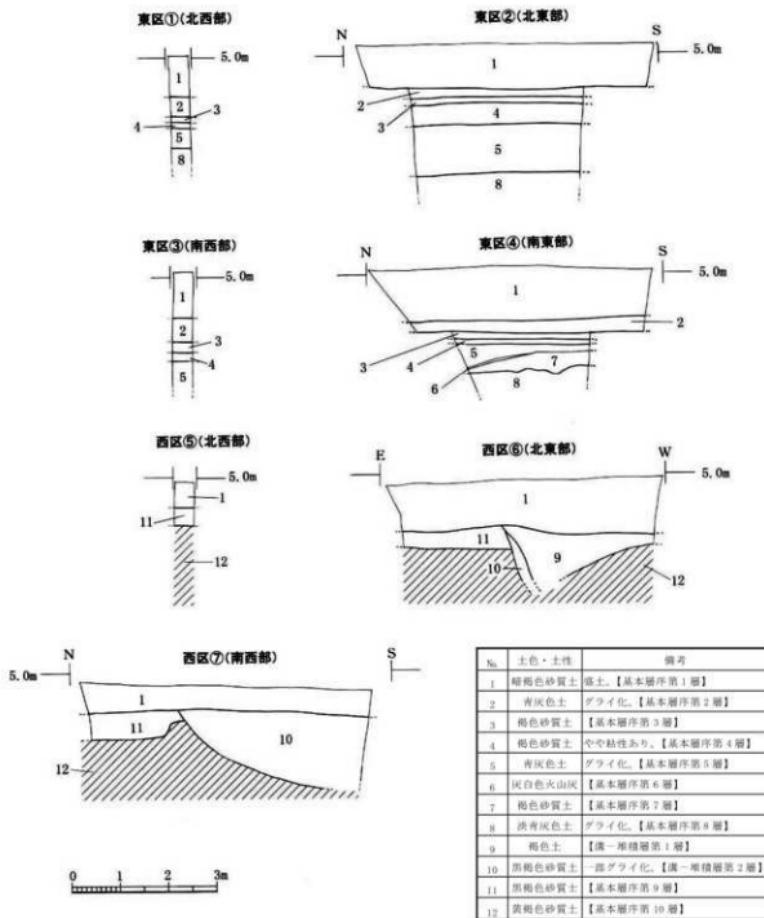
の広い沢地に位置する。外郭南辺築地跡から北約20mの地点である。「(2)亀山安雄宅の発掘調査」をおこなった調査区の約50m南にあたる。標高は約5mでほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約10m、東西約11mの不整形で、発掘面積は約105m<sup>2</sup>である。

## 2) 基本層序

基本層序は住宅建設に伴う盛土と表土である第1層(黄褐色砂・暗緑灰色砂質土)、古代の遺物を含む第2層(灰黒色または灰褐色土)、地山である第3層(黄褐色土)に分け、第2層はa~fの6層に細分した。

## 3) 発見した遺構と遺物(第22図)

遺構は確認されなかった。遺物は基本層序第2層からのみ出土し、遺物収納平箱で2箱分である。出土遺物に、土師器壺・高台壺・甕の破片、須恵器壺の破片、須恵系土器壺・高台壺の破片、円面硯の破片、転用硯(須恵器蓋)、重弁蓮花文軒丸瓦(型番不明)、平瓦IA類(政府第I期)・IIA類・IIB類bタイプ(政府第III期)、丸瓦II類がある。



第23図 菊池傳吉宅の発掘調査区断面図 (1/100)

#### (4) 菊池傳吉宅の発掘調査

位置：市川字五万崎17

調査期間：平成10年9月8日・9日

原因：ビニールハウス設置工事

発掘調査面積：252 m<sup>2</sup>

#### 1) 調査区

調査区は外郭西門跡の東南約300mにあたり、坂下地区のある丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の

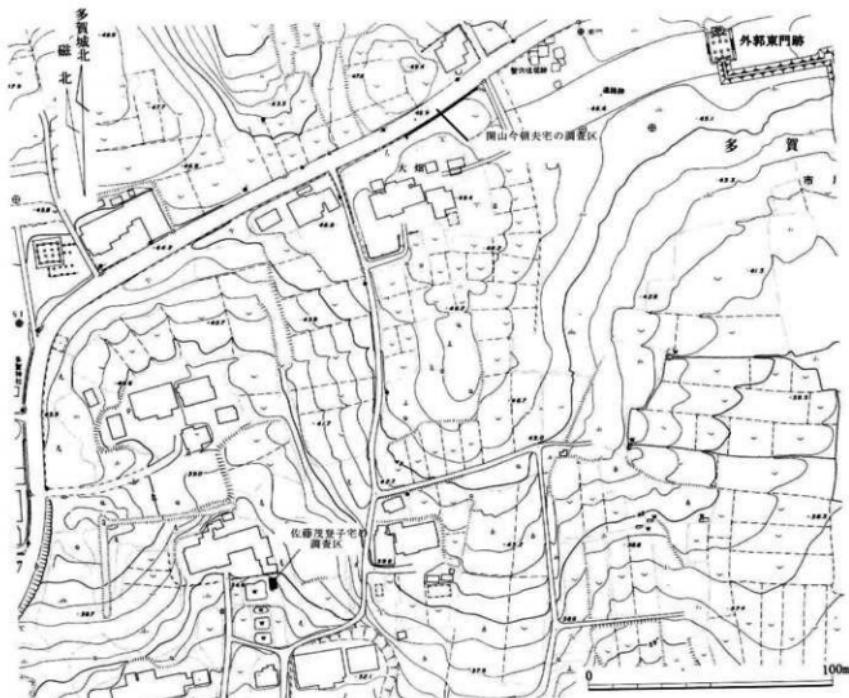
中間で、幅の広い沢地に位置する。外郭南辺築地跡推定地から南約20mの地点にあたる。「(3)佐藤文男宅の発掘調査」を行った調査区の約40m南である。標高は約5mではほぼ平坦であるが、南側が僅かに傾斜し低くなる。東西約6m、南北約6mの調査区を敷地内東の畠で4箇所(①～④)、南の畠で3箇所(⑤～⑦)、合計7箇所設けた。調査面積は約252m<sup>2</sup>である。

## 2) 基本層序

基本層序は盛土である第1層(暗褐色砂質土)、青灰色土または褐色砂質土の第2～5層・灰白色火山灰である第6層、褐色砂質土とそのグライ化した土(淡青灰色土)である第7・8層、黒褐色砂質土である第9層、地山である第10層(黄褐色砂質土)に区分した。

## 3) 発見した遺構と遺物(第23図、写真図版11-4)

発見した遺構にSD2577溝がある。遺物は基本層序第1層からのみ出土している。SD2577溝の年代は、基本層序の第6層(灰白色火山灰層)より下層とみられる層で確認していることから、10世紀前葉より前のものと推測している。

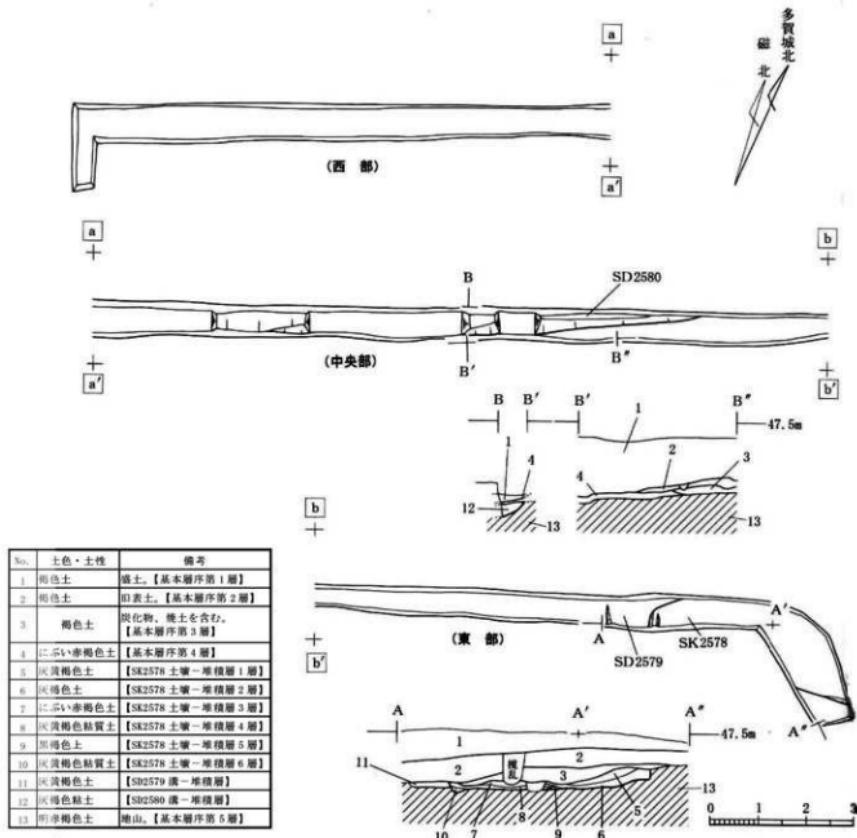


第24図 大畠地区発掘調査区

【SD2577 溝】調査区⑥と⑦で確認した。検出した2箇所を結ぶと約44mとなる。遺構確認面は、第9層上面である。溝方向は溝幅の中心線が東から約4°北へ偏る。大きさは、幅3m以上、深さ1m50cm以上である。堆積層は2層に区分でき、上層は黒褐色砂質土、下層はグライ化した淡青灰色土である。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】基本層序第1層から土師器壊・甕の破片11点、須恵系土器壊の破片4点、平瓦II B類2点が出土した。

## 2. 多賀城跡大畠地区(第24図)



第25図 開山今朝夫宅の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)

## (1) 開山今朝夫宅の発掘調査

位置：市川字大畠 36

調査期間：平成 11 年 3 月 25 日・26 日

原因：土留擁護壁設置工事

発掘調査面積：70 m<sup>2</sup>

### 1) 調査区

平安時代の外郭東門跡の西約 100m に位置する。標高は約 47m でほぼ平坦である。調査区は、市道市川線の南側道路側溝に沿う形で、東西方向に約 37m、幅約 0.8m の大きさで設けた。調査面積は約 70 m<sup>2</sup> である。

### 2) 基本層序

基本層序は盛土である第 1 層(褐色土)、旧表土である第 2・3 層(褐色土)、調査区西のみに分布する第 4 層(にぶい赤褐色土)、地山である第 5 層(黄褐色砂質土)に区分した。

### 3) 発見した遺構と遺物(第 25 図、写真図版 12-5)

発見した遺構に土壙 1 基と溝 2 条がある。遺構確認は全て地山面である。遺構は堆積層の状況から古代のものと推測している。

**【S K2578 土壙】**調査区東で確認した。S D2579 溝と重複しこれよりも新しい。大きさは長軸 4m 以上、短軸 1.5m 以上、深さ 40 cm ほどである。形状は方形と考えられる。堆積層は灰黄褐色と灰褐色を基調とした土が主体で 6 層に区分でき、下層のみ粘質土である。遺物は出土していない。

**【S D2579 溝】**調査区東で確認した。S K2578 土壙と重複しこれよりも古い。溝方向は溝幅の中心が西から約 23° 北へ偏る。堆積層は灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

**【S D2580 溝】**調査区中央で確認した。東西方向に延びる溝である。溝方向は溝幅の中心が西から約 30° 南へ偏る。堆積層は灰褐色粘土である。遺物は出土していない。S D2580 溝は位置とその方向から、平安時代に外郭東門から城内へ延びる道路の北側溝にあたる可能性がある。

**【遺構外出土の遺物】**基本層序第 1 層から平瓦 I A 類(政庁第 I 期)2 点が出土している。

## (2) 佐藤茂登子宅の発掘調査

位置：市川字大畠 12-1

調査期間：平成 8 年 6 月 6 日～21 日

原因：合併処理浄化槽の設置

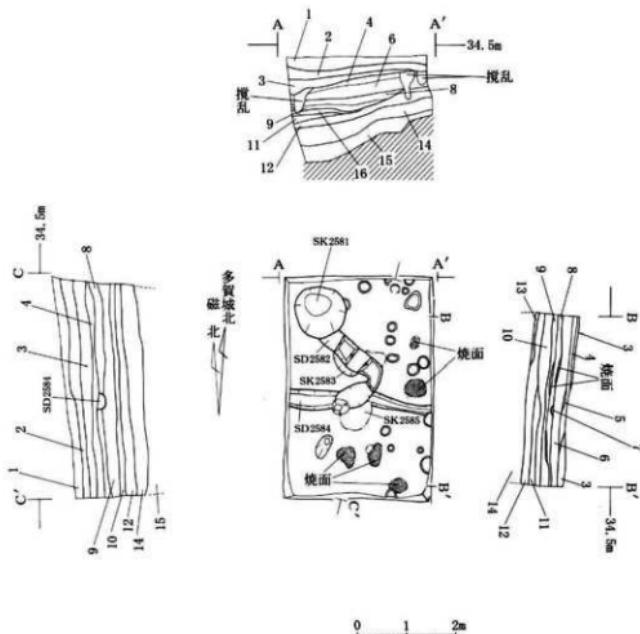
発掘調査面積：15 m<sup>2</sup>

### 1) 調査区

平安時代の外郭東門跡の南西約 180m に位置する。「(1) 開山今朝夫宅の発掘調査」を行った調査区の約 200m 南である。標高は約 35m で緩やかに南に傾斜する。調査区は南北約 5m、東西約 3m で、調査面積は約 15 m<sup>2</sup> である。

### 2) 基本層序

基本層序は表土である第 1 層(黒褐色土)、砂質土である第 2 層、暗褐色土である第 3・4 層、灰白色火



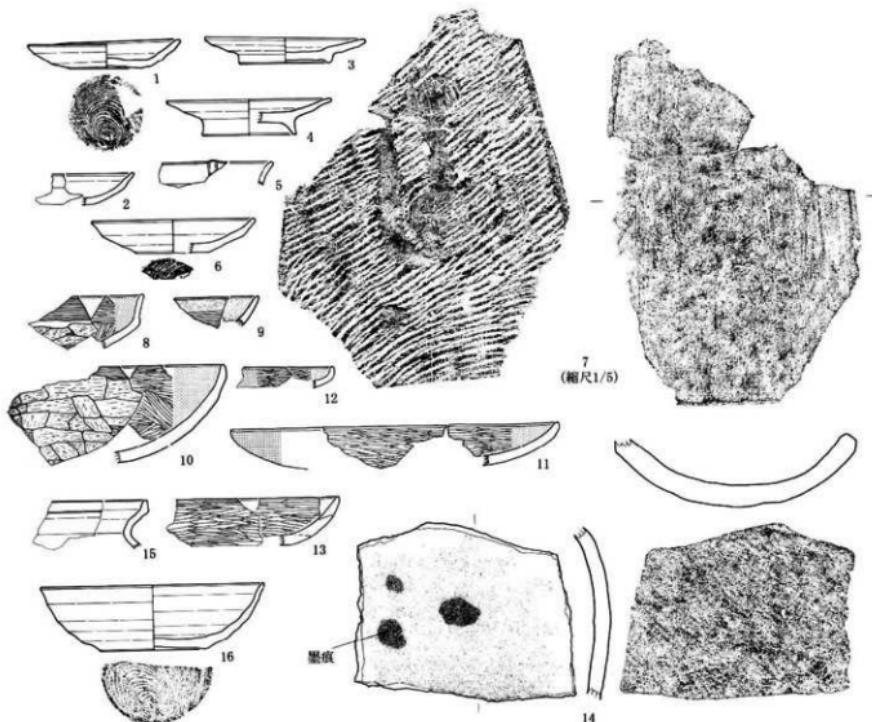
第26図 佐藤茂登子家の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)

山灰である第5層、褐色または黄褐色土である第6~12層、木炭を主体とする第13層、砂質土である第14層、地山である第15層(黄褐色土)に区分した。

### 3) 発見した遺構と遺物(第26~29図、写真図版12-7、13-18~26、14-27~36)

発見した遺構に土壙3基、溝2条、焼面がある。これらの遺構確認面は、SK2581土壙とSD2582溝が第4層上面、SK2583土壙とSD2584溝が第7層上面、SK2585土壙が第8層上面で、焼け面は第7層上面と第8層上面の2面にある。遺構の年代は、第5層(灰白色火山灰層)との関係と出土遺物からSK2581土壙とSD2582溝が10世紀前葉より新しく、SK2583土壙、SD2584溝、SK2585土壙焼面が10世紀前葉より古い古代の遺構と判断できる。

**【SK2581 土壙】** 調査区北西に位置する。平面形は円形で、大きさは径約80cm、深さ約40cmであ

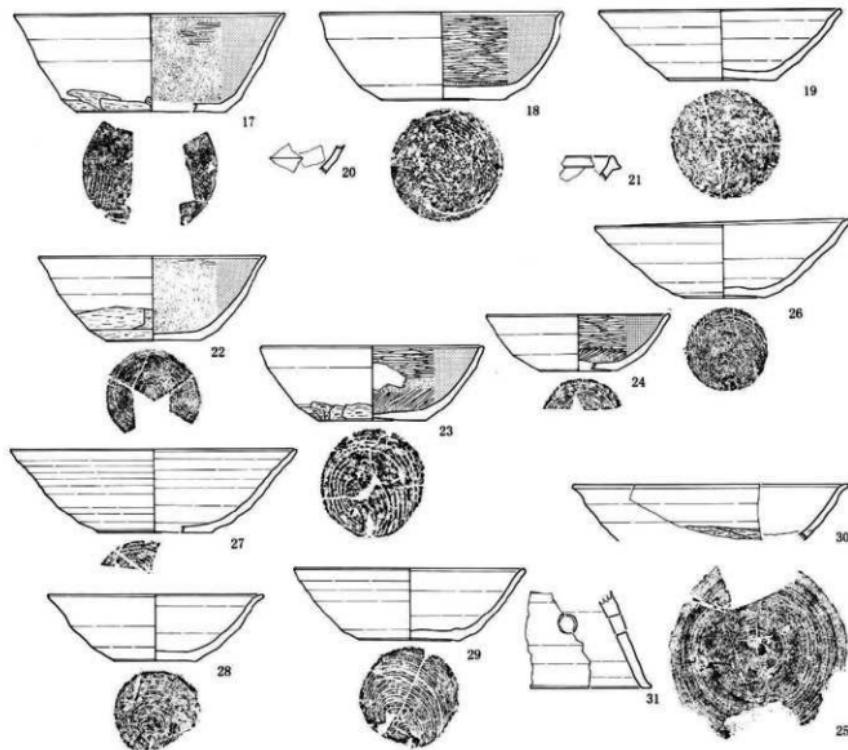


(1~6、8~14は縮尺1/3)

No.	種類	遺跡・層位	特徴	登錄	通番号
1	須恵器縁片	SK2581-堆積層	[底部]回転余切り無調板。口径9.4cm、底径4.4cm、器高1.8cm、色調赤褐、残存7/8。	R116	12790
2	須恵器縁片	SK2581-堆積層	色調濃褐。	R117	12790
3	須恵器高台杯	SK2581-堆積層	[底部]回転余切り無調板。口径9.8cm、高台径5.6cm、器高1.7cm、色調褐灰、注口完形。	R121	12790
4	須恵器高台杯	SK2581-堆積層	口径(10.2)cm、高台径5.8cm、器高2.2cm、色調褐、残存1/4。	R122	12790
5	火鉢陶器輪花塊	SK2581-堆積層	内側面、灰釉。	R133	12790
6	須恵器縁片	SK2582-堆積層	[底部]回転余切り無調板。口径(10.0)cm、底径4.4cm、器高2.1cm。	R134	12790
7	平瓦	13層	洋瓦BB類+タイプ1。凸面、調切き目(斜面)、凹面、有目→ナデ。色調灰褐、政令第Ⅱ期。	R13	12791
8	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナダ、体部ヘラケズリ。内面、ヘラミガキ→黑色処理。	R4	12788
9	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナダ。内面、黒色処理。口縁部に炭化物付着。	R10	12788
10	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナダ、体部ヘラケズリ。内面、ヘラミガキ→黑色処理。	R5	12788
11	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ→黑色処理。口径(20.2)cm。	R1	12788
12	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ→黑色処理。	R2	12788
13	土師器縁片	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ。	R3	12788
14	輪用縫	10層	須恵器縫を転用。内面に縫前と墨板。	R16	12788
15	土師器縁片	9層	製作にロクロ使用。	R29	12788
16	須恵器縁片	8層	[底部]回転余切り無調板。口径(13.8)cm、底径(6.6)cm、器高4.0cm、残存1/3。	R43	12788

( ) 内の数値は復元値である。

第27図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物 (1)

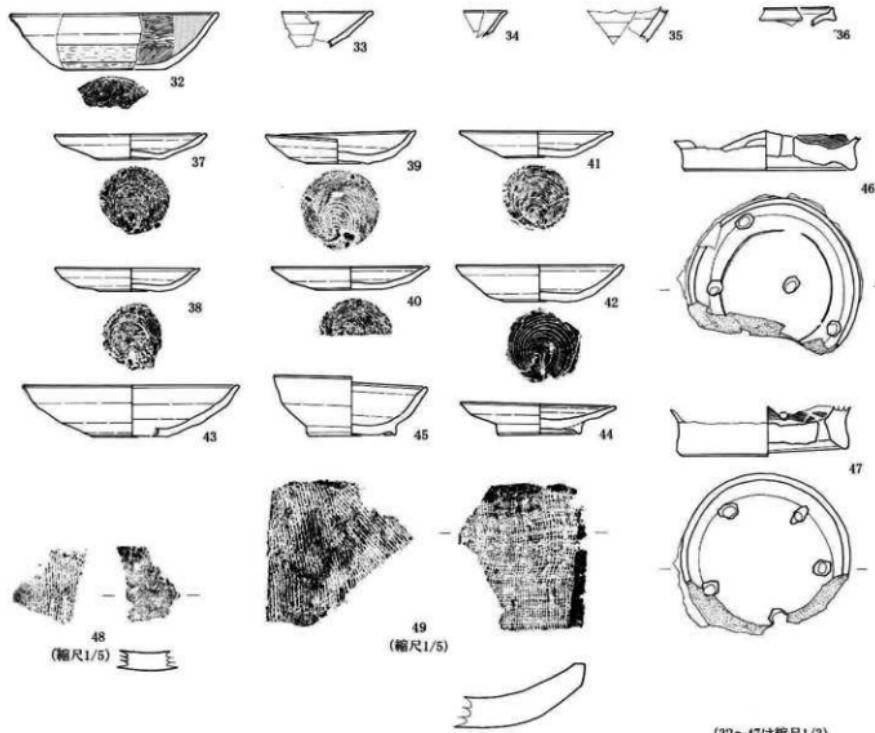


(縮尺1/3)

No.	種類	層位	特徴	登錄	指番号
17	土器杯	7層	[底部～全体] 静止水面切り→手持ちハラケズリ。口径(16.0)cm、底径(9.0)cm、器高6.0cm、残存1/3。	R47	12788
18	土器杯	7層	[底部] 手持ちハラケズリ。口径15.8cm、底径17.4cm、器高5.5cm、残存1/3。	R56	12788
19	須恵器杯	7層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(14.8)cm、底径6.4cm、器高4.3cm、残存2/3。	R50	12788
20	灰釉陶器塊	7層	外外面に灰釉。旅役業製品。	R62	12788
21	灰釉陶器塊	7層	外外面に灰釉。旅役業製品。	R65	12788
22	土器杯	6層	[底部] 回転ハラケズリ。口径(14.0)cm、底径(5.6)cm、器高5.2cm、残存1/3。	R92	12789
23	土器杯	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(13.6)cm、底径6.4cm、器高4.6cm、残存1/2。	R90	12789
24	土器杯	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(11.2)cm、底径4.6cm、器高3.5cm、残存1/3。	R77	12789
25	須恵器甕	6層	回転ハラケズリ。底部外面に堆成痕跡書「十」。	R90	12789
26	須恵器甕	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径15.6cm、底径5.0cm、器高4.6cm、ほぼ完形。	R69	12789
27	須恵器甕	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(17.6)cm、底径7.0cm、器高5.2cm、残存1/4。	R71	12789
28	須恵器甕	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(13.2)cm、底径5.0cm、器高4.1cm、残存1/2。	R70	12789
29	須恵器甕	6層	[底部] 回転水面切り無調整。口径(14.2)cm、底径6.0cm、器高4.4cm、残存2/3。	R72	12789
30	灰釉陶器塊	6層	口径(17.0)cm、外表面に灰釉。旅役業製品。	R97	12789
31	内面観	6層	脚部に円窓1個を確認。	R91	12789

( ) 内の数値は復元値である。

第28図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物（2）



(32~47は縮尺1/3)

No.	種類	層位	特徴	登錄	番号
32	土師器	4層	[底部] 収縮 $\times$ カケズリ。口径(12.8)cm、底径(6.2)cm、高さ3.4cm。残存1/6。	R103	12789
33	灰釉陶器壺	4層	内外面に灰釉(刷毛塗り)。縦投査製品。黒焼14号型式or90号型式。	R99	12789
34	灰釉陶器壺	4層	内外面に灰釉(刷毛塗り)。縦投査製品。黒焼14号型式or90号型式。	R100	12789
35	灰釉陶器壺	4層	内部に灰釉。縦投査製品。	R93	12789
36	灰釉陶器壺	4層	内部に灰釉。縦投査製品。	R105	12789
37	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径9.2cm、底径4.0cm、高さ1.5cm。色調暗灰。残存3/4。	R146	12790
38	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径8.8cm、底径3.8cm、高さ1.4cm。色調暗。残存3/4。	R147	12790
39	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径9.3cm、底径3.8cm、高さ1.9cm。色調暗。完全形。	R142	12790
40	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径(9.6)cm、底径4.0cm、高さ1.5cm。色調暗灰。残存1/2。	R148	12790
41	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径9.2cm、底径4.0cm、高さ1.7cm。色調暗灰。残存4/5。	R145	12790
42	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径(10.2)cm、底径4.4cm、高さ2.2cm。色調暗灰。残存3/4。	R143	12790
43	須恵系土器	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径(13.2)cm、底径(4.6)cm、高さ3.1cm。色調暗。残存1/4。	R152	12790
44	須恵系土器高台	3層	[底部] 収縮 $\times$ 無溝撹。口径9.6cm、基台径5.2cm、高さ2.1cm。色調暗。ほぼ完全形。	R151	12790
45	須恵系土器高台	3層	口径9.4cm、高台径5.2cm、高さ3.7cm。色調暗。ほぼ完全形。	R144	12790
46	土師器	3層	底部に4孔網目。	R179	12790
47	土師器	3層	底部に5孔網目。	R180	12790
48	平瓦	2層	平瓦B C類。凸面、圓切き口(破片)、凹面、布目。色調灰褐。政府第IV期。	R186	12791
49	平瓦	2層	平瓦B C類。凸面、圓切き口(破片)、凹面、布目。色調黒褐。政府第IV期。	R187	12791

( ) 内の数値は復元値である。

第29図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物 (3)

る。堆積土は灰黄褐色土である。出土遺物に、土師器坏・甕の破片・須恵器坏・壺・甕の破片・須恵系土器坏(第27図1・2)・高台坏(3・4)、灰釉陶器輪花塊(5)がある。

【S D 2582溝】調査区中央で確認した。断面台形、幅40cm、深さ15cmほどの溝で「L」形に屈曲する。堆積層は黒褐色土である。出土遺物に、土師器坏・甕の破片・須恵器坏・甕の破片・須恵系土器坏(6・他)・高台坏の破片がある。

【S K 2583 土壙】調査区中央で確認した。平面形は円形で、大きさは径40cm、深さ20cmほどである。堆積層は褐色土である。遺物は出土していない。

【S D 2584溝】調査区中央で確認した。溝は溝幅の中心線がほぼ東西方向で、東西の端は調査区外に延びる。断面形台形、幅約40cm、深さ約15cmの溝である。堆積層は黒褐色土である。遺物は出土していない。

【S K 2585 土壙】調査区中央で確認した。平面形は円形で、大きさは径80cm、深さ2cmほどである。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】基本層序第1~11・13層から、遺物収納平箱で9箱分の土師器、須恵器、須恵系土器、瓦などの遺物が出土した。遺物の多くは破片資料である。器の内容・瓦の種類がわかるものに以下のものがある。なお、第1・2層からは近世以降の陶器が出土している。

第13層：平瓦II B類aタイプ(7)、丸瓦II類。

第11層：土師器坏(8~13)・甕・須恵器坏・壺・甕。

第10層：土師器坏・甕(14)、転用硯(14)、漆製品(用途不明)。

第9層：土師器坏・甕(15)、須恵器坏・高台坏・壺・甕、平瓦I C類(政序第I期)、II B類aタイプ、丸瓦II類。骨片(馬)。

第8層：土師器坏・甕・須恵器坏(16)・高台坏・壺・甕、平瓦I B類bタイプ(政序第I期)・II B類、丸瓦II類。

第7層：土師器坏(第28図17・18)・甕・須恵器坏(19)・壺・甕・須恵系土器高台坏・灰釉陶器塊(20)・壺(21)、平瓦II A類(政序第I期)・II B類・丸瓦II類・砥石。なお土師器坏には漆紙断片付着のものが1点ある。

第6層：土師器坏(22~24)・高台坏・鉢・甕・須恵器坏・壺・甕(25)、須恵系土器坏(26~29)、灰釉陶器塊(30)、円面硯(31)、須恵器甕(25)の底部外面には、焼成後「十」の刻書がみられる。平瓦II B類、丸瓦II類、焼骨片(種類部位は不明)。

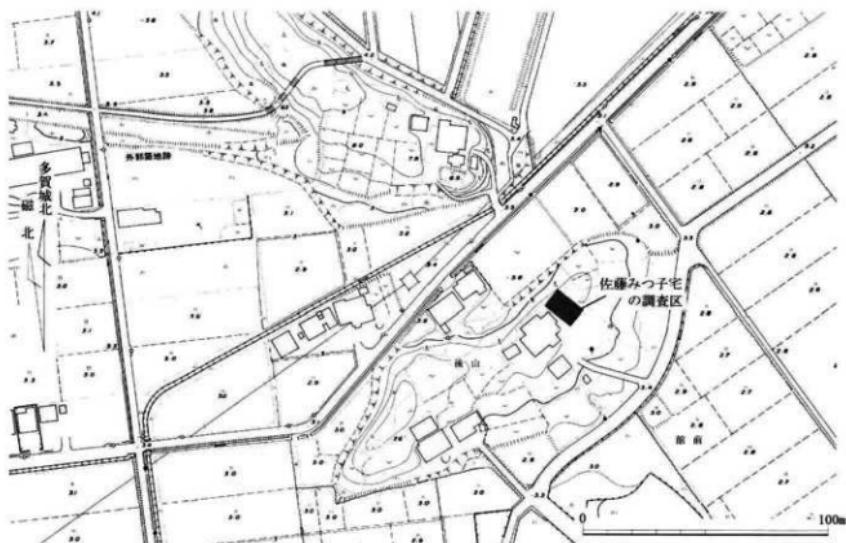
第5層：土師器坏・甕、高台坏。

第4層：土師器坏(第29図32)・甕・須恵器坏・壺・甕・須恵系土器坏・高台坏・高台坏の破片・灰釉陶器塊または皿(33・34)・塊(35)・壺(36)、丸瓦II類。

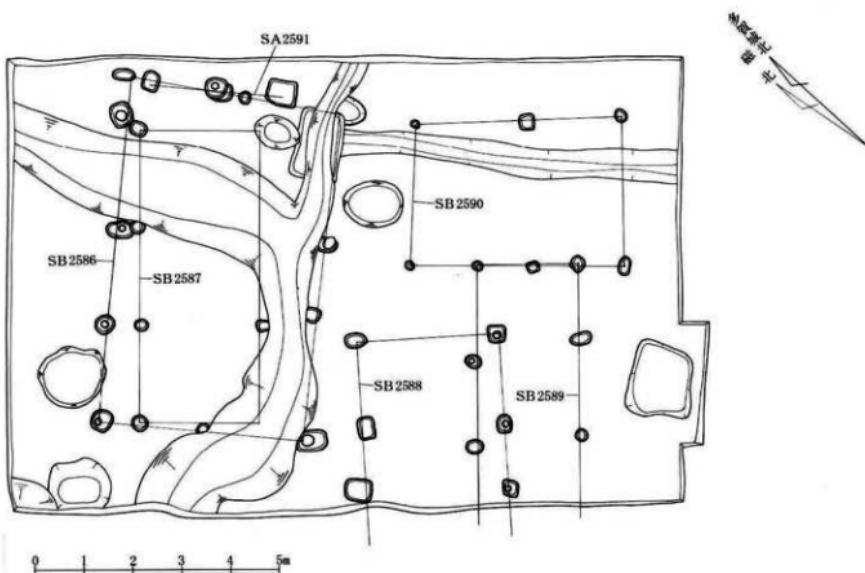
第3層：土師器坏・高台坏・甕(46・47)、須恵器坏・壺・甕・須恵系土器坏(37~43)・高台坏(44・45)、平瓦I A類(政序第I期)・II B類・II C類(48・49；政序第IV期)・丸瓦II類。

第2層：土師器坏・甕・須恵器坏・壺・甕・須恵系土器坏・高台坏、近世以降の陶器。

第1層：土師器坏・甕・須恵器甕・須恵系土器・坏・高台坏・丸瓦II類、近世以降の陶器。



第30図 佐藤みつ子宅の発掘調査区



第31図 佐藤みつ子宅の発掘調査平面図 (1/100)

### 3. 多賀城跡後山地区(第30図)

#### 佐藤みつ子宅の発掘調査

位置：浮島字後山

調査期間：平成10年9月2日～8日

原因：合併処理浄化槽の設置

発掘調査面積：126 m<sup>2</sup>

#### 1) 調査区

外郭線南東端の南西約60mに位置する。標高は約6mで、周辺に比べ3mほど高く、150m×40mほどの小さな台地状の高まりの北端に位置する。調査区は1辺約14mと約9mの方形で、調査面積は約126 m<sup>2</sup>である。

#### 2) 基本層序

基本層序は表土である第1層(褐色土)とその直下に地山である第2層(黄褐色土)に分かれる。

#### 3) 発見した遺構と遺物(第31図、写真図版12-8)

発見した遺構に建物跡5棟と柱列2条がある。建物と柱列はいずれも掘立式である。遺構確認はすべて地山面である。遺構の年代は、層位や遺物から検討する材料はないが、これまで多賀城城内及び周辺から発見されている古代の建物とは建物方向と規模や柱穴の大きさに違いがあり、古代よりも新しい遺構の可能性が高い。

**【S B2586 建物跡】**調査区北に位置する。桁行3間、梁行2間の建物である。S B2587 建物跡、S A2591 柱列跡と重複し、S B2587 建物跡よりも古く、S A2591 柱列跡との新旧関係は不明である。建物方向は北側柱列が北から約55°東へ偏る。柱穴は10個検出し、柱痕跡は3箇所、柱抜取穴は2箇所で確認した。柱穴掘方の堆積層は灰黄褐色土、柱痕跡は灰褐色土である。建物の規模は、桁行総長が北西側柱列で約7.1m(柱間寸法は東から3.1・2.0・2.0m)、梁行総長は南西側柱列で約4.4m(柱間寸法は2.1m)。柱穴をもとにした建物面積は約31.2 m<sup>2</sup>である遺物は出土していない。

**【S B2587 建物跡】**調査区北に位置する、桁行3間、梁行1間の建物である。S B2586 建物跡と重複し、これよりも新しい。建物方向は北側柱列が北から約47°東へ偏る。柱穴は5個検出した。柱穴掘方の堆積層は黒褐色土である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で6.0m(柱間寸法は2.0m)、梁行総長は南西側柱列で2.5mほどである。遺物は出土していない。

**【S B2588 建物跡】**調査区南に位置する。桁行2間以上、梁行1間の建物である。S B2589 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は南側柱列が北から約45°東へ偏る。柱穴は6個検出し、3箇所で柱痕跡を確認した。柱穴掘り方の堆積層は灰黄褐色、柱痕跡は黒褐色土である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で約6.0m(柱間寸法は東から3.6・2.4m)、梁行総長は南西側柱列で約3.0mである。遺物は出土していない。

**【S B2589 建物跡】**調査区南に位置する。桁行2間以上、梁行1間の建物である。S B2588 建物跡、S B2590 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は北側柱列が北から約48°東へ偏る。柱穴は6個検出し、2箇所で柱痕跡を確認した。柱穴掘り方の堆積層は灰黄褐色土、柱痕跡は黒褐色

である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で約 3.7m(柱間寸法は東から 1.9・1.8m)、梁行総長は南西側柱列で約 2.1m である。遺物は出土していない。

**【S B 2590 建物跡】**調査区南に位置する。桁行 2 間、梁行 1 間の建物である。S B 2589 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は西側柱列が北から約 4° 西へ偏る。柱穴は 6 個検出した。柱痕跡は灰黄褐色土である。建物の規模は、桁行総長は南西側柱列で約 4.5m(柱間の間隔は 2.6・1.9 m)、梁行総長は南東側柱列で約 3.0m で、柱穴をもとにした建物面積は約 13.5 m<sup>2</sup>である。遺物は出土していない。

**【S A 2591 柱列跡】**調査区北に位置する。柱間は 2 間、長さ 2.8m(柱間寸法は 1.4m)の柱列である。柱痕跡は灰褐色土である。遺物は出土していない。

**【遺構外出土の遺物】**基本層序第 1 層から平瓦 II B 類 2 点と砥石が出土した。

#### 4. 多賀城廃寺跡地区（第 32 図）

##### 道路側溝改良工事の発掘調査

位置：高崎 1 丁目地内

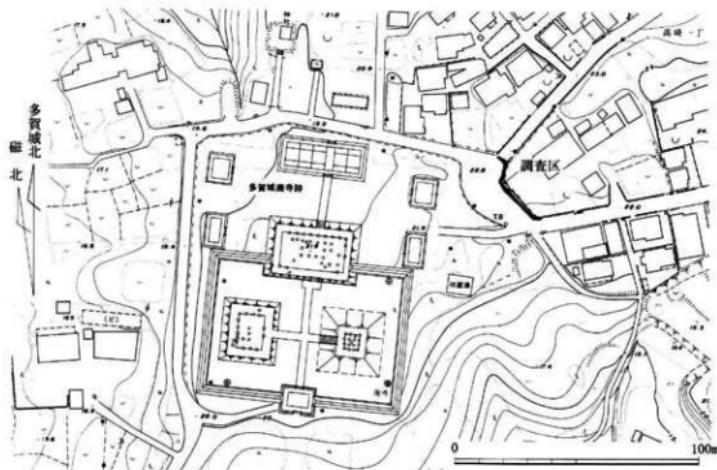
調査期間：平成 10 年 12 月 24 日・25 日

原因：側溝改良工事

発掘調査面積：48 m<sup>2</sup>

##### 1) 調査区

多賀城廃寺跡東倉の東約 30m に位置する。標高は約 22m でほぼ平坦である。調査区は市道高崎 2 号線の北側道路側溝に沿う形で、東西方向に約 32m、幅約 1.5m 設けた。調査面積は約 48 m<sup>2</sup>である。

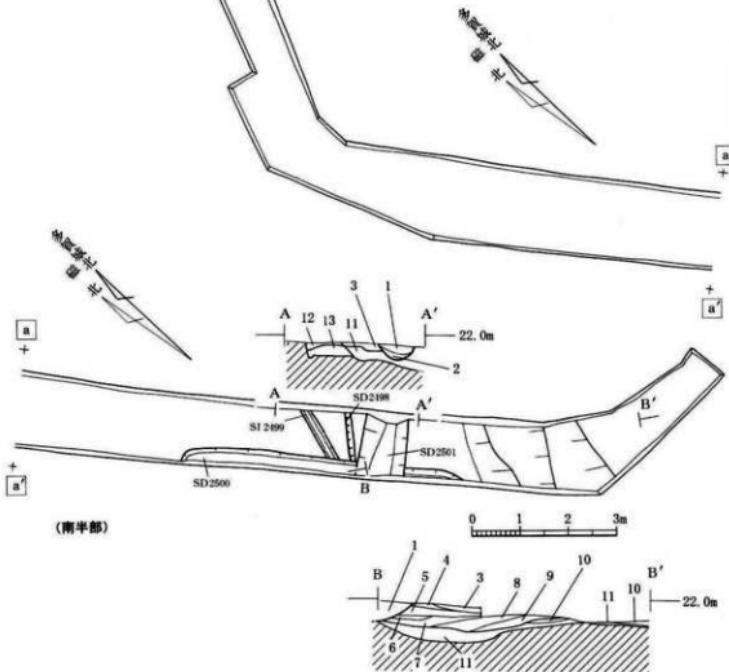


第 32 図 多賀城廃寺跡地区発掘調査区

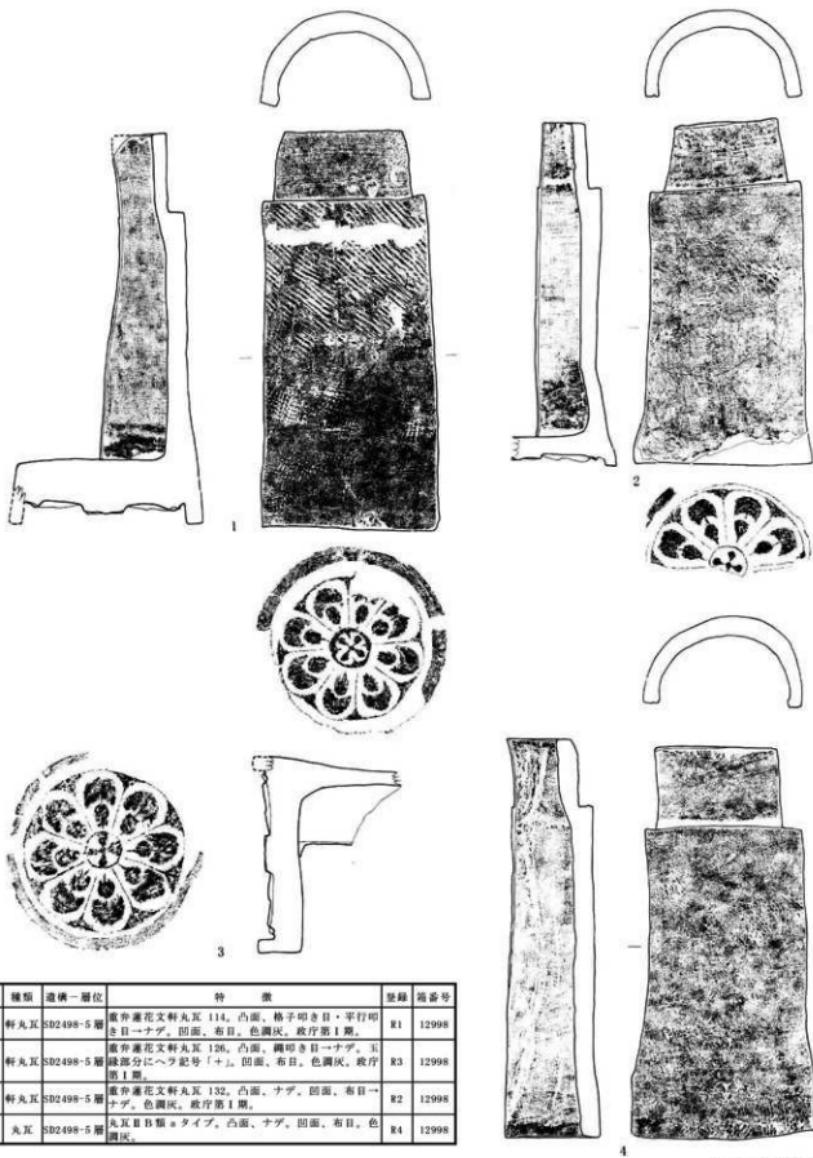


(北半部)

No.	土色・土性	備考
1	黒褐色	【SD2501 深一堆积層第1層】 地山ブロックを含む。
2	灰色土	【SD2501 深一堆积層第2層】 地山粘土を多く含む。堅地層。
3	黄褐色粘質土	【SD2499 深一堆积層第3層】 地土ブロックを全体に含む。堅地層。
4	暗灰黄色粘質土	【SD2499 深一堆积層第4層】 地土ブロックを含む。
5	黄灰色粘質土	柴地層。山粘土を多く含む。堅地層。 【SD2498 深一堆积層第5層】
6	灰色粘土	【SD2498 深一堆积層第6層】 地山粘土を多く含む。堅地層。
7	黄灰色粘土	【SD2498 深一堆积層第7層】 地山粘土・遺物を多く含む。堅地層。
8	オリーブ褐色粘土	【SD2498 深一堆积層第8層】 地山粘土を多く含む。堅地層。
9	オリーブ褐色粘土	【SD2498 深一堆积層第9層】 地山粘土を多く含む。堅地層。
10	灰色粘土	水性堆積層。【SD2498 深一堆积層第10層】
11	青灰色粘土	水性堆積層。【SD2498 深一堆积層第11層】
12	黄褐色土	【SI2499 住居跡-堆积層第1層】
13	青灰色粘土	【SI2499 住居跡-堆积層第2層】
14	青灰色砂質土	地山。【基本層序第2層】



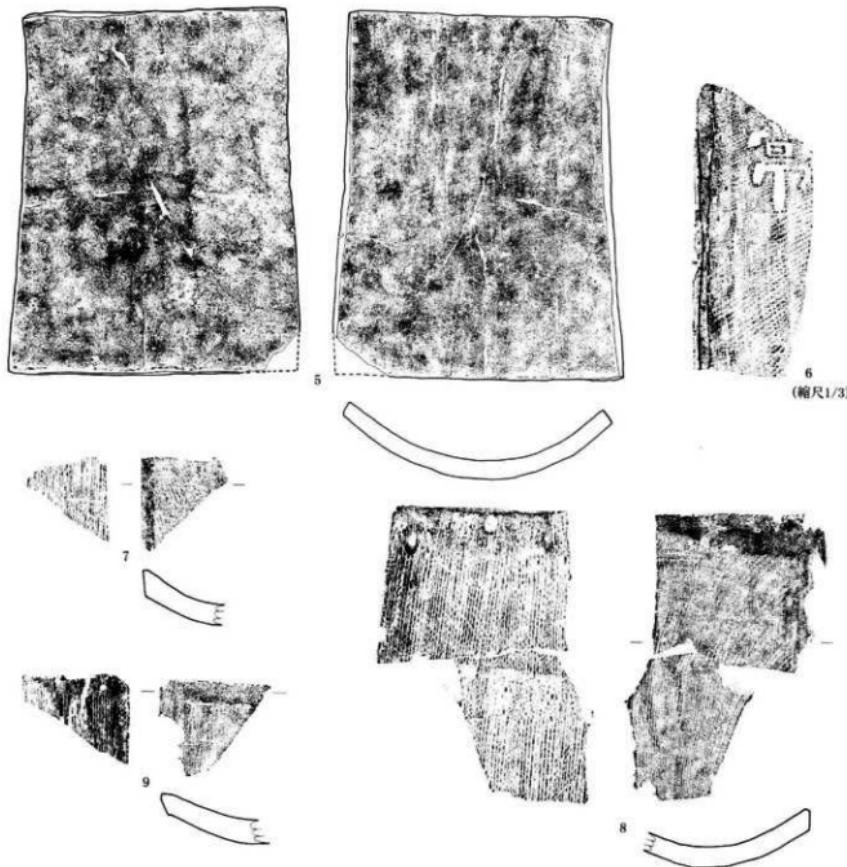
第33図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)



No.	種類	遺構・部位	特 質	登録	番号
1	軒丸瓦	SD2498-5 層	重井蓮花纹軒丸瓦 114。凸面、格子叩き目・平行叩き目→ナデ。凹面、布目。色調灰。政序第1期。	R1	12998
2	軒丸瓦	SD2498-5 層	重井蓮花纹軒丸瓦 126。凸面、圓叩き目→ナデ。玉頭部分にヘラ記号「+」。凹面、布目。色調灰。政序第1期。	R3	12998
3	軒丸瓦	SD2498-5 層	重井蓮花纹軒丸瓦 132。凸面、ナデ。凹面、布目→ナデ。色調灰。政序第1期。	R2	12998
4	丸瓦	SD2498-5 層	丸瓦 B 型 a タイプ。凸面、ナデ。凹面、布目。色調灰。	R4	12998

(1~4)は縮尺1/5

第34図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事出土遺物（1）



(5, 7~9は縮尺1/5)

No.	種類	遺構-部位	特徴	登録	通番号
5	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 TA型。凸面、ナゲ。凹面、布目→ナゲ。色調灰。段序第1期。	B5	12998
6	平瓦	SD2498-5層	平瓦 IC型aタイプ。凸面、ナゲ→切打叩き目。凹面、布目。海部骨針を含む。色調灰。段序第1期。	B6	12998
7	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B型aタイプ。凸面、調叩き目(縦位)。凹面、布目→ナゲ。色調黒灰。	B7	12998
8	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B型aタイプ2。凸面、調叩き目(縦位)。凹面、布目→ナゲ。色調灰。	B8	12998
9	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B型bタイプ2。凸面、調叩き目(縦位)。凹面、布目→ナゲ。色調灰。段序第2期。	B9	12998

第35図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事出土遺物（2）

## 2) 基本層序

基本層序は表土である第1層(褐色土)で、その直下が地山である第2層(黄褐色土)である。

## 3) 発見した遺構と遺物(第33~35図、写真図版12-6、14-37~42)

発見した遺構に堅穴住居跡1棟と溝3条がある。遺構の確認は調査区東において、地山面で行っている。調査区西では、道路建設に際し大きく削平され、遺構は検出されない。遺構の年代は、出土遺物からS I 2498住居跡とS D 2499溝の廃絶は多賀城跡政府第III期以後で10世紀前葉より古い古代、S D 2500溝とS D 2501溝については10世紀前葉より新しい遺構である。

**【S I 2499 住居跡】**S D 2498溝、S D 2500溝、S D 2501溝と車複し、これらのいずれよりも古い。遺構検出は住居跡の西辺の一部のみである。西辺が北から約16°東へ偏る。壁の残存は深さ35cmで、壁際に幅約15cm、深さ約10cmの周溝が巡る。堆積層は、黄褐色土と青灰色粘土の2層に区分した。遺物は、堆積層第1層と第2層から平瓦I A類・I C類・II A類・II B類aタイプ・II B類bタイプ(政府第III期)、丸瓦II B類が出土した。

**【S D 2498 溝】**S I 2499住居跡、S D 2500溝、S D 2501溝と重複し、S I 2498住居跡より新しく、S D 2500溝、S D 2501溝よりも古い。南北に延びる溝で、溝幅の中心線が北から約27°東へ偏る。規模は幅約4.5m、深さ約1mほどで断面形は「U」形である。堆積層は黄褐色と灰色を基調とし9層に区分でき、下層の第8・9層が自然堆積層であるのに対し、第1層から第7層までは人為に埋め戻され整地している。遺物は人為堆積層である第5層から集中して出土している。重弁蓮花文軒丸瓦(型番114・126・132、政府第I期、第34図1~3)、平瓦I A類(政府第I期第35図5)・I C類(政府第I期6)・II B類aタイプ(7・8)・II B類bタイプ(政府第III期、9)、丸瓦II B類aタイプ(第34図4)がある。

**【S D 2500 溝】**S I 2499住居跡、S D 2498溝、S D 2501溝と重複し、S I 2499住居跡とS D 2498溝より新しく、S D 2501溝よりも古い。北西から南東へ延びる溝で、約5.5mの長さを検出した。大きさは幅40cm以下、深さ約15cmで、断面は「U」形である。堆積層は灰色土で、自然堆積層である。遺物は堆積層から平瓦II B類が出土した。

**【S D 2501 溝】**S I 2499住居跡、S D 2498溝、S D 2500溝と重複し、そのいずれよりも新しい。北東から南西へ延びる溝で、約1.3mの長さを検出している。大きさは幅約80cm、深さ約40cmで、断面形は台形である。堆積層は、黒褐色土と灰色土の2層に分かれ、自然堆積層である。遺物は堆積層から土師器壺・甕の破片、須恵器甕の破片、平瓦I A(政府第I期)・II B類bタイプ(政府第III期)が出土した。

(註)

灰白色火山灰の降下年代は、白鳥良一によって承平4年(934)を下限とする10世紀前半、当研究所年報では907~934の間の10世紀前葉頃と年代が与えられており、これらに従い10世紀前葉とする(白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所、1980年、31~32頁。宮城県多賀城跡調査研究所「II. 第68次調査」『年報1997』1998年、76頁。)

## IV. 付章

### 1. 関連研究・普及活動

平成 13 年度は多賀城跡発掘調査の他に、次の調査研究事業や普及活動を行った。

#### (1) 多賀城跡環境整備事業

平成 13 年度は、第 7 次 5 力年計画の 2 年目にあたり、総事業費 19,700 千円(国庫補助 50%)で柏木遺跡の環境整備として以下の工事を実施した。

##### ① 法面保護工

北西部の法面の保護を目的として、高さ約 1.0m のコンクリート擁壁を設置し、法面に張芝を施した。擁壁のデザインは昨年度実施したものと同様に、着色化粧型枠を使用して周辺の住宅地の景観と調和したもの採用した。

##### ② 園路工・階段工

###### 1) 園路工

丘陵の裾部から頂部までの動線として、車椅子の通行も可能な緩勾配の主園路(幅員 1.8m、最大勾配 8%)を設置した。この園路には、高齢者や障害者、幼児等の利用に配慮して、高さ 65cm および 85cm の 2 段式の手すりを設置した。そのほか丘陵尾根上に、遺構表示広場を右側に見ながら歩けるような副園路(幅員 1.2m、最大勾配 12.3%)を設置した。路面はこれまで多賀城跡の環境整備で採用してきたカラー樹脂舗装とした。

###### 2) 階段工

副園路のうち、勾配が急で、斜路では対応できない部分 3 箇所に階段を設置した。蹴上は 15cm とし、踏面は勾配にあわせて 30cm もしくは 60cm とした。階段面は粗面仕上げの陶板タイルを採用し、階段両側に園路の手すりと同仕様の 2 段式手すりを設置した。

##### ③ 植栽工

西側丘陵頂部に高木(クヌギ・コブシ・イロハモミジ)を植栽した。

##### ④ 雨水排水工

対象地北側に隣接する住宅地との境界に排水溝(コンクリート製 U 形溝)を設置した。

#### (2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

当研究所では、特別史跡内の遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかし、やむなく特別史跡内の現状を変更するにあたっては、申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。

平成 13 年度における現状変更申請は 10 件あった(表 3)。その内容は次のとおりである。

番号	申請者/申請地	変更事業	対応
1	菊池つみ / 多賀城市市川字城前 79	擁壁設置 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	発掘調査
2	宗教法人 玉川寺代表役員 村上幸尾 / 多賀城市市川字城前 27	仮本堂等 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
3	(株)千葉重機千葉昌一 / 多賀城市市川字城前 76-1	駐車場整備 平成 13 年 3 月 30 日 県教委許可	立会
4	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字立石地内	あやめ室内板設置 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
5	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字田屋場地内	あやめまつり 平成 13 年 3 月 30 日 県教委許可	立会
6	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字六月坂 19-2	岩塙改修 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
7	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字城前 65 他 1 築	感神コンサート 平成 13 年 5 月 30 日 県教委許可	立会
8	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字城前	国体・万葉まつり 平成 13 年 5 月 30 日 県教委許可	立会
9	菊池良子 / 多賀城市市川字五万崎 17	擁壁設置 平成 13 年 8 月 22 日 県教委許可	発掘調査
10	(株)千葉重機 千葉昌一 / 多賀城市市川字城前 77-1	擁壁設置 平成 13 年 11 月 9 日 県教委許可	立会

表 3 平成 13 年度実施の現状変更一覧

- ①民間工事 5 件－擁壁設置工事（1・9・10）、寺院本堂増改築（2）・駐車場造成工事（3）。
- ②公共事業 1 件－岩塙改修工事（6）。
- ③史跡の活用に関わるもの 4 件－あやめまつり（4・5）・国体炬火採火式（8）、コンサート（7）。
- 掘削を伴う擁壁設置工事の 2 件（1・9）については発掘調査を、その他現状変更が軽微なもの 8 件については工事の際に立ち会いを行った。発掘調査を行った 2 件（1・9）についての報告は、次年度以降の年報で報告する。

### （3）多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では古代多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について、計画的な調査と研究を継続的に行っている。この調査と研究事業は、中央政府が陸奥と出羽両国を支配する上で中枢的な役割を果たした古代の多賀城を、多角的な視野から解明することを目的としている。

平成 13 年度は第 6 次 5 カ年計画の 3 年度にあたり、桃生柵河北町から桃生町に位置する桃生城跡の第 10 次調査を実施した。発掘調査面積は約 600 m<sup>2</sup>である。調査にあたっては桃生町教育委員会と河北地区教育委員会の協力を得た。総事業費は 11,400 千円（50% 国庫補助）である。調査の成果は次のとおりである。

桃生城内に位置する西側丘陵南半部の丘陵頂部を発掘調査した。発見した遺構は、堅穴住居跡 5 棟、土壙 1 基である。住居跡 4 棟は、東北地方南部の土師器編年上、栗沢式期に位置づけられ、残る 1 陳も同時代のものとみられる。土壙は弥生時代の遺構とみられる。今年度の調査区では、桃生城が機能していた時期の遺構が造られていない。桃生城内の西側丘陵頂部は、本年度と昨年度（第 9 次調査）の調査成果から、桃生城の官衙施設及び同時代の住居などの施設を置かない空間といえる。この西側頂部丘陵頂部の利用については、城内でありながら意図的に施設を造らない在り方を積極的に評価すれば、眺望を目的とした場または兵士の訓練を行う場の可能性が考えられる。

#### (4) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第5次5カ年計画の4年度として、静岡県遠江国府国分寺跡、同伊豆国府・国分寺跡、宮城県仙台市郡山遺跡、宮崎町壇の越遺跡、築館町伊治城跡、矢本町赤井遺跡、河化町新出東遺跡等の調査データを収集した。さらに從来収集した各地のデータを整理し、多賀城跡及び桃生城跡と比較し検討を行った。

#### (5) 発掘調査図面のデジタル化事業

当研究所がこれまでに調査して蓄積してきた遺構実測図をデジタルデータとしてCDに記録保存することにより、発掘調査資料の恒久的な保存と、デジタル情報としての積極的な活用を可能とした。総事業費は800千円(緊急地域雇用特別基金事業)である。

#### (6) その他

##### 1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

白鳥良一・阿部恵・吾妻俊典	「桃生城跡第10次調査について」	平成13年9月15日
白鳥良一・後藤秀一・古川一明・白崎恵介	「多賀城跡第72次調査について」	平成13年10月6日

##### 2. 各機関・委員会などへの協力

白鳥良一	胆沢城跡整備指導会議	秋田市秋田城跡環境整備指導委員	払田柵跡保存管理計画策定指導委員	盛岡市志波城跡整備委員	仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員	多賀城市文化財保護委員	多賀城市環境審議委員	古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員	史跡「山王園遺跡」整備指導委員会委員	角田市郡山遺跡発掘調査指導委員	新世紀・みやぎ国体実行委員会式典専門委員会大会旗・炬火リレー部会委員	古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人
佐藤和彦	青森県史編さん委員会古代部会専門委員											
古川一明	高清水町史編さん委員											
吾妻俊典	女川町文化財保護委員											
白崎恵介	古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員	文化庁史跡等整備の在り方に関する調査研究会協力委員										
	員											

##### 3. 講演会などへの協力

白鳥良一「原始・古代の一迫」	一迫町郷土史講座（春期）	平成13年5月11日
——「北の政府・多賀城」	福岡市埋蔵文化財センター考古学講座「鴻臚館の時代9」	平成13年8月18日
——「うるしと繩文人」	山王園遺跡国指定30周年記念企画フォーラム	平成13年9月16日
——「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」	高等学校及び特殊教育諸学校高等部初任者研修	平成13年10月2日
——「多賀城と大宰府」	平成13年度第12回史跡案内ボランティア養成講座	平成13年10月25日
——「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」	小中学校及び特殊教育諸学校小中学部初任者研修	平成13年11月6日
——「多賀城時代の税と人々のくらし」	多賀城市納稅貯蓄組合長研修会	平成13年11月2日
——「伊治城と古代蝦夷」	平成13年度栗原地区高等学校社会科教育研究会例会	平成13年11月28日
——「多賀城と大宰府、そして平城宮」	平成13年度多賀城歴史探訪会学習会	平成13年12月18日

佐藤和彦「壇の碑(多賀城碑)」平成13年度東北歴史博物館開放講座	平成13年10月21日
古川一明「栗原の古墳時代」宮城県栗原郡文化財保護委員連絡協議会研修会	平成13年5月17日
吾妻俊典「古代石巻地城の歴史－桃生城－」普通科ガイダンス講話 宮城県飯野川高等学校	平成13年11月2日
――――「洛中洛外園屏風にみる都のくらし」河北地区教育委員会文化財セミナー河北地区教育委員会平成14年2月23日	
――――「莊園に生きる人々のくらし」河北地区教育委員会文化財セミナー 河北地区教育委員会 平成14年3月9日	
――――「桃生城時代の人々のくらし」河北地区教育委員会文化財セミナー 河北地区教育委員会 平成14年3月16日	
――――「米沢の史跡巡り」河北地区教育委員会文化財セミナー移動講座 河北地区教育委員会 平成14年3月23日	

#### 4. 研究発表・執筆など

後藤・古川・白崎「多賀城跡第72次調査の概要」宮城県発掘調査成果発表会	平成14年1月19日
――――「多賀城跡第72次調査の概要」第28回古代城柵官衙遺跡検討会	平成14年2月9日
後藤・吾妻・白崎「2000年度宮城県内主要発掘紹介」『宮城考古学』第3号 宮城県考古学会 平成13年5月12日	
吾妻俊典「宮城県における古墳時代前期から中期への土器様式の変化」第13回研究会宮城県考古学会古墳時代研究会	平成13年4月28日
――――「2000年の考古学界の動向 古代(東北)」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No473	平成13年5月30日
――――「東北地方における須恵器の様相」古代の土器研究会 第101回例会	平成13年6月9日
――――「桃生城跡の発掘調査からみた宝龜5年における海道蝦夷の蜂起」	
2001年度東北史学会・米沢史学会合同大会	平成13年10月7日
――――「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」	
『古代の土器研究－律令的土器様式の西東6 須恵器製作技法とその転換－』古代の土器研究会	
白崎恵介「塩竈市の水道施設」『宮城県の近代化遺産』宮城県教育委員会	平成13年11月23日
	平成14年3月30日

#### 5. 自治体職員協力の事業

協力交流研修員、中華人民共和国・敦煌研究院考古研究所館員 王平先
多賀城跡と桃生城跡の発掘調査および遺物整理を通して、所員が次のような指導を行った。
・発掘調査の流れ
・報告書作成について
・多賀城跡関連遺跡について
・多賀城跡と古代東北について
・遺跡整備について

#### 6. 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財学科専攻の大学院生の研究と指導にあたった。
白鳥良一（客員教授） 文化財科学研究演習Ⅰ「史跡の保存整備と活用（1）」
文化財科学研究演習Ⅱ「史跡の保存整備と活用（2）」
課題研究
後藤秀一（客員助教授） 文化財科学研究実習Ⅱ「発掘調査の実際」
課題研究

## 2. 組織と職員

（宮城県教育委員会行政組織規則（抄））

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城跡附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城跡附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城跡附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

（職員） 研究班

所長 白島 良一	次長（総括）・兼副参事 〔博物館兼務〕	主任研究員 （班長） 阿部 恵	
		副主任研究員 （副班長） 後藤 秀一	
		副主任研究員 佐藤 和彦 [博物館兼務]	
		副主任研究員 古川 一明	
		研究員 吾妻 俊典	
		技 師 白崎 恵介	

總 務 班

主 査	山口 英美子 [博物館兼務]
主 事	伊藤 亮一 [博物館兼務]

### 3. 沿革と実績

#### (1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年月	事項
大正 11.10 昭和 35	多賀城跡が史蹟名勝天然紀念物保存法(大正 8・4 公布)により史蹟指定。指定名称「多賀城跡附寺跡」 県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5 カ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第 1 次発掘調査実施(県教委主体、多賀町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄(東北大学教授)
37. 8	多賀城廃寺跡第 2 次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査(第 1 次)開始、以後 40 年 8 月(第 3 次)まで実施、政府地区的朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
43. 11	多賀町が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第 4 次)を再開
44. 4	宮城県多賀城防査委研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44. 10	色麻村日の出山遺跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告 1—多賀城廃寺跡—』刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48. 10	金属性地区を対象とした第 21 次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示
49. 4	多賀城間連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手(昭和 50 年度まで継続)
49. 8	ブレハバ序舎から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和 54 年度まで継続)
53. 4	研究第一科・同第二科の 2 科制となる、遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壯一郎知事から表彰を受ける
55. 3	『多賀城跡・政庁跡図録編一』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和 60 年度まで継続)、初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出
57. 1	現状変更に伴う緊急調査(第 40 次)により外郭線南辺墓地中央部で木彌発見
57. 3	『多賀城跡・政庁跡文編一』刊行
58. 11	第 43・44 次調査で政府南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60. 9	名生館遺跡開闢合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手(平成 4 年度まで継続)
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62. 11	第 53 次調査で多賀城第 1・II 期の外郭東門を発見
63. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2. 11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門・政庁間整備活用専門部会を設置
4. 11	日本最古の「かみな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊勢野京跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王千刈田地区的追加指定が官報告示
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開(平成 13 年度まで継続中)、政庁の全貌を解明
7. 6	第 31 回指導委員会において南門・政庁間整備活用計画案承認
9. 11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞

## (2) 事業実績

### 1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	次数	発掘調査地区	発掘面積(m <sup>2</sup> )	経費(千円)	計画	年度	次数	発掘調査地区	発掘面積(m <sup>2</sup> )	経費(千円)		
第1次計画	昭和44	5次	政府地区南東部	1,980	9,000	第4年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000		
		6次	政府地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750			
		7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	364				47次	外郭西辺中央部	1,000			
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		昭和60	48次	外郭北門地区	800	29,000		
		9次	政府地区南西部	2,046				49次	外郭北門推定地区	450			
		10次	外郭西辺中央部	495			昭和61	50次	政府南地区	900	29,000		
	昭和46	11次	外郭東辺南部	660				51次	外郭北門東側地区	500			
		12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000		昭和62	52次	大須地区及び東辺外の地区	500	29,000		
		13次	外郭東辺東門付近	1,600				53次	外郭東門北地区	1,000			
		14次	外郭東地区北部	2,086			昭和63	54次	外郭東門東地区	1,000	29,000		
	昭和47	15次	港の池周辺	112	15,000			55次	外郭東辺中央部(作貢地)	500			
		16次	政府地区北半部	1,320	平成元年計画		56次	大須地区北半部	1,550	29,000			
		17次	外郭東地区・北西隅	1,729			57次	外郭東辺南北半部(西沢地区)	300				
第2次計画	昭和48	18次	外郭中央地区北半部	2,937	17,000		平成2年計画	58次	大須地区中央部	1,470	30,000		
		19次	政府地区北西隅	2,640				59次	大須地区中央部東側	900			
		20次	外郭南辺中央部	990			平成3年計画	60次	大須地区中央部	1,450	30,000		
	昭和49	21次	外郭南地区中央部	1,485				61次	港の池地区	150			
		22次	城外南方(高平道路)	3,465			平成4年計画	62次	大須地区南半部	1,100	35,000		
	昭和50	23次	外郭東地区北半部(字大塙)	3,500	17,000			63次	大須地区北半部	1,700			
		24次	外郭南東隅	2,640	平成5年計画		64次	大須地区北部	3,000	35,000			
	昭和51	25次	多賀城寺跡南門推定地	2,310			22,000			65次	外郭東門北部	1,800	36,000
		26次	多賀城寺跡南門付近	2,310	平成6年計画		66次	現状変更に伴う調査	400				
		27次	春日社宮跡市川大久保地区	660			67次	大須地区北西隅	3,000				
第3次計画	昭和52	28次	五万崎地区	2,310	22,000		平成7年計画	68次	大須地区西部	3,000	39,000		
		29次	五万崎地区	2,310				69次	人頭地区西部	2,650			
	昭和53	30次	五万崎地区	1,990	22,000		平成8年計画	70次	多賀城碑複数の解体修理に伴う発掘調査				
		31次	政府北方隣接地区	1,990				71次	城南地区南部	2,000	36,000		
	昭和54	32次	政府北方隣接地区	1,000	22,000		平成9年計画	72次	城南地区南部	2,000	37,700		
		33次	外郭南門地区	1,000				73次	城南地区南部	2,000			
	昭和55	34次	畜山地区南低窪地	1,300	30,000		平成10年計画	74次	南門西園施設跡	1,000	28,900		
		35次	港の池南地区	900				75次	南門一政行間道跡				
	昭和56	36次	外郭東地区中央部作貢地	1,800	35,000		平成11年計画	76次	南門東側施設跡		32,300		
		37次	多賀城外南地方(押野川東岸)地区	700				77次	南門一政行間道跡				
第4次計画	昭和57	38次	作貢南端低窪地(緊急調査)	50	35,000		平成12年計画	78次	城南南北大路跡とその東側の状況				
		39次	外郭東地区中央部作貢地区	2,500				79次					
		40次	外郭南辺低窪地東半中央部(立石地区・緊急)	80				80次					
	昭和58	41次	外郭東地区南端部(田原屋町堀跡)	1,200	32,000			81次					
		42次	外郭東地区中央部(政府南方)	500				82次					
	昭和59	43次	外郭東地区中央部(政府南方)	800	32,000			83次					
		44次	外郭中央地区中央部(政府南方)	2,500				84次					

※平成13年度までは実績で、平成14年度以降は計画

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年度	対象地区	主な工事内容	面積 (m <sup>2</sup> )	事業費(千円)
第1次 5カ年 計画	昭和45	政庁地区(第1期)	南門裏廊跡・東脇廻路表示工	3,519	10,000
	昭和46	政庁地区(第2期)	正殿跡・墓地廻路表示工	7,256	20,000
	昭和47	政庁地区(第3期)	西脇廻路・墓地廻路表示工	14,669	25,000
	昭和48	政庁地区(第4期) 外郭東門地区	北西門跡・墓地廻路表示工 東門跡・整穴居跡表示工	9,415	20,000
	昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000
第2次 5カ年 計画	昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質造構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	港の池地区(第1期)	南邊墓地廻路表示工	2,000	16,000
	昭和53	港の池地区(第2期) 南門地区(第1期)	多賀城碑周辺修景工 南門跡・墓地廻路保護工	2,500	16,000
	昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000
第3 次 5 カ 年 計 画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
	昭和57	園路(資料館・南門) 外郭南門地区東斜面	園路工・便益施設工・緑化修景工	31,831	28,000
	昭和58	作賀地区(第1期)	造構保護盛土工・緑化修景工	54,400	30,000
	昭和59	作賀地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,750	27,000
第4 次 5 カ 年 計 画	昭和60	作賀地区(第3期)	造構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	7,470	27,000
	作賀地区	便益施設工			
	雀山地区	緑化修景工			
	昭和62	作賀地区北部 政庁地区	園路工・緑化修景工・便益施設工 便益施設工・園路工・緑化修景工		
	昭和63	雀山地区	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,130	27,000
	平成元	作賀地区北部・丘陵南北側部	便益施設工・園路工・緑化修景工		
第5次 5カ年 計画	平成2	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000
	平成3	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112
	平成4	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工	2,900	30,000
	平成5	北辺地区北半部(第3期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成6	東門・大畠地区東側部(第1期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成7	東門・大畠地区東側部(第2期)	便益施設工	550	35,000
第6次 5カ年 計画	平成8	東門・大畠地区東側部(第3期)	東門・大畠地区西側北半部(第1期)	3,120	30,000
	平成9	東門・大畠地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成10	東門・大畠地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
	平成11	南門地区	多賀城碑覆屈解体修理工	50	
	平成12	東門・大畠地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
	平成13	東門・大畠地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工		
第7次5 カ年計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	造構保護造成工・排水工・法面保護工	3,800	14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	法面保護工・園路階段工・植栽工・排水工		

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	経費 (千円)
第1次 5カ年 計画	昭和 49	桃生城跡	地形図作成 第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2500
	昭和 50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和 51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和 52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和 53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次 5カ年 計画	昭和 54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和 55	名生館遺跡	地形図作成 第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和 56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和 57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区的調査	1,156	7,000
	昭和 58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区的調査	1,020	7,000
第3次 5カ年 計画	昭和 59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区的調査	1,800	6,300
	昭和 60	名生館遺跡 合戦原窯跡	第6次発掘調査 閑連窯跡調査	範囲確認調査 閑連窯跡調査	1,300	6,300
	昭和 61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和 62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和 63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第4次 5カ年 計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成 2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成 3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成 4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成 5	下伊場野窯跡	地形図作成 発掘調査	多賀城創建期窯跡調査	600	14,000
第5次 5カ年 計画	平成 6	桃生城跡	地形図作成 第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成 7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20000
	平成 8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成 9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成 10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17000
第6次 5カ年 計画	平成 11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成 12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成 13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成 14	亀岡遺跡	第1次発掘調査			
	平成 15	亀岡遺跡	第2次発掘調査			

※平成13年度までは実績で、平成14年度以降は計画

#### 4) 研究成果刊行物

##### ①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969』(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971』(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972』(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973』(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975』(第 25・26・27 次調査、東外郭線南端部緊急発掘)	昭和 51 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976』(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977』(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978』(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980』(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981』(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982』(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984』(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986』(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987』(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』(第 53・54・55 次調査)	平成元年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989』(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990』(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993』(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995』(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996』(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』(第 68 次調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998』(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999』(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2000』(第 71 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001』(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月

##### ②多賀城闇連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡 I』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡 II』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『伊治城跡 I』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡 II』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡 III』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生館遺跡 I』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生館遺跡 II』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生館遺跡 III』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生館遺跡 IV』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月
『名生館遺跡 V』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生館遺跡 VI』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡 I』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡 II』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡 III』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成元年 3 月
『東山遺跡 IV』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡 V』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡 VI』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡 VII』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊場野窯跡』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城跡 III』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡 IV』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡 V』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡 VI』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡 VII』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡 VIII』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月
『桃生城跡 IX』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 26 冊	平成 13 年 3 月
『桃生城跡 X』	多賀城闇連遺跡発掘調査報告書第 27 冊	平成 14 年 3 月

##### ③研究紀要

『研究紀要 I』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要 II』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要 III』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要 IV』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要 V』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要 VI』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要 VII』	昭和 55 年 3 月

##### ④調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和 50 年 3 月
『多賀城漆紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡一政府跡図録編一』	昭和 55 年 3 月
『多賀城跡一政府跡本編一』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東北』	昭和 60 年 3 月

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしょねんぼう 2001							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001							
副書名	多賀城跡－第 72 次調査－							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2001							
編著者名	後藤秀一・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1 丁目 22 番 1 号							
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 20 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町 村	遺跡 番号	° ° °	° ° °			
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 第 72 次調査	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ うきしま 市川・浮島	04209	004	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 30 秒	2001.4.24 ～ 2002.2.28	1,000 m <sup>2</sup>	調査計画 に基づく 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城柵遺 跡	奈良時代 ～ 平安時代	築地塀跡	1 条	○ 瓦(軒丸瓦・軒平 瓦・平瓦・丸瓦・ 鬼瓦) ○ 鉄製品(鉄鎌・鉄 刀) ○ 須恵器(堤瓶・壺)	1. 外郭南門西側の築地塀跡 の構造と変遷を確認した。 2. 外郭南門北側での政庁一 南門間道路跡の変遷が明ら かとなった。 3. 調査区西部の築地塀基礎 整地下で横穴墓を 2 基発見 した。		

# 写 真 図 版

## 写真図版 1

調査区遠景  
(南上空から)

[フィルム D23178A]



調査区全景  
(北西上空から)

[フィルム D 23186A]



築地跡  
(北上空より)

[フィルム D 23194A]



築地跡  
(南より)

[フィルムD 23268A]



同上 積み手の違い  
(南より)

[フィルムD 23272A]



同上  
(南より)

[フィルムD 23273A]



写真図版 3

築地壠跡断面  
A-A' (南西より)

[フィルムD 23279A]



同上  
B-B' (東より)

[フィルムD 23291A]



同上  
C-C' (南より)

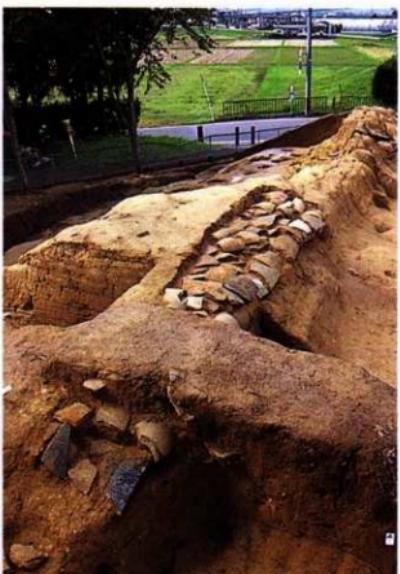
[フィルムD 23306A]



写真図版 4



築地堀跡断面C-C'（南より）  
〔フィルムD 23313A〕



築地堀跡e補修（北東より）  
〔フィルムD 23274A〕



南門と築地堀跡の位置関係（東より）  
〔フィルムD 23341A〕

写真図版 5

S D2657 溝断面  
(北より)

[フィルムD23208C]



S D2658 溝断面  
(北より)

[フィルムD23212C]



S X2664 整地層  
(南より)

[フィルムD23243A]





調査区東部（西上空より） [フィルムD23198A]



調査区東部（西より）  
[フィルムD23235A]



近世の碑文（東より）  
[フィルムD23439A]

積文

東

□

□

尔

□

□

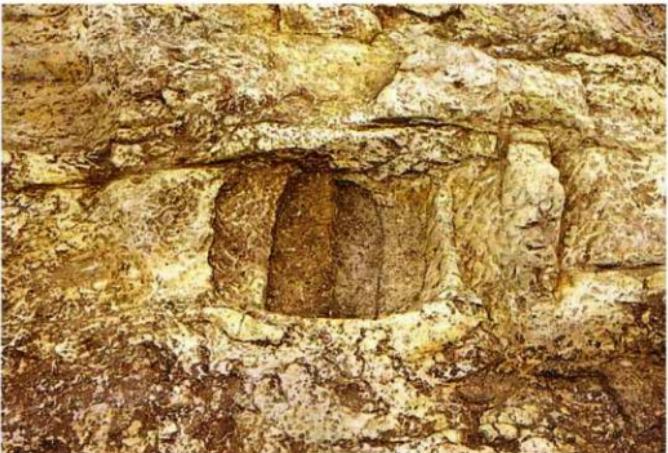
米

寛政五年九月十八日

写真図版 7

横穴墓  
(西より)

[フィルムD 23225A]



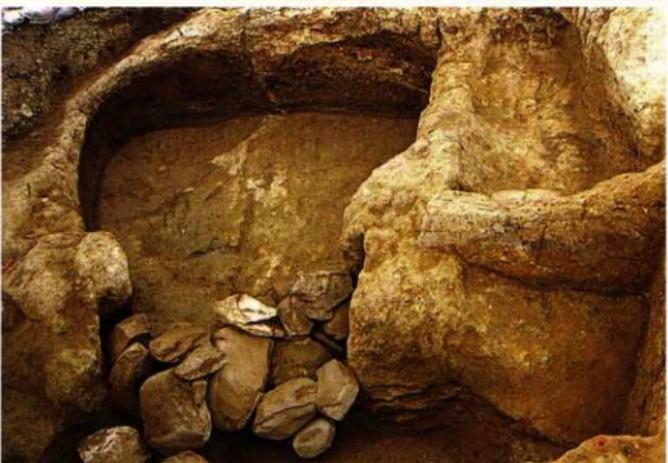
横穴墓と基礎整地  
(北より)

[フィルムD 23221C]



S K2665 土壙  
(南より)

[フィルムD 23228A]

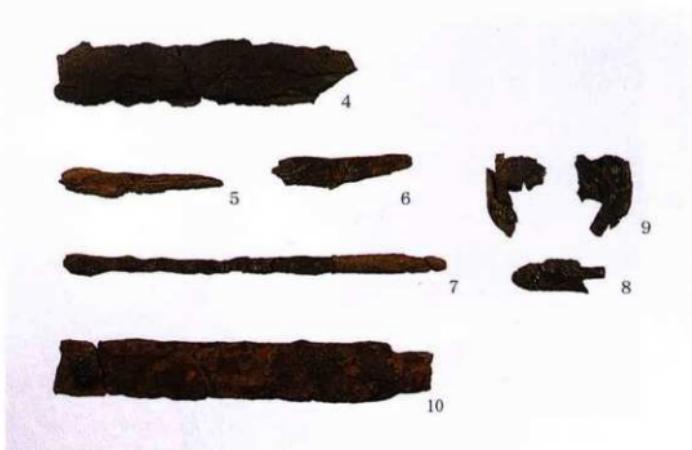




S P 2661 横穴墓出土 須恵器壺・提瓶 [フィルムD23373A]



S P 2661 横穴墓出土直刀 [フィルムD23418]



S P 2661 横穴墓出土直刀4・刀子5、6・鐵鏃7、8・鉗9  
S X 2664 整地層出土直刀10 [フィルムD23417]



1. S F 202e 瓦積  
640 単弧文軒平瓦  
[フィルム D 23384]



2. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
640 単弧文軒平瓦  
[フィルム D 23387]



3. S F 202e  
瓦積平瓦 (凸面稜妻状叩)  
[フィルム D 23378]



4. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
221~223 軒丸瓦  
[フィルム D 23403]



5. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
311 か 313 軒丸瓦  
[フィルム D 23404]



6. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
平瓦 II C 類回面記号+  
[フィルム D 23435]



7. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
243 軒丸瓦  
[フィルム D 23401]



8. 南第 10 層  
(S F 202e 崩壊土) 出土  
953 鬼瓦  
[フィルム D 23405]



9. 南第 10 層 (S F 202e 崩壊土) 出土  
243 軒丸瓦、裏面刻印「伊」 [フィルム D 23423・23424]



10. S F 202e 瓦積  
平瓦 II B 類 a タイプ  
回面刻印「丸」一 A [フィルム D 23377]



1. S X2664 整地層出土  
450 陰刻花文軒丸瓦か  
[フィルムD23408]



2. S X2675 整地層出土  
451 陰刻花文軒丸瓦か  
[フィルムD23406]



3. S X2664 整地層出土  
420 宝相華文軒丸瓦か  
[フィルムD23407]



4. S X2675 整地層出土  
721 軒平瓦か  
[フィルムD23428]



5. S X2664 整地層出土  
660 均整唐草文軒平瓦  
[フィルムD23389]



6. S X2675 整地層出土  
721A 軒平瓦か  
[フィルムD23385]



7. 表土出土 軒棧瓦  
[フィルムD23392]



8. 表土出土 953 鬼瓦 [フィルムD23425・23426]



9. 表土出土 三巴文軒丸瓦  
[フィルムD23416]



10. 表土出土  
連珠三巴文軒丸瓦  
[フィルムD23402]



11. 表土出土  
唐草文軒平瓦  
[フィルムD23393]

## 写真図版 11

1. 鈴木清住宅の発掘調査  
(西から)

[フィルムA 1675-2]



2. 亀山安雄宅の発掘調査  
(西から)

[フィルムB 10831]



3. 佐藤文男宅の発掘調査

[フィルムA 1569-11]



4. 菊池傳吉宅の発掘調査  
西区⑦断面図  
(西から)

[フィルムD 21471A]





5. 開山今朝夫宅の発掘調査  
(東から)

[フィルム D22035A]



6. 多賀城庵寺地区の発掘調査  
(南から)

[フィルム D21507A]

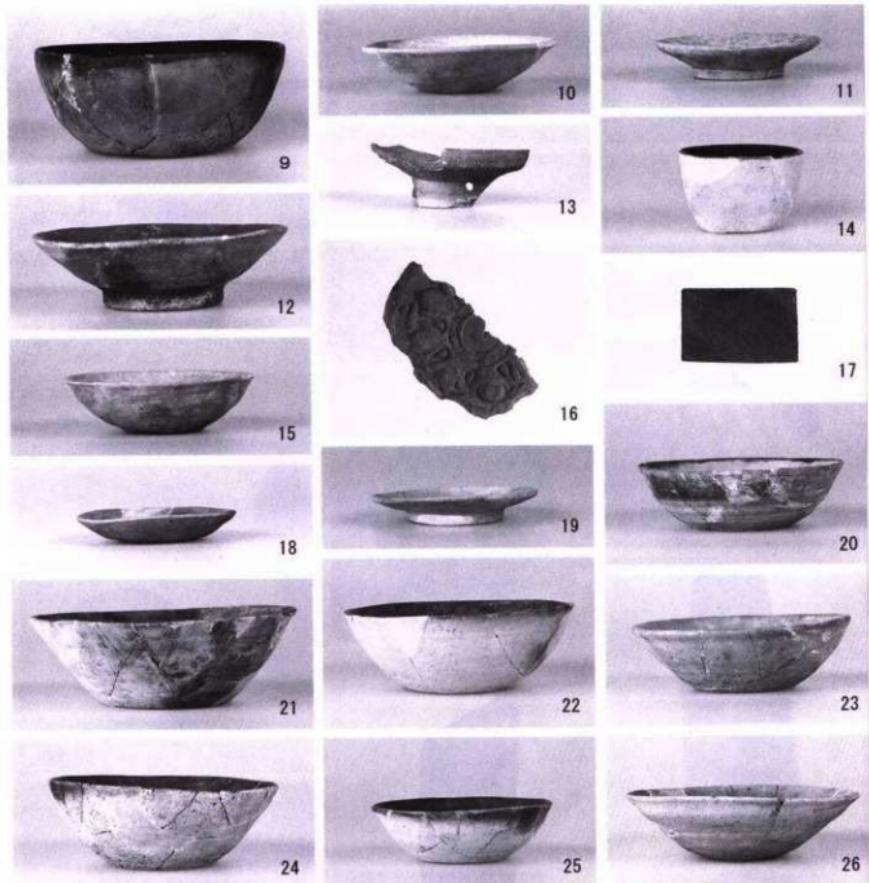


7. 佐藤茂登子宅の発掘調査  
(南西から)

[フィルム A1604-33]

8. 佐藤みつ子宅の発掘調査  
(北から)

[フィルム D21479A]

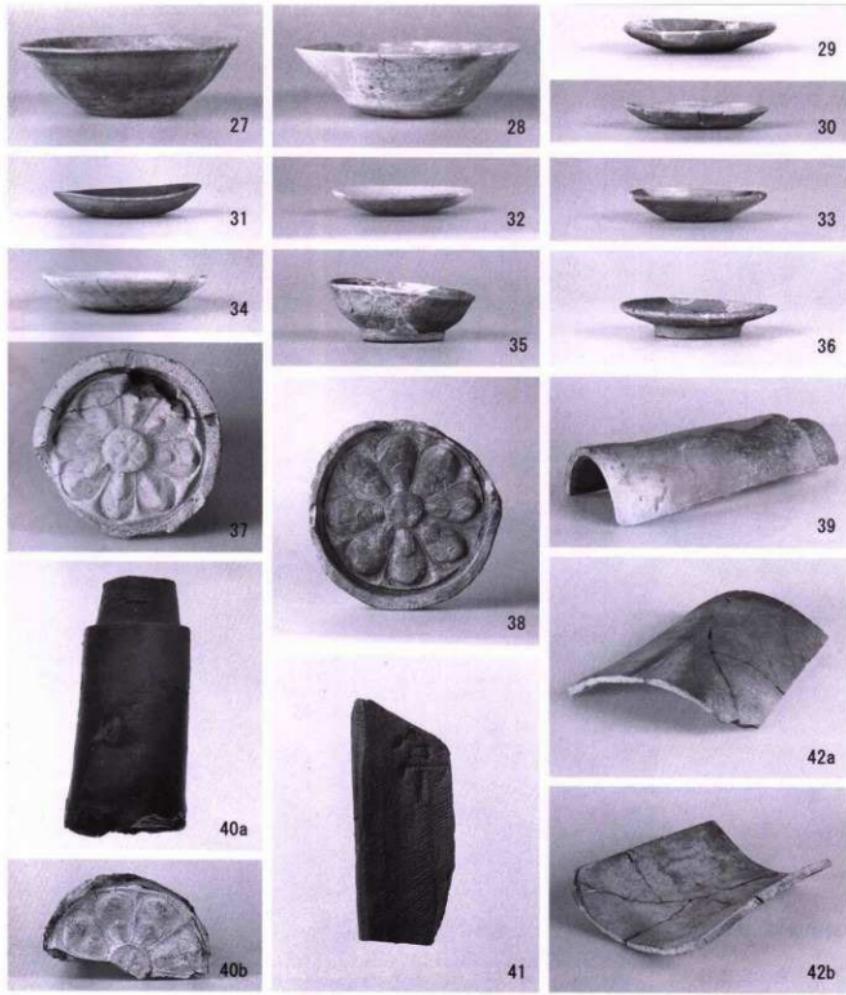


写真図版 13 現状変更 (1995~1998) 出土遺物 (1)

9~17 亀山安雄宅 (9 : 11層、10 : 6層、11・12 : 4層、13 : 3層、14~17 : 2層)

18~26 佐藤茂登子宅 (18・19 : SK2581 土壙、20 : 8層、21~23 : 7層、24~26 : 6層)

- |             |               |             |               |
|-------------|---------------|-------------|---------------|
| 9、土師器坏      | [フィルムB 11074] | 18、須惠系土器坏   | [フィルムB 11088] |
| 10、須惠系土器坏   | [フィルムB 11070] | 19、須惠系土器高台坏 | [フィルムB 11089] |
| 11、須惠系土器高台坏 | [フィルムB 11071] | 20、須惠器坏     | [フィルムB 11079] |
| 12、須惠系土器高台坏 | [フィルムB 11072] | 21、土師器坏     | [フィルムB 11080] |
| 13、須惠器高台坏   | [フィルムB 11073] | 22、土師器坏     | [フィルムB 11082] |
| 14、土師器坏     | [フィルムB 11075] | 23、須惠器坏     | [フィルムB 11081] |
| 15、須惠系土器坏   | [フィルムB 11076] | 24、土師器坏     | [フィルムB 11087] |
| 16、軒丸瓦      | [フィルムB 11078] | 25、土師器坏     | [フィルムB 11086] |
| 17、石带の巡方    | [フィルムB 11077] | 26、須惠系土器坏   | [フィルムB 11083] |



写真図版 14 現状変更 (1995~1998) 出土遺物 (2)

27~36、佐藤茂登子宅 (27・28: 6層、29~36: 3層)

37~42、多賀城廐跡北東の道路側溝改良工事 (37~41: SD2448-5層、42: SD2448 堆積層)

- |           |              |             |                    |
|-----------|--------------|-------------|--------------------|
| 27、須恵系土器壺 | [フィルムB11084] | 35、須恵系土器高台壺 | [フィルムB11092]       |
| 28、須恵系土器壺 | [フィルムB11085] | 36、須恵系土器高台壺 | [フィルムB11097]       |
| 29、須恵系土器壺 | [フィルムB11094] | 37、軒丸瓦      | [フィルムB11059]       |
| 30、須恵系土器壺 | [フィルムB11095] | 38、軒丸瓦      | [フィルムB11062]       |
| 31、須恵系土器壺 | [フィルムB11090] | 39、丸瓦       | [フィルムB11066]       |
| 32、須恵系土器壺 | [フィルムB11096] | 40、軒丸瓦      | [フィルムB11065・11063] |
| 33、須恵系土器壺 | [フィルムB11093] | 41、平瓦       | [フィルムB11069]       |
| 34、須恵系土器壺 | [フィルムB11091] | 42、平瓦       | [フィルムB11068・11067] |

---

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001  
多賀城跡

平成14年3月20日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市高崎一丁目22-1  
TEL (022)368-0102  
FAX (022)368-0104  
印刷所 東社印刷株式会社

---

---